ISSN 0385-2210

JOURNAL OF MONGOLIAN STUDIES

モンゴル研究

No. 29·30

創刊 30 号記念号

創刊 30 号 記念号発行に際して

《論　文》

モンゴルの屠畜から日本の食育について考える　野本 悠紀子

モンゴル羊毛の再評価について
– 内モンゴルの事例から –　阿路思（あるす）

《研究ノート》

モンゴル国における放牧地の生物多様性の保全活動に関する研究
– タルバガの保全的移植の事例を通して –　ジャルガルサイハン・ラマー

地域の資源と人々に根ざした企業の誕生
– モンゴル国フブスグル県におけるお茶づくりの事例から –　D. ツェレンナドミド

《追　悼》

内藤君のこと　松岡 正喜

内藤 恭介さんへ　芝山 豊

谷 博之君を偲んで　千載 正信

中西 和隆君を偲んで　千載 正信

《創刊 30 号記念特集》

「明日に向って」
〈インタビュー〉: モンゴルから日本、日本からモンゴル
～ 小貫雅男先生にお会いして ～　T. エネビシ

『モンゴル研究』第 1 号～第 28 号 目次一覧

モンゴル研究会

大 阪

2018

創刊30号記念号発行に際して

吉 本 周 平

「モンゴル研究」も30号を数えることになりました。創刊号を世に送り出して43年数ケ月、モンゴル研究会が生れてからほぼ半世紀たちます。大阪外国語大学モンゴル語学科の学生が主体であった研究会も、日々の議論と週例会、夏合宿、フィールドワークという活動形態に、月例会が加わり、卒業生が増え平均年齢が上がるとともに、少なくとも『モンゴル研究』については月例会が主体となっていきます。会員の幅が広がり、年齢や職業も多様、モンゴルからの留学生（本号の編集長はT. エネビシさん）も多く、そもそも大学の枠も、大阪という枠も超えています。「モンゴル研究」の発行も電子出版となりより多くの方々に読んでいただけるようになりました。この間、ソ連が、ベルリンの壁が崩壊し、中国も変化が大きく、モンゴル人民共和国はモンゴル国となりました。次々と新しい科学技術が生まれ、数々の人災・天災も経験しながら、世界は政治的、経済的、社会的に、そして文化的にも大きく変動し、モンゴルおよびモンゴルをめぐる状況も変わり続けています。当然ながら、日本も。

しかし、何が変わり、何が変わらず、私たちはどこに向かおうとしているのでしょうか。ここで「私たち」とは、「あなたたち」や「あの人たち」を排除する狭い「私たち」ではありません。「私たち」とかまえて、敵をつくったり欺いたりして利を得ようとする「私たち」ではありません。「私たち人間」が大前提です。私たちは、学びあい、事実・真実を知るとともに、それを単なる知識や情報や仕事にとどめず、本来の「知」または「智」として生き暮らしていこうとするものです。「論文」の出発点もそこにあります。この姿勢こそ変わらないものだと、モンゴル研究会の「私たち」はそれを誇りに思い、最も広い意味での「私たち」として生きていくためのモンゴル研究だと考えています。

さて、この号では通常の論文や研究ノートだけではなく、記念号として特集を組みました。まずは、「明日に向かって」です。原稿を募集する際に会員に送付したメールを該当ページに掲載しておきますので、その内容から趣旨をご理解いただきたいと思います。次に、エネビシさんの小貫雅男氏に対するインタビューです。もともと特集として意図したものではなく、テープを起こしたものを読ませていただいたところ、記念号にふさわしい内容でしたので、エネビシさんと小貫雅男氏に無理を通していただき特集としたものです。これについても、小貫氏に許可をいただくために送らせていただいた手紙を転載して経緯および趣旨の紹介とさせていただきたいと思います。そして創刊号から前号までの「モンゴル研究」の目次一覧です。一度目を通してみてください。これまでの歩みがよくわかります。

なんと30号です。司馬遼太郎氏の危惧された３年、３号をはるかに超えて継続することができました。継続は力なりと申します。基本姿勢を継続し、モンゴル研究会と「モンゴル研究」を、より幅広くより質高いものとすることへのご参加とご支援をお願いいたします。次号も楽しみにしてください。そして、ともに次の記念号（50号？）を生み出しませんか。

目　　次

2018 年

『モンゴル研究』№ 29・30 創刊 30 号記念号

創刊 30 号 記念号発行に際して……吉 本　周 平……　1

《 論　　文 》

モンゴルの屠畜から日本の食育について考える

……野 本 悠 紀 子……　5

モンゴル羊毛の再評価について

― 内モンゴルの事例から ―……阿 路 思（あるす）……25

《 研究ノート 》

モンゴル国における放牧地の生物多様性の保全活動に関する研究

― タルバガの保全的移植の事例を通して ―……ジャルガルサイハン・ラマー…56

地域の資源と人々に根ざした企業の誕生

― モンゴル国フブスグル県におけるお茶づくりの事例から ―‥D. ツェレンナドミド…65

《 追　　悼 》

内藤君のこと……松 岡　正 喜……71

内藤 恭介さんへ……芝　山　　豊……75

谷 博之君を偲んで……千 載　正 信……78

中西 和隆君を偲んで……千 載　正 信……80

目　　次

2018 年

『モンゴル研究』№ 29・30 創刊 30 号記念号

〓 創刊 30 号記念特集〓

「明日に向って」

文芸的な未来と私 …… 織田　幸彦…83
二つのモンゴル …… 三上　喜美男…84
時空を越えて繋ぐもの …… 榊　正明…86
足元の希望をその先へ紡ぐ …… 三原　裕子…87
平和に生きるため歴史と向き合う …… 松村　晴恵…88
「ほとんどない」から「6 日に一回」、今はほとんど毎日モンゴル …… 荒井　幸康…89
「何のためのモンゴル研究か？」の問いを引き継ぎながら 考え続けたい…T. エネビシ…91
歴女になるには …… ♬ …… 吉本　るり子…92
子育てはモンゴルで …… 野本　悠紀子…93
老害となることを危惧しつつ …… 山本　雅博…94
安倍政治が再び日本を崩壊させる …… 松岡　正喜…95
まずは知ること そして やってみること …… 味方　慎一…99
ふわーっと幸せに …… 内田　敦之…100
この世界の片隅に暮す …… 吉本　周平…102

《 インタビュー 》

モンゴルから日本、日本からモンゴル
～ 小貫雅男先生にお会いして ～…… T・エネビシ …103

『モンゴル研究』第 1 号～第 28 号 目次一覧 ……125

г а р ч и г

2018 он

“ Монгол судлал ” сэтгүүл №29 • 30
Сэтгүүлийн 30 жилийн ойн дугаар

Сэтгүүлийн 30 жилийн ойн дугаарыг эрхлэн гаргах тухай .....Ёшимото Шүхэи..... 1

« Эрдэм шинжилгээний өгүүлэл »

Монголын " Мал төхөөрөх зан үйл"-ийн байр сууринаас Японы хооллолтын боловсрол (шюукүйкү)-ийн талаар авч үзэх нь .....Номото Юкико..... 5

Монгол хонины ноосны үнэ цэнийг дахин үнэлэх нь – Өвөрмонголын жишээн дээр авч үзэх нь –.....Алс..... 25

« Судалгааны тэмдэглэл »

Монголд бэлчээрийн биологийн олон янз байдлыг хамгаалах чиглэлээр авч хэрэгжүүлж буй арга хэмжээ – Тарвага нутагшуулах ажлын жишээн дээр – .....Жаргалсайханы Лхамаа..... 56

Орон нутгийн байгалийн баялаг болон иргэдэд түшиглэсэн үндэсний үйлдвэрлэлийн эхлэл – Монгол улсын Хөвсгөл аймаг дахь цайны үйлдвэрлэлийн жишээг авч үзэх нь – .....Даваадорж Цэрэннадмид..... 65

« Эмгэнэлийн үг »

Эрхэм нөхөр Найтог эргэн дурсах нь ..... Мацүока Масаки..... 71

Найто Кёсүкэ таны гэгээн дурсгалд..... Шибаяма Ютака..... 75

Эрхэм нөхөр Тани Хироюкигийн дурсамж..... Сэнзаи Масанобү..... 78

Эрхэм нөхөр Наканиши Казүтакаг эргэн дурсахуй..... Сэнзаи Масанобү..... 80

« Сэтгүүлийн 30 жилийн ойд зориулсан тусгай булан »

“Угтах маргааш руу” 83

< Ярилцлага > Монголоос Япон, Японоос Монгол – Онуки Масао багштай хөөрөлдсөн нь –.....Т.Энэбиш.....103

“ Монгол судлал ” сэтгүүлийн 1-28 дахь дугаарын гарчиг..... 125

《論　文》

モンゴルの屠畜から日本の食育について考える

野本　悠紀子

はじめに

筆者は2015年夏にモンゴル国のホブド県ゼレグ村の遊牧民家庭において、羊の屠殺を初めて間近で見た。その直後にその羊の肉や内臓を食べたとき、生きていたものを自分は食べていたのだということを強く実感した。普段生活をしていて鶏・牛・豚などから得られる肉や内臓、乳製品は食べても、その食品がどのような過程で食卓まで辿り着くのかを考えたことはなかった。動物園や牧場で見る動物と、スーパーでパックされた肉や料理として出されたものに対して、同じ命を持った生き物だと意識したこともなかった。それまでなぜ深く考えずに素通りしてきたのか。それは、生活の中で屠殺を実際に目にすることも、学校で学ぶこともなかったからでは無いだろうか。家畜の飼育、屠殺、加工、販売、調理、消費が切り離され、「肉＝動物」であることを生活の中で意識する機会は無い。筆者は1990年代の初めに生まれてから今日に至るまで都市部で暮らしてきた。実際、生活をしていて屠畜を見たこともなかったし、小学校でトマトやキュウリ、サツマイモを育てた記憶はあるが、肉について学んだ機会があったかどうかは思い出せない。

日本では2005年に食育基本法が制定されて以来、5年おきに食育推進基本計画が更新されており、食に関する教育を進める動きが盛んになってきている。2017年現在において使用されているものが、2016年度から2020年度を期間とする第３次食育推進基本計画である。この冒頭で紹介されているように、伝統的食文化の喪失に対する危惧や食習慣の変化による健康被害、情報の氾濫による正しい情報入手の困難、食料自給率の低下、食料廃棄物問題などを現状の課題としている。また、同計画の基本的な取り組み方針には、食品ロスを抑えるために「（前略）動植物の命を尊ぶ機会となるような様々な体験活動や適切な情報発信等を通じて、自然に感謝の念や理解が深まっていくよう配慮した施策を講じる」とも書かれている。では、このような教育を受けている私よりも若い世代は、生きものの命をいただいていることを理解しているのだろうか。

日本とモンゴルは大きく異なる気候・風土・文化・歴史を持つが、モンゴルで実践されている家畜の屠殺や、屠殺に対する人々の考え方から、何か学べることはないだろうか。

第１章では、日本では屠殺に対して「残酷」だという認識があることを示し、人々がそう考えるように至った原因を考察する。第２章では、日本の食育の目的を説明し、食育の取り組みに関する問題点を指摘する。第３章では、モンゴルでの屠殺の方法を紹介する。第４章では、筆者作成のアンケート結果を見ながら、モンゴル人の屠殺に対する考えを見ていく。第５章では、モンゴルにおける屠殺の位置付けをヒントに、日本での食育に還元できるものがあるかを考察する。

Ⅰ　日本での屠畜に対する考え方について

１．家畜を屠殺することは「残酷」か　―あるテレビ番組から見える問題点―

テレビを点けてみると、市場や商店街で食べ歩きをする番組、料理法を紹介する番組、出演者の好き嫌いを当てる番組など、食に関する番組は少なくない。ところがその内容に目を向けると「買う」「作る」「食べる」という消費活動を取り上げていることが多く、家畜がどのように屠殺・解体・加工・調理され、食卓に運ばれてくるかを知らない、あるいは気にかけない人は多くいるのではないだろうか。魚は切り身のまま泳いでいるという認識を持つ小学生もいるという[1)]。「食べ物＝生き物」ではなく「食べ物＝スーパーで売っているもの / 料理として出てくるもの」に認識が変化していることの現れではないだろうか。

もちろん、命について考えさせる、あるいは生産活動を紹介するTV番組・映画・本などもある。その中で屠畜に対する関心が一時的に高まったものに、情熱大陸が2013年に放送した番組を挙げたい。「ニワトリを飼育、解体、そして食べる」という題名のこの舞台は福岡県久留米市の筑水高等学校である。対象は食品流通科に通う30名ほどの生徒で、生徒たちは孵化したヒナに名前をつけ、餌やりや小屋の掃除などをして育てる。最後には成長して大きくなったニワトリを自らの手で屠殺して食べるか、業者に預けて出荷するかという選択を迫られる。ほとんどの生徒が屠殺をすることを選ぶが、その中にはニワトリの首を切って血抜きをするときに躊躇する者や泣く者もいた。解体したのち最後にはクラスの皆でニワトリの肉を使った料理を作って食べる。ニワトリの誕生から最期までに関わる三ヶ月間の体験授業である。

インターネット上にはこの授業に関する当時の賛否両論のコメントが数多く見られる。批判的なコメントが多く、その中でよく使われていたのは「残酷」という言葉だった。一部を抜粋すると「残酷かどうかだと明らかに残酷」「（前略）残酷な犠牲のもとで生命を維持している事実を認識しておくことは重要」などである。このようなコメントに共通しているのは、生き物の命を奪うことに対して「残酷だ」と捉えている点である。ところが、批判する意見を書き込みながらも「だから私は肉を食べない」と主張する人は見られなかった。つまり、殺すという行為自体を「残酷だ」とする一方で、動物の肉は食べているのである。ここに矛盾が生じている。直接手を下して動物の命を奪うことが「残酷」であるならば、その肉を食べることも「残酷」ではないのか。

２．なぜ家畜を殺すことは「残酷」なのに、肉を食べることは「残酷」ではないのか

他の生き物を食べて体内に取り入れていながらも、その命が絶たれる瞬間を「残酷」だと感じるのは、普段食べているものと、命ある生き物が同じであるということを感じる場面が少ないからではないだろうか。家畜の飼育、屠殺、加工、調理、消費を行なう人が異なるということは、「見えない部分」が多いということである。以前は「ニワトリやウサギを家で飼育し、必要に応じてこれを『つぶして食う』ことは当たり前だった」（刈米 2015: 6）ようだが、現在そういった家庭はあまり見られない。家庭で屠

1）「平成21年度第1回横浜市食育推進計画検討委員会　会議録」http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/shokuiku/210702giziroku.pdf（2017/06/13取得）において、市場で魚の卸を行っている岩瀬委員のコメントに「小学生が見学に来て、市場の中を案内し、生けすを紹介します。最初驚いたのは、マグロは切り身のままで泳いでいるという認識を持ったお子さんがいたことで、魚を実際に見た事がなく、調理されたものしかない。」というものがある。

殺をすることがなくなり、学校で授業の一環として家畜を飼ったり屠殺を行ったりすることもないとなると、生き物の命をもらって生活していると実感しにくい。

また、1953年に制定された「と畜場法」では、牛、馬、豚、羊、山羊に関しては屠畜場以外の場所で屠殺・解体することが禁止されている。この法律の目的は「と畜場の経営及び食用に供するために行う獣畜の処理の適正の確保のために公衆衛生の見地から必要な規制その他の措置を講じ、もつて国民の健康の保護を図ること」[2)] である。その観点から「と畜場法」第5条では屠畜場の設置禁止場所の一つに「人家が密集している場所」を挙げている。公衆衛生への配慮ではあるだろうが、一般市民の目に触れないようにするためでもあると考えられる。それは、列車の車窓から屠場の内部が丸見えであることが理由で、施設そのものを立ち退きさせられた屠場の例もあるからである。これには屠殺という職業に対する差別の存在が影響しているのではないだろうか。

3．なぜ屠殺が生活から「見えなく」なったか　— 殺生禁止の考え —

加茂儀一（1976）『日本畜産史；食肉・乳酪篇』には、日本列島において古くから食肉が行われてきたことが書かれている。初めての殺生禁断の勅令は676年に天武天皇によって出された。それは、中国大陸から伝わってきた仏教の教えの影響を受け、牛、馬、犬、猿、鶏の5種類の動物の肉を食べることを一定の期間禁止するものだった。こういった勅令が出されたということは、裏を返すと、当時の日本においてこれらの動物の肉を食べていたということである。加茂（1976）によると、一般の人が狩猟によって猪、鹿、熊、猿、狐などを獲物としており、また、朝廷においても宍（＝肉）料理を司る宍人部（ししひとべ）を直属の部民としていたことから、天皇家でも肉食をしていたことが分かっている。

朝廷が繰り返し殺生を禁止した背景には、以下のような時代背景があったと考えられている。曹洞宗総務庁（1994）や刈米（2005）などによると、仏教における五戒の一つである殺生禁断の教えと、現世で殺生を犯したものは地獄に落ちる、あるいは来世で四獣として生まれ変わるという輪廻転生の考えが人々の間で浸透していた。その仏教的な思想と、死穢・産穢・血穢を三不浄だと考える神道的な思想によって、殺生が忌避されるようになったという。これに伴って、家畜の肉を食べることにも憚りが生じ始めた。

加茂（1976）はまた、家畜の肉食が忌避された理由を大きく分けて3つ紹介している。1つ目は、日本列島では縄文・弥生時代において牛馬は希少であり、食べる対象にはならなかったことである。当時の日本では牛馬を役畜として飼っており、牛馬は人間よりも力があり苦役にも耐えられるために尊ばれるほどだったという。2つ目に、5・6世紀ごろの日本人は狩猟を頻繁に行っており、食べるための肉が足りていたことを挙げている。狩猟で得た動物から肉・皮・角・内臓を手に入れていたため、家畜を殺して利用する必要がなかったのである。そして3つ目の理由として、大陸からの渡来人が牛や馬などの肉を食べていたことから、彼らの文化を否定し日本社会から排除しようとしたとしている。

長崎（1995: 132-133）によると「奈良朝時代になると（中略）狩猟は農に従属した作業になり、遊戯化してきた。シカやイノシシなどの猟は、いわゆる薬猟であり、薬用として肉が食べられていた」という。加茂（1976）は「日本では狩猟によって得た四足獣の肉を食うことは、仏教の殺生禁断の教えによって表面的には憚りがあったために狩猟を薬猟と称して、獲物としての鹿、猪などの四足獣の肉は精気

2）「と畜場法」（1953）第1条。

をつけるための薬餌とされて、それを食うことは認められていた」（加茂 1976: 129）と述べている。このように、当時の日本でも、動物の肉食すべてが忌避されたわけではなく、むしろ、薬餌というある種の抜け道を使い、狩猟により得た動物の肉を食べていたことがわかる。元来の狩猟が薬猟という名目でしか行えないようになり、薬餌以外の肉を食べることが禁止されるようになると、牛や馬の屠殺や皮剥ぎをした際に得られた肉を食べていた人々の仕事が賤業とみなされるようになった（加茂 1976: 178-179）という。

さらに加茂（1976）は、時代背景が皮剥ぎ職の者を差別の対象とみなす構造を生み出したという論を展開している。平安時代末期に戦乱が激しくなり社会の秩序が乱れたことで、下級武士・盗賊・浮浪者が製革業に就くようになった。その後鎌倉時代になると武家政治になり皮革は重要なものとなったが、皮剥ぎ・皮革・甲冑作りのうち、皮剥ぎの職業だけが「武家はじめ一般の人々によってより賤業とみなされるにいたった。そしてそのことが、彼らが別個の集団社会を作る原因にもなった。それはこれらの皮剥ぎ人は、従来通り皮を剥いだ牛、馬、鹿、猪の肉を食っていたからである」（加茂 1976: 179）という。さらに、徳川家康は皮剥ぎ業を賤業とみなし、1600年に皮剥ぎ職人以外が牛、馬、犬の皮を剥いで革を作るのを禁止した。一方で皮革業に携わる人々は肉を食うことが認められていたため、皮革処理や屠殺行為を行う人々が穢れたもの・忌むべきものとして考えられるようになったという。明治期に入り肉食が大々的に行われるようになった後も、屠殺や皮剥ぎなどの職業に就いていた人々への差別は残った。

今から20～30年前にも、屠場で働く人々に対する差別があったことが本に記されている。例えば、鎌田（1998）は、親が屠場で働いているという理由でいじめにあったという女性の話（鎌田 1998: 57）を紹介している。また、屠場で働いていた経験を綴った佐川（2009）の本には、「私が直接知っているだけでも、十年間で五人の若手作業員が、ここ（大宮食肉）で働いていては結婚できないからとの理由で退社していった」（佐川 2009: 57）とあるように、屠畜場で働いている本人が、屠殺に従事していることを理由に差別される可能性があると考えていたことがわかる。

II　日本における食育とは

1．食育基本法の目的

2017年現在において使用されている、第３次食育推進基本計画の元となる食育基本法が制定されたのは2005年である。それ以降新聞などのメディアが取り上げたり、学校教育の現場でも用いられたりしているため、今や多くの人が「食育」という言葉を聞いたことがあるだろう。新しく作られた言葉だと思いきや、「食育」という言葉が一般庶民の間に広まったのは100年以上も前に遡るといわれている。黒岩（2007）によると、小説家であり食養生で知られた村井弦斎が報知新聞で始めた連載「食道楽」の中で使われたことにより、多くの人が「食育」という言葉を知ることになったという。この小説の中で登場人物が「体格を善くしたければ筋骨を養うような食物を与えなければならず、脳髄を発達させたければ脳の営養分となるべき食物を与えなければなりません。体育の根源も食物にあるし、智育の根源も食物にある。してみると体育よりも智育よりも食育が大切ではないか」（村井2005: 202）という台詞を述べている。食育基本法の前文にも「今、改めて、食育を、生きる上での基本であって、智徳、

徳育及び体育の基礎となるべきものと位置付ける」[3] とあることから、1世紀以上前に使われていた「食育」という言葉を再び蘇らせたといえるだろう。

食育基本法の目的を要約すると、食環境の変化に伴い国民が健全な心身を育て豊かな人間性を育むための食育を推進するために、基本理念や国・地方公共団体の責務を明らかにし基本的な施策を定めることで健全な生活・社会の実現に寄与することである。この法律を計画的に行うために、5年ごとに食育推進基本計画が更新されてきた。2016～2020年度を期間とした第3次食育推進基本計画では、食育の定義を「様々な経験を通じて、『食』に関する知識と、バランスの良い『食』を選択する力を身に付け、健全な食生活を実践できる力を育むこと」[4] としている。また、これまでの取組と今後の展開の一つに「食料を海外に大きく依存する我が国において、大量の食品廃棄物を発生させ、環境への負荷を生じさせていることから、食に関する感謝の念や理解を一層深めることは引き続き重要であり、生産から消費に至る食の循環を意識し、食品ロスの削減等環境にも配慮する必要がある」[5] としている。これは日本が食料輸入大国であるにもかかわらず大量の食品廃棄を出していることに対する指摘であり、それを食への感謝の念と理解によって減らそうという考えである。しかし、実際の施策はどうだろうか。

2．食育の問題点：「生」や「命」に焦点を当てた取り組みの少なさ

第３次食育推進基本計画の「食育の推進に関する施策についての基本的な方針」には五つの重点課題が定められている。その中の一つ「食の循環や環境を意識した食育の推進」を掲げており、「食に対する感謝の念を深めていくためには、自然や社会環境との関わりの中で、食料の生産から消費に至る食の循環を意識し、生産者を始めとして多くの関係者により食が支えられていることを理解することが大切である」とある。つまり、食べ物（＝生き物）に対する感謝の念と、食の生産者を始めとする感謝の気持ちを醸成しようというわけである。また、第３次推進計画を元に2016年３月に農林水産省が作成した食育実践ガイドブックの冒頭には「日常生活では食の生産現場を意識することが難しくなっているなかで、食料の生産から消費に至る食の循環を意識し、また環境への理解を進めるとともに、地域に伝わる優れた食文化を未来に向けて守り伝えていくことも重要」[6] とある。そして食育活動の種類として、フードチェーン（生産→加工→流通→消費）に沿って農林漁業体験、産地見学、工場見学、市場見学などをすることが挙げられている。それら食育プログラムの主な目的として農林水産業への理解促進や環境保全、生産から加工、流通までの理解促進や食への感謝の醸成といったことが書かれている。

ところが、農林水産省のホームページを見ても、自治体等のサイトを見ても、普段食べているものが生きているものであるということを、経験として学ぶ取り組みの数は限られる。実際には、土作りから始め収穫した野菜などを料理する農業体験（品川区立浅間台小学校）などや、企業が提供する食育プログラムには、酪農園での乳搾り体験やハムの加工工場見学などが挙げられている。このような取り組みやプロジェクトによって、食の生産者を始め関係者に対する感謝の念を育むことはできるだろ

3）　食育基本法（最終改訂2015年９月）。
4）　農林水産省「政府広報オンライン」http://www.gov-online.go.jp/useful/article/201605/3.html (2016/10取得)。
5）「第３次推進計画」はじめに。
6）　農林水産省（2016）「食育実践ガイドブック」はじめに http://www.maff.go.jp/j/syokuiku/torikumi/h27_guide.html（2016/10取得）。

う。だが、食べ物となっている生き物への感謝の醸成は見込まれるのだろうか。野菜や加工品としてのハムを見ただけでは、それが「生きている」と実感して、ありがたく食べるという気持ちが芽生えるとは考えにくい。

Ⅲ　モンゴルでの屠畜

１．屠殺の方法

日本ではベルトコンベアー式の工場で家畜の屠殺を行っている。豚は炭酸ガスを浴びて意識を失った後に、牛はノッキングペン（銃口から針が出るピストル）で全身を硬直させられた後に、それぞれ喉を切られ放血させられる。その後、肢や頭の切断、皮剥ぎ、胸割り、背割りなどが行われていく。内臓は背割りにより胴体が左右に割られる前に摘出され、別の工程で仕分けられていく。モンゴルにも食肉加工場があり、日本と似たような方法で行っているところもある[7]が、ここではモンゴルの田舎での屠殺の方法を見ていく。

小長谷（1996）は屠畜の仕方を二つ紹介し、その一つに‘өрлөх’（オルルフ[8]・腹裂き方法）を挙げている。筆者がモンゴルで2015年夏と2016年夏に行ったフィールドワークでも、羊の屠殺は全てこの方法で行われていた。男性が二人で行うことが多く、そうすることで羊を固定し暴れないようにして安全かつ素早く屠殺できるからだと考えられる。まず、仰向けになった羊の前足と後ろ足をそれぞれ手や足で押さえる。主に捌いていく人が羊の後ろ足を、もう一人は前足を固定する（写真１）。捌く人がナイフで家畜の腹を10cm程縦に切り、その切れ目から素手を入れ心臓近くにある大動脈を２本の指でつまんでちぎる。このようにして家畜を絶命させる。

写真１　オルルフによる羊の屠殺

２016年８月　ナライハ区にて筆者撮影

7）　塚田（2005: 30）によると、モンゴル食肉協会はモンゴル国における屠畜の方法の割合を「遊牧民による屠畜：機械による屠畜＝８：２」としている。

8）　小貫雅男（1985: 142）によると、‘гол таслах’（ゴルタスラハ）とも。‘гол’＝動脈、‘таслах’＝切る、切断するを意味する。

もう一つは ‘нугаслах’（ノガスラハ・頸突き方法）と呼ばれる方法である。これは「（家畜の）『ノガス』と呼ばれる頚椎の最上部に小刀を突き刺し脊髄を切断する方法で（中略）ウシ、ウマ、ラクダといった大型家畜に用いる」（小長谷 1996: 140）。羊や山羊などの小型家畜に比べ大型家畜の場合、前足と後ろ足をそれぞれ縛って仰向けにするオルルフでは、万が一家畜が暴れたときに屠畜する人間への危険が高いためだと考えられる。山崎ら（1997）の報告によると「体格や体力が大きいウシ・ウマの致命傷が、『オルルフ』により与えられるとすれば、『ノガスラハ』において観察された方法よりも確実な保定が要求され、作業が困難である。また、前頭部を強打する方法によれば、一打で失神させられなかった際に、危険を伴う。さらに頸動脈を切り放血する方法によれば、絶命するまでの間は、血液を容器に受けにくいであろう。よって、大家畜に致命傷を与える方法は、絶命するまでの放血量が少ないが、屠殺の確実性が高い点で、『ノガスラハ』がもっとも適している」ということである。ただし、小長谷（1996）によれば儀礼の時に犠牲として捧げられる場合は大型家畜であれオルルフが採用されるという。ジュワイニーは『世界征服者の歴史』の中でオルルフはモンゴル帝国時代に法令化されたと記録しており、また、儀礼など特別なときにはノガスラハよりもオルルフが採用されることから、オルルフの方がより儀礼的であり伝統的な屠畜方法であると小長谷は結論付けている。

２．モンゴルの遊牧地域において

筆者はモンゴルで羊の屠殺を何回か見たが、その屠殺現場を見て「残酷だ」とは思わなかった。その理由にはいくつかのモンゴル特有の環境要因があると考える。まず、屠畜をする際の人々の様子である。筆者が羊の屠殺の写真を撮っていいかと尋ねた時、その現場にいたモンゴル人に「何でわざわざ撮るのか」「日本ではこういう風にはやらないのか」などと質問された。このことからモンゴル、特に遊牧地域の人々にとっては、自分たちで育てた家畜を自分たちの手で屠殺し食べるということが、日常的なことであるということが感じられた。日常生活の一部として屠畜が位置付けられていることは、大人だけではなく子どもにも当てはまる。大人が羊を絶命させ、皮を剥ぎ、内臓を出し、枝肉に分けるといった作業をしている横で、子どもたちは羊の胃袋を指でつついたり、切断された羊の頭部を持ち上げたりしていた。子どもは屠畜をする大人の側で、食べるために飼育し食べるために殺すということを日常の中で学んでいくのだと感じた。また、ゲルの中ではそれが羊であったとわかる枝肉の状態でぶら下げられており、料理をするときにそこからナイフで適当な量の肉を切って使っていた。頭や足もまとめて置かれていた（写真２）。「残酷だ」と感じない他の理由として、屠畜をする遊牧民の技術にある。羊を屠殺する人は手際よく羊を肉塊にしていっていた。生きていた羊が食肉になっていく過程は、日本のマグロの解体と似ていた。

写真2　ゲルの中でぶら下げられる羊の肉塊と床に置かれる頭・四肢

2015年7月　ホブド県にて筆者撮影

3．モンゴルの都市部において

筆者が2015年に三ヶ月間モンゴルに滞在していたうち、一ヶ月はウランバートル市で暮らす友人（20代・ウランバートル育ち）の家庭で過ごした。ある日友人が食事を作るときに取り出したのは羊の枝肉だった（写真3）。日本では動物の胴体ごと冷蔵庫で保存している家庭はあまりないだろう。友人の家庭では枝肉から適宜必要な分を切り分けて料理に使っていくということだった。

写真3　羊の枝肉

2015年7月　ウランバートルにて筆者撮影

これは遊牧地域で見た方法と一緒だった。都市に住む人も遊牧民のスタイルを引き継ぎ、その延長上で暮らしているようにみえた。また、バヤンズルフ市場の肉売り場には枝肉がぶら下げられており、客の注文に応じて肉の部位を量り売りしていた（写真4）。日本ではそれが動物だったとわかる肉塊を見ると「見たくない」「気持ち悪い」「怖い」などと嫌厭するのが多数派ではないだろうか。モンゴルの都会でもそれが羊だったとわかる枝肉の状態で市場やスーパーマーケットで売られているのを見ると、日本のスーパーでパックにされた肉からは「命のあった動物」ではなく、単なる「商品」に過ぎないという印象を与えられる。

写真4　胴体がぶら下げられ量り売りがされている

2015年7月　ウランバートルにて筆者撮影

2016年8月下旬に、筆者はウランバートルの中心地からおよそ20kmの郊外にあるエメールト市場に向かった。モンゴルでは2002年に制定された法律により衛生面を考慮して生きた家畜をウランバートル市内に入れてはいけないことになっている。そのため、生きた家畜を郊外で屠殺し、肉になった状態で市内に運び入れる必要がある。このエメールト市場では、生きた羊が売られ、同じ敷地内にある平屋の建物へ運ばれ、屠殺と内臓処理が行われていた。

水色の鉄製の囲いの中に羊が５～10頭ほど入っており、その囲いが10ほどあった。各囲いに一人か二人ずつ商売人がおり客に声をかけていた。客は品定めをして性別や年齢など自分たちの希望に合う羊を探していた。驚いたことは子どもの家族連れがいたことだ（写真5）。このように子どもたちは親と一緒に、自分たちがこれから食べることになる羊を見ていた。羊市場は彼らにとってはスーパーや市場での買い物の延長なのだろう。客に選ばれた羊は前足と後ろ足を縄でくくられ、荷車に乗せられ駐車場を挟んで反対側にある屠畜小屋に運ばれる。

写真５　羊の品定めをする人々

2016年８月　ウランバートル郊外にて筆者撮影

写真６　エメールト市場併設の屠殺場内部

2016年８月　ウランバートル郊外にて筆者撮影

エメールト市場内の屠畜をする場所は日本のようにベルトコンベアー式の大きな工場ではない（写真6）。

写真7　エメールト市場併設の屠殺場内部

2016年8月　ウランバートル郊外にて筆者撮影

中には白い机が10ほど置かれており、その机の前の床の上で男性が直に羊を捌いていた（写真7）。ここでも遊牧民と同じオルルフというやり方を用いていた。足を縛られた羊が三頭運ばれてきたかと思うと、一頭ずつ屠られていき次々に動かなくなっていった。机の上にはバケツやボウルが置かれ、主に女性が屠殺されたばかりの羊の内臓を洗っていた。ここで羊を買う人の中には動脈を切って絶命させる行為だけを業者にしてもらい、その後の、皮を剥いで内臓を取り出し枝肉にしていくという過程は自分たちで行う人もいるそうだ。都市部に暮らす人々も家畜の枝肉を購入したり、伝統的な方法で屠殺を行ったり、その現場を日頃から見たりしていることがわかった。

Ⅳ　モンゴルでの屠畜に対する考えは変化しているか

1．人々の身近にある屠畜、切り離されつつある屠畜

2016年11月下旬に開催された「モンゴル祭～草原の風～」にスタッフとして参加した際にアンケート調査を行った。対象者はスタッフとして参加していた日本に在住するモンゴル国出身者と、モンゴル祭に訪れていたモンゴル国出身者・内モンゴル自治区（以下「内モンゴル」）出身者である。時間の制約上32枚のアンケートしか集められなかった。男女と年代の内訳は表1のとおり、出身地と男女の内訳は次頁の地図と表2に記したとおりである。

表1　アンケート回答者の年代と男女の内訳

	男性	女性
20代	5	5
30代	7	8
40代	3	1
50代	1	2
計	16	16

地　図

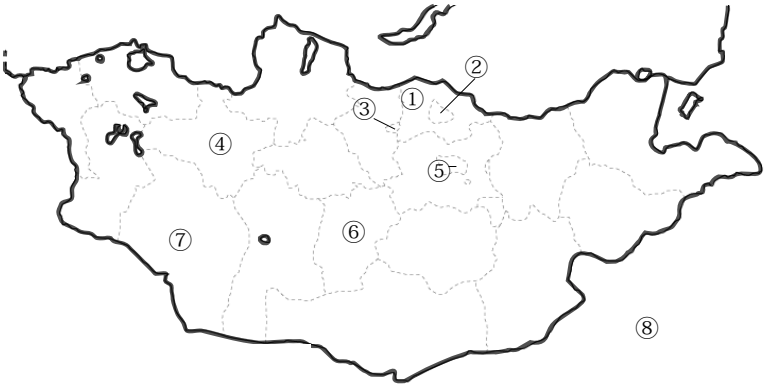


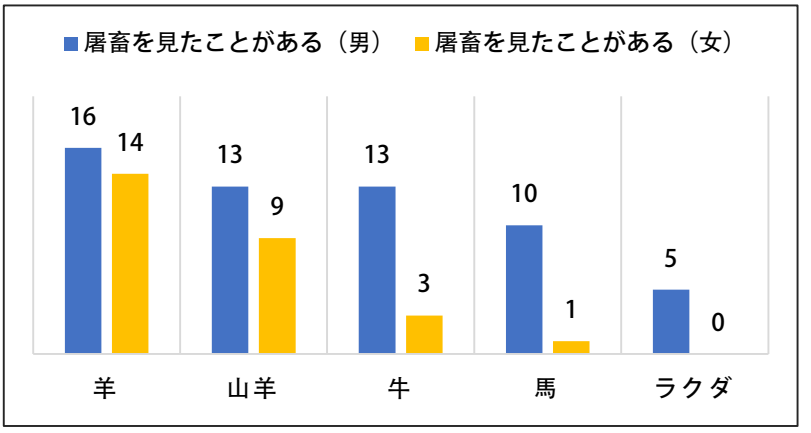
表２　アンケート回答者の出身地と男女の内訳

地図の番号	県　名	男性	女性
①	セレンゲ県	1	0
②	ダルハンオール県	1	1
③	オルホン県（エルデネト市）	1	0
④	ザブハン県	1	2
⑤	ウランバートル市	8	8
⑥	ウブルハンガイ県	1	2
⑦	ホブド県	0	1
⑧	内モンゴル	2	1

１．人々の身近にある屠畜、切り離されつつある屠畜

「モンゴルの屠殺に関する問い」で特筆すべきは「家畜の屠殺を見た（した）ことがあればその家畜にチェックをいれよ」という問いで、32名中31名が五家畜いずれかの家畜にチェックを入れていたことである。年齢や性別に関係なく、ほとんどの人が羊を始め五家畜いずれかの屠殺を見たことがあり、その割合はどの家畜も男性の方が多かった。チェックを入れていなかったのはホブド出身の30代女性一人であった。ウランバートル出身の人もいずれかの家畜の屠殺を見たことがあることから、都市部に暮らしていても屠畜を見たりしたりする機会があることがわかる。これは、親戚の家が遊牧をしており、都市部で暮らす人々も夏の長期休暇中に遊牧地域へ行くことが多いことも理由の一つであると考えられる。

図1　男女別でみた屠殺対象家畜の種類



また、チェックの入った家畜の男女別の内訳は図１を参照されたい。羊・山羊は遊牧家庭における個体数が多いためか、大型家畜に比べてよく食されるからか、男女ともチェックを入れている人が多かった。反対に、ラクダはゴビ地方など南の地域に限られるためか、男性のみ５人にとどまった。次に、五家畜の「屠殺を見たときにどう感じたか」という質問の自由記述欄に「普通」と書いてあったものと無記入であったものを合わせるとその数は21であり、およそ３分の２の人にとって屠殺が日常行う行為であること、あるいは「無記入＝特筆すべきことがない」と解釈すると、屠殺に対して特に関心が無いことがわかる。「食べるために家畜を飼っているとわかっているから何も思わない（セレンゲ /40代男性）」「子どもの頃から見ていたから慣れた（内モンゴル /30代男性）」という回答からは、今から30～40年前に生まれた人々は、幼い頃から家畜が身近にいる環境で育ち、日頃から屠畜の現場を見る機会が多かったことが推察できる。また「おいしそう（ウランバートル /30代男性）」という回答からは「屠畜すること＝食べること」だという認識があることもうかがえる。つまり羊を屠畜・解体して肉にしていくことは人間が食べるために必要であるという認識がうかがえる。

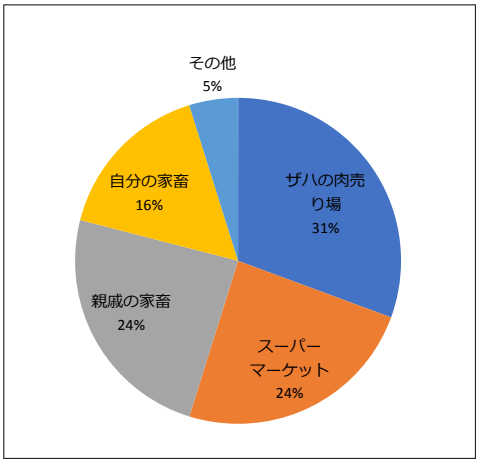
一方で「あまり見たくない（ウランバートル /30代男性）」「かわいそう (ウランバートル /20代女性・30代男性)」「胸が痛む（ウランバートル /40代女性）」というものや「子どもには見せたくない（ザブハン /30代女性）」「解体は構わないが動脈を切って絶命する行為を嫌がる人もいる（内モンゴル /30代男性）」「山羊が鳴く声を聞いたり、牛や馬の頚椎を切って血を出したりすることが好きでない（ウブルハンガイ /30代男性）」「動脈を切った後に羊の胸部が震えているのを見るのは嫌だ（ゴビアルタイ /30代女性）」などのように、屠畜経験者の中にもそうでない人の中にも、屠畜に対して苦手意識や抵抗感を持つ人がいることもわかった。

次に「モンゴルに帰った時にはどこで肉を購入するか」（複数回答可）という質問に対する回答は表３と図２のとおりである。その他の項目は無表記２と「知り合いの店から直接買う」１だった。自分や自分の知り合いが所有している家畜の肉を食べる、つまりモンゴルに帰れば身近に家畜とその家畜を屠殺する人がいる、という人の存在が認められる。一方で、過半数が市場の肉売り場やスーパーにおいて肉の塊で販売されているものを購入していることから、屠殺の場面を見ることなく肉を購入する機会が増えていることがわかる。第４章で、モンゴルでは遊牧地域でも都市部でも、屠畜は身近なものであると考えたが、実際には、屠畜を見ることなく商品となった肉を買っている人も存在することもわかった。このことから、大量生産・大量消費をする社会が進んでいくと、今後、既に肉として販売しているものしか目にすることがなっていくと考えられる。その時、上にあげた屠殺を見た時に起こる「かわいそう」「胸が痛む」という感情が、屠殺を見ずに単に殺すことだけに焦点を当て「残酷だ」と考えるように繋がっていく可能性は高い。

表３　モンゴルでの肉の入手先

肉の入手先	回答人数
ザハの肉売り場	19
スーパーマーケット	15
親戚の家畜	15
自分の家畜	10
その他	3

図２　モンゴルでの肉の入手先（パーセンテージ）



第１章で紹介した情熱大陸『ニワトリを飼育、解体、そして食べる』に対するコメントの中に「名前をつけてペットのようにかわいがったのに、最後は自分の手で殺すという残酷なことは出来ない」といったものもあった。このコメントは、ペットと家畜を「名前の付いた動物＝ペット」、「名前の付いていない動物＝家畜」と区別して考えていることを表している。その一方で、自らが育てた名前の付い

たペットと見なされるべき動物（＝家畜）を自らの手で屠殺することを「残酷だ」と捉えている点において、ペットとして可愛がられている動物も、食用として育てられている動物も、本来は同じ動物であるということを示している点で興味深い。つまり、ペットと家畜を区別していると同時にそれらは本質的には同じ動物であるという矛盾した認識を表しているのである。大切なのは、「同じ動物だから家畜を殺すのはかわいそう」で終わるのではなく、ペットも家畜も同じ動物だからこそ、肉となったものに対しても大切に扱おうとする考え方であり、残さずにいただくという姿勢なのである。

モンゴルの遊牧民も個体識別のためにそれぞれの家畜の色や模様を名前代わりに使い、呼び分ける。また、筆者が訪れたモンゴルの遊牧家庭では、家畜を自分の子のように大切に育てていた。これは日本でいうペットに対する感情と変わりはないように思われる。ただ決定的に違うところは、モンゴルでは家畜を食べるために飼っており、その考えを子どもの頃から自然に身につけているという点である。また、モンゴルの遊牧地域においてはペットより家畜の方がより身近である。五家畜はその肉や皮革・乳製品を利用するために、犬は家畜が野犬や狼に襲われないように見張ったり、知らない人が来た時に吠えたり噛みついたりする番犬用に、猫は食べ物をネズミなどから守るためにそれぞれ飼われている。ところが、モンゴルの特に都市部においては犬や猫などをペットとして飼う人も出てきている。遊牧地域を離れ、都市部で生まれ育った人々が増えていくと、一般的に家畜は身近でなくなるだろうし、今後ペットを飼う人たちが増加していくと、前節で挙げたようにペットはペット、家畜は家畜というように区別しつつも「動物を殺すことは残酷だ」と考える人も増えていく可能性もある。

３．モンゴルでの「食育」

モンゴルでは屠畜が身近にあるという環境要因以外にも、食に関する家庭でのしつけも屠殺が当然なことだ、普通だと感じる重要な理由の一つであると考える。食に関する家庭でのしつけや学校での指導について、再び筆者作成のアンケートを元に見ていきたい。「親や先生から食に関してどういうことを教えられたか」という質問（複数回答可）では、「こぼさない」「お椀に残さない」「捨ててはいけない」など「食べ物を残さない・無駄にしない」といった内容の回答が最も多くその数は17であった。次に多かったのは「骨の周りの肉をきれいに食べなさい」「骨の髄まで食べなさい」などの「細部まできれいに食べなさい」といった内容の回答で11だった。特に遊牧地域では、自分たちで消費するために所有している家畜を屠殺する。命を奪った以上、食べられるところはとことん食べる。これが食べ物に対する感謝を態度にあわらした形ではないだろうか。

モンゴルでは「羊を屠殺した時に残るのは鳴き声だけだ」と言われるほど、一頭の羊の細部まで利用し尽くす。S. ビャンバドルジ（2004: 42-43）によると「一旦家畜を屠殺するとその肉を食べ、可能な限り全てを利用することは、モンゴル仏教では家畜の生命を絶った罪を懺悔する方法の一つであると言われており、現在も大人から子どもたちへ語り継がれている」とのことである。血液もその一つである。モンゴルでは、血で大地を汚さないように屠畜を行う。第３章で紹介したように、オルルフでは羊の腹部に切れ目を入れ素手で動脈を切断し、横隔膜に血が溜まるのを待つ。その後、羊の腹部を中

心に頭側と肛門側に向かって一直線上に皮を切り、右側と左側の皮をそれぞれ剥いでいく（写真8）。剥いだ皮がシート代わりとなって血が大地にこぼれないようになる。筆者が屠畜を見た家庭の中にはビニールシートを羊の下に引いて行うところもあったが、ほとんどの家庭では何も引かずに屠殺をしていた。溜まった血はお椀ですくってバケツに移し（写真9）小麦粉やニラなどと混ぜ、水で洗った小腸に流し込みソーセージにする。筆者もモンゴルで初めて肺や頬の内側、喉などの肉、骨の髄を食べた。胆のうなど、人間が食べない部位もあるがそれは犬や鷹などに与える。羊の毛はフェルトに、皮は細長く切って乾燥させた後に靴紐やゲルの壁を固定するのに使う。くるぶしの骨はシャガイと呼ばれる遊び道具になる。

写真8　羊の皮を剥ぐ様子

2015年7月　ホブド県にて筆者撮影

写真9　腹にたまった血はお椀ですくって容器に移す

2015年7月　ホブド県にて筆者撮影

日本でも、魚の身、骨、皮などについては余すことなく消費している。たとえばイカやタコなどの内臓に塩や調味料で味付けをした塩辛や、カツオなどの腸の塩辛である酒盗は居酒屋でもよく見かける料理である。白子は雄の魚の精巣、カラスミはボラの卵巣を塩付けにしたものである。またアンコウの肝なども食べる。また、骨は出汁をとったり、唐揚げにして食べたりする。アイヌ地域では鮭皮

から衣服や靴が作られていた。このように日本でも魚に関しては様々な部分を消費してきたといえる。

次に、モンゴル語での屠殺という言葉の表現も特徴的であるため紹介したい。年に一度の屠殺月に家畜をまとめて殺すことを ‘идэш базаах’（イデシ バザーフ：食べ物を準備する）や ‘идэш бэлтгэх’（イデシ ベルトゲフ：食べ物を用意する）と表現する。このとき、直接的に家畜を ‘алах’（アラフ・殺す）とは表現しない。また、写真８のように、屠った家畜の皮と肉の間をこぶしで押して皮を剥ぐことを ’арьс өвчих（アリス ウブチフ）’ と言うことが多いが、‘нударгалах’（ノダルガラハ）という言葉を用いることもある。この単語から派生し、「経験豊かで熟練した状態を発揮して勝つ」ことを意味する ‘нударгадах’（ノダルガダハ）という表現も存在する。このように、屠殺に関係する言葉が良い意味を持っていることも興味深い。これらの表現から、モンゴルでは屠畜という行為が、単に動物を殺すことではなく、それを利用することに重点が置かれていたり、忌むべきものというよりはむしろ経験豊かなものの象徴として捉えられたりしていることが推察されよう。

４．モンゴルでの屠殺をする人に対する考え方

「モンゴルにおいて家畜を屠殺する人をどのように扱うか」という問いに対する自由記述の回答のうち、「普通」「男だったらできて当たり前」などと書いてあったものと無記入であったものを合わせるとその数は14であった。このことからも屠畜行為は特別なことではなく、男性であればできるという認識があることがわかる。また８名の回答者が「えらい（ウランバートル /20代男性）」「なんでもできるイメージ（ウランバートル /20代男性、ウランバートル /30代女性）」「尊敬する（ウランバートル /30代女性、ゴビアルタイ /30代女性、ザブハン /50代女性）」「男前（ウブルハンガイ /30代女性）」「自分ができずに誰かに頼む場合はお礼として贈り物をする（ゴビアルタイ /30代女性、ザブハン /50代女性、ウランバートル /20代女性）」「屠畜して肉を提供してくれた人を尊敬する（ウブルハンガイ /30代男性）」などと書いていた。これらの回答から、モンゴルでは屠畜をする人のことを尊敬する上、自分ができないことをやってくれる人だとして感謝の気持ちを抱く対象だと考える人もいることがわかった。S. ビャンバドルジ（2004: 39）は、古代において霊は羊の頭部に宿ると考えられており、獲物を仕留めた猟師が優先的に頭部・角・皮などを獲得することになっていたと書いている。そして「家畜を屠殺したものに肉及び内臓肉が分配されるが、頭、四肢肉を与えるのはこの習慣の名残である」としている。感謝の対象が狩りをし食料を分配してくれる猟師であったのが、動物（家畜）を解体してくれる人へと変化したと推察できる。

Ⅴ　まとめ

情熱大陸「ニワトリを飼育、解体、そして食べる」に対する批判的なコメントから、日本において家畜を殺して食べることを「残酷だ」と捉える人が存在することを示し、屠畜従事者に対して差別意識が存在してきたことを述べた。生き物を食べていながらも動物を殺すことに対しては忌避する傾向にある人がいることが、日本での食に関する一つの問題である。その主な原因として、家畜の肉に関して生産と消費が切り離されてきたこと、人々から離れた場所で屠畜が行われてきたこと、それによって人々が屠畜に関して正確な知識を持たないことなどが挙げられる。日本には食育基本法があり、それ

に基づいて5年ごとに食育推進基本計画が更新されている。その中で食への感謝の醸成のための施策が記されているが、実際に屠畜や生き物の命に関して学ぶ機会を設けるという取り組みは少ない。このままでは普段食べているものに関して、人々が正しい知識を得るのに不十分であると考える。

一方、モンゴルの遊牧地域では自分の家庭で家畜を飼っており、家畜を屠ることによって食料を得られるということを日常生活の中で学んでいく。つまり、自分たちが何を食べていて、それがどのような過程で料理になっていくか、普段から目にしている。また都市部であっても自分たちが命ある生き物を食べているということを実感しやすい環境にあるといえる。これは市場の肉売り場で羊の頭が置かれていることや、生きた羊を売るエメールト市場の事例から読み取れる。モンゴルでは遊牧生活を営む田舎であれ、定住し家畜を飼わずに暮らす都市部であれ、肉を食べる人々がそれが生きた動物だったと認識できる機会が多い。筆者作成のアンケートからは、屠殺ができることを当たり前だと考えたり、自分ができないのであれば尊敬したり、あるいは屠畜をしてもらえばその人に対して感謝の気持ちを表したりするということもわかった。一方で、都市部で生活している人々にとっては、屠畜を見る機会は少なくなっていくと考えられる。

日本では生き物の命を食べることで人間が生きているということを日常生活で実感することは難しい。大量生産・大量消費のシステムの中で、普段の生活と切り離されていること、学校の教育に組み込まれていないこと、と畜場法により意図的に屠殺が人目から遠ざけられていることで、屠殺が「見えないもの」になっている。「教育」と聞くと、どうしても学校でなされるものと思ってしまいがちだが、食べることは生きることに直結するので、学外や家庭でも行う必要がある。また、食育は決して子どもに対してだけではなく、誰にでも必要な教育である。家庭や学校、地域において、屠殺や肉屋を題材にした本・映画・漫画本などを通じて、「生」や「命」について考えたり学んだりする場を設けるなど、積極的な取り組みが必要である。実際に、食肉加工センター（屠殺場）の一般見学や、農家の人による講演会、映画の上映会、人権問題を取り扱っている博物館への見学など、探せばさまざまな方法で学ぶことができる。人間が生きていくために他の生き物の命をいただく。そのことを日本のスーパーでパックにされている肉からは学びとれない。自分たちが何を食べているのか、それが食べられるまでにどのような行程を踏むのかなど、食べ物の原点に立ち返る必要がある。

おわりに

本稿では、時間的な制約上、いくつもの重要な点を取り扱うことができなかった。例えば、モンゴルでの屠殺従事者に対する差別の有無、大量生産・大量消費化しているモンゴルでの食肉流通の仕組み、モンゴルの都市部で暮らす人々の意識、現在の一般的な日本人の屠殺に対する考え方、ペットという概念、動物愛護の観点などである。

また、日本における肉食忌避の背景を調べれば調べるほど、時代によってその理由が違ったり様々な説があったりして、今回はその全てを盛り込むことができなかった。第1章3節で挙げたように、肉食をしていた渡来人を社会的に孤立させるために肉食禁断の勅令が出されたという説については詳しく調べる必要があるだろう。また、食べることを忌避する動物の対象が時代によってあるいは世界中の国や地域によってもさまざまであったのも興味深い点である。日本のように殺生・屠殺を忌避す

る他文化圏において、肉食をする人を差別する国があるのか等についても興味がわいた。

今回のアンケートでは主に日本に住んでいるモンゴル人を対象にした。ところがやはりモンゴルのことはモンゴルに住んでいるモンゴル人を対象にアンケートや聞き取りを行う必要があると感じた。また、今回のアンケートでは20～40代が多く、生まれも育ちもウランバートルという人のデータは十分に集められなかった。彼らの身近には日常的に屠畜をする人がいないと考えると、屠畜に触れる機会の少ない都市に暮らす若者たちの考えを調査する必要がある。屠畜現場を目にしたことのないモンゴル人はどれほどいるのだろうか。その人々は家畜が屠殺されるのを見たときにどういう感情を持つのだろうか。多くの日本人と同じように「残酷だ」と感じるのだろうか。今後ウランバートルに住んでいる若者たちが屠畜に対してどのような考えを持っているのかを調査していく必要がある。

また、モンゴル人はどのような場面で「残酷だ」と思うのかについても興味がわいた。アンケートの「日本で暮らしていて、肉について違和感を覚えたことはあるか」という質問項目で、内モンゴル出身の50代女性が「いくらやたらこなど魚の卵がぎっしりつまった食べ物を見るとかわいそうだという気持ちになる」と回答していた。海に面しておらず魚を日常的に食べない文化で育ってきたからこそ、このような感情が芽生えるのだろうと考えられる。これは自分が生活してきた国の地理的状況やそれに伴う食文化によって、独自の価値観が形成されていくことを示すものとなる。

上記したものについては、今後の課題として探求していきたい。

参考文献・資料

〈文 献〉

赤嶺淳（2011）『クジラを食べていたころ』新泉社。
内澤旬子（2007）『世界屠畜紀行』解法出版社。
小貫雅男（1985）『遊牧社会の現代：モンゴルブルドの四季から』青木書店。
鎌田慧（1998）『ドキュメント屠場』岩波新書。
加茂儀一（1976）『日本畜産史；食肉・乳酪篇』法政大学出版局。
刈米一志（2015）『殺生と往生のあいだ　中世仏教と民衆生活』吉川弘文館。
黒岩比佐子（2007）『食育のススメ』文藝春秋。
小長谷有紀（1996）『モンゴル草原の生活世界』朝日選書。
佐川光晴（2009）『牛を屠る』解法出版社。
曹洞宗宗務庁編（1994）『差別語を考えるガイドブック』解法出版社。
塚田武（2005）「モンゴル国の畜産と食肉加工業」『食肉の科学』Vol.46 No.1。
長崎福三（1995）『肉食文化と魚食文化　日本列島に千年住みつづけられるために』人間選。
農林水産省 消費・安全局 消費者行政課（2016）『食育実践ガイドブック』。
村井弦斎（2005）、『食道楽（下）』岩波書店。
山崎正史、石田定顕ら（2007）「モンゴル国ゴビ遊牧地域における家畜の屠殺法・解体法」『食肉の科学』Vol.48 No.1。
S. ビャンバドルジ（2004）「モンゴルにおける食の習慣と社会的関係：肉の分配から読み解く」GLOCOL ブックレット16。
Ж.Самбуу (1986) "МАЛ АЖ АХУЙДАА ЯАЖ АЖИЛЛАХ ТУХАЙ АРДАД ӨГӨХ САНУУЛГА СУРГААЛ".
Л. Базаррагчаа (2014) "АРЬС ШИР СУДЛАЛ СУРАХ БИЧИГ".

〈WEB 資料〉

「さまざまなめりっと」http://blog.livedoor.jp/manamerit/archives/65601687.html（2016/05取得）。

「サーモンミュージアム」https://www.maruha-nichiro.co.jp/salmon/kids/03/03.html（2017/07取得）。

農林水産省「政府広報オンライン」http://www.gov-online.go.jp/useful/article/201605/3.html（2016/10取得）。

「平取町立二風谷アイヌ博物館」http://www.town.biratori.hokkaido.jp/biratori/nibutani/juyo_yukei_minzoku/nah-a-0013.htm（2017/07取得）。

「福岡県立久留米筑水高等学校公式ホームページ」http://kurumechikusui.fku.ed.jp/html/（2016/10取得）。

「平成21年度第1回横浜市食育推進計画検討委員会　会議録」
http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/shokuiku/210702giziroku.pdf（2017/06/13取得）。

〈法律など〉

食育基本法（最終改訂2015/09）。

第３次食育推進基本計画（2016/03）。

と畜場法（1953）。

‘‘эрх зүйн мэдээллийн нэгдсэн систем’’ "НИЙСЛЭЛД МАЛ АЖ АХУЙ ЭРХЛЭХ ТАЛААР БАРИМТЛАХ БОДЛОГО" ХӨТӨЛБӨР гурав. 6　http://www.legalinfo.mn/annex/details/1222?lawid=3360 (2017/01取得)。

〈映 像〉

毎日放送（2013）『情熱大陸 ニワトリを飼育、解体、そして食べる』。

〈辞 書〉

小沢重男編著（1994）『現代モンゴル語辞典 改訂増補版』大学書林。

Л. Болд (2008) “монгол хэлний дэлгэрэнгүй тайлбар толь”.

（のもと　ゆきこ）

《論　文》

モンゴル羊毛の再評価について

― 内モンゴルの事例から ―

阿路思（あるす）

はじめに

羊は古くから人間生活における必要性に応じて品種改良が行われ、FAO（国際連合食糧農業機関）2014年のデータ[1]によると、現在世界中の家畜羊は2,502種の品種が作り出されている。古い時代から羊とかかわってきたアジア諸国ではヨーロッパ諸国やオーストラリアより圧倒的に多数の羊が飼われているにもかかわらず、産物としての羊毛の評価は低く、ほぼ無名に近い。2008年チャールズ皇太子の提唱で、The Campaign for Wool[2]は、イギリス国内の羊農家やウールメーカーに対するサポートや自然素材としての羊毛宣伝を打ち出した。従来のアパレルを中心とした評価だけでなく、自然環境や断熱材における価値が羊毛業界の視野に入ってきたということである。

20世紀の初頭から終戦まで、日本は内モンゴル地域の羊とその産物である羊毛と深く関わってきた。日本におけるモンゴル羊と羊毛に関する研究が戦前においても戦時中においても多く存在し、そのうち多数の研究が当時の内モンゴル、つまり植民地としての「満蒙」地域と「蒙疆（蒙古連合自治政府）」政権のもとで行われていた。本研究では、このような歴史的事実に鑑み、アジア在来種羊としての内モンゴル自治区内の在来種羊に研究対象を絞る。日本におけるモンゴル羊毛に対する評価の妥当性を生物学、および地域研究の視点から検討する。現在中国における内モンゴル在来種羊の研究成果や、戦後日本畜産学における人間と家畜の関係に重点を置いた研究、日本の遊牧地域社会研究の成果なども参考にし、毛織物生産と持続可能性という二つの基準をもってモンゴル羊毛の再評価を試みる。

Ⅰ　日本における評価

日本におけるモンゴル羊毛に関する研究は、戦前や戦時中の文献や、資料、新聞記事に多数存在している。それらの研究が対象地域とする当時の内モンゴルとは、「満蒙」という言葉が示すように、満洲と「東蒙古」を合わせた内の「東蒙古」、つまり、現在の内モンゴル自治区の東部地域と、1939年9月1日に設立した「蒙古連合自治政府」の統治下にあった現在内モンゴル自治区の中部地域が中心となっている。研究分野は、畜産学や繊維学、獣医学、そして、羊毛工業及び畜産業の分野にわたって

1）　家畜多様性インフォメーションシステム（Domestic Animal Diversity Information System）のデータによる。（最終閲覧：2017年1月16日10：00）

2）　http://www.campaignforwool.org/the-campaign/

いる。またそれ以外にも、当時の日本国内や植民地における新聞記事にもそれらの分野で活躍していた人物の書いた文章、インタビュー、講演内容などが多数存在している。

戦後、日本とオーストラリアの羊毛貿易の回復によって、羊毛原毛の輸入先はオーストラリアが中心的な位置を占める。また、現在の内モンゴル産の羊毛は中国国内市場に流れ込んでおり、輸出先にとってはおそらく、「内モンゴル産」羊毛ではなく、「中国産」羊毛となっている事情もある。結果、日本における内モンゴル羊と羊毛に関する研究が急激に減り、内モンゴル羊毛は日本の人々の関心から離れていった。現在内モンゴル羊と羊毛に関する研究成果はほとんど戦前と戦時中のものである。本研究では、畜産学及び畜産業、羊毛工業におけるモンゴル羊毛に対する評価を取り上げる。

1．畜産学

芝田（1957: 97-98）では、「蒙古羊」は、「中国種」とほとんど同種と考えられ、毛用種や肉用種、毛皮用種、兼用種のうち、毛皮用種に属すると主張されている。この「蒙古羊」の品質について、芝田は次のよう述べている。「春毛が良質で秋毛は質不良で短い。夏に 1 回剪毛したものは夏毛又は伏毛と称し一層劣等である。梳づたものは抓毛又は梳毛と呼び良質なるも産量が甚だ少い…中国種は体が小さく、肉質は悪くないが、肉量は至つて少ない。」また、旧満州で「満洲羊」とメリノ種とを交配させた改良実験が良い成績をあげたことにも言及されている。さらに、「中国種のみではなく、コーカシヤ、ペルシヤ、シベリヤなどアジア系の綿羊は一般に尾は体の割合に大きく脂肪が溜まり、尾坊が汚れていて、しかも断尾は行われない。体質はいずれもきわめて強健で、粗飼料に耐える。中国種はわが国へかつてかなり多く入ったことがあるが今は殆んど飼われていない。」としており、中国種の羊についてその特徴が述べられている。

芝田（1957）には、いくつかの問題点が指摘できる。まず「蒙古羊」と「中国羊」、「満洲羊」がお互いに区別されず、品種についての記述が曖昧になっていることである。次は、「抓毛」と「梳毛」が良質とあるが、「春毛」や「秋毛」、「夏毛」との間の違いがはっきりしないことである。「断尾は行われない」という叙述については、断尾する改良品種であるメリノ種羊と交配させる実験が当時行われていたため、文脈から考えると、おそらく比較対象はメリノ種羊と推測できる。著者の在来種羊に対する評価は「良質な毛が取れるにも関わらず、産毛量が低い」、そして「肉質が悪くないが、肉量が少ない」の点にある。産毛量の低い良質な毛とは何かについては明らかでない。

およそ同じ年代の1950年に出版された草刈虎雄の『畜産学』の「蒙古羊および寒羊」の章節では「蒙古羊」についての研究が上述の文献より一層詳しく論じられている。草刈（1950: 93-111）は「蒙古羊」の産地について、そして飼育活動の主体は「蒙古人」であることを次のように説明している。

「蒙古羊は内外蒙古を原産地としているが、主産地は、内蒙古では乾陽・達賴罕・巴林・喀喇沁・烏珠穆沁などで、満州では旧黒龍江省の蒙古に接した地方である。蒙古人は主として羊肉および毛皮を目的として飼育している。」

また、「蒙古羊」の飼育方法と毛質について次のように述べている。「蒙古羊は脂肪尾種に属し、体格は小さく、生体量は牡60kg、牝45kg 内外である。… 体質は頗る強健で、また健脚であって、蒙古では水草を追って放牧を行っている。… 毛質は7cm ぐらいで、毛質は極めて粗剛で、粗毛を多く含み、カーペット用として利用されるに過ぎない。」

公主嶺農事実験場で行われた羊毛改良事業についても次のように述べている。「満州における蒙古羊

の毛質改良は、農耕地帯においては大いに価値あるが、遊牧地帯においては大きな意義があるものとは考えられない。」

草刈は「蒙古羊」は遊牧生活の中で飼育されているため、羊毛について改良することには大きな意義がないと主張する。草刈は、公主嶺農事実験場における改良原種としての「メリノー種」と「コリデール種」を比較対象にして、遊牧民の「蒙古羊」の羊毛利用に関して、「カーペット用として利用されるに過ぎない」と述べ、羊毛の品質については「毛質が粗剛で、粗毛を多く含」むと述べている。

戦後になると、日本人の食生活の中で動物蛋白質の摂取量が段々増大し、従来家畜が担っていた農業労働は徐々に機械化されていった。一般都市住民の消費している乳肉卵が工場によって生産・加工・商品化されるという背景の下で、一部の畜産学または獣医学、生物学研究者たちが人間と家畜の付き合いの歴史について研究するようになった。

『家畜と人間』（野澤・西田 1981）はその研究成果の一つとして挙げられる。羊に関する章節はないが、第一章「ヤギ —— 遊牧民の伴侶」において、遊牧生活様式と遊牧民の家畜利用に着眼点を置き、飼養者の経済生活にとっての在来品種の重要性を示している。また、『アジアの在来家畜』（在来家畜研究会 2009）では、アジアの在来種羊の起源と系統史について述べられている。モンゴル国産のハルハ羊（Khalkha sheep）と中国産のバインブルク羊（Bayanbulak sheep）が在来種羊の調査対象とされている。羊毛のための品種改良が、在来種羊にどんな影響をもたらしたのかについて、また野生羊からメリノ種羊に至るまでの過程が論じられている。

アジア在来種羊の毛の構造については、角田（2009: 260-261）が、次のように述べている。「春から夏期にかけて抜けた毛が固まった状態で体にまとわり着いている。しかし、今日の高度に改良されたヒツジは、換毛傾向がほとんどなくなっている。すなわち、家畜化による大きな変化は換毛の消失である。それによって羊毛の収量を引き上げる意味があった。」また、アジア在来種羊の特徴について、「原始的あるいは未発達なヒツジは、まだかなりの毛が抜け換わる」と述べられている。しかし、モンゴル羊とモンゴル羊毛に関する研究は具体的に文献の中に展開されていない。角田（2009）は、アジアの在来種羊の毛の特徴を述べる際に、イギリスの生物学者 Ryder の研究を参照している。

Ryder（1983: 299）は、I.L.Mason からもらったモンゴル羊毛とされるサンプルを観察し、次のように述べる。「It had fine fibres ranging from 12 to 34 microns with the unusually low mode of 16 microns. There were coarser fibres ranging from 40 to 60 microns, with one at 86 microns, and 20 percent of the total had a medulla. The overall mean of 24 microns was low for a hairy fleece type 」と述べ、つまり、モンゴルの羊毛を「fine fibres」と「coarser fibres」に分け、そのうち「fine fibres」の中に 16 μ 以下の毛があることは普通ではないと評価している。そして、モンゴル羊では毛の太さの平均値が 24 μ となっているが、この数字は一般の毛用種羊の毛より低いと主張している。

野澤（2009: 3）は「家畜とは何であるか」について論じる際、現在まで日本人が繁殖させ、利用してきた家畜は、ほとんど他地域由来だと述べている。つまり、近年のウズラだけを例外として日本人が自ら家畜化した動物はほとんどないと主張している。野澤によると、この背景の下に、日本の畜産学や動物学において「家畜とは何か」という問題を扱う研究は極めて少なかった。さらに、彼によると、日本の畜産および畜産学においては、主に家畜の実利的・経済的側面に焦点が当てられ、日本の動物学においても、野生動物の生態の解明に力点が置かれた結果、家畜的性格をもった動物は研究対象としてむしろ排斥される傾向にある。家畜の毛に関する Ryder の研究は、野澤の言う家畜に「実利を求

める」研究というより、むしろ「家畜の性格」に着目した研究とみることができる。その点で、Ryder のモンゴル羊毛に対する評価は、これまでに挙げた日本の畜産学における評価と異なる。本研究では、モンゴル羊と羊毛の特徴について考察する際、野澤・西田（1981）、角田（2009 ; 2010）および Ryder の研究を参考にする。

以上の評価によると、次のようにまとめることができる。まず、戦前の畜産学におけるモンゴル羊毛研究においては、すでに羊の飼育主体はモンゴル人であり、羊と羊毛の比較対象は品種改良されたメリノ羊とその毛である。さらに、モンゴル羊毛の品質は、そのすべてが劣っているのではなく、そのうち良質なものもあることがわかる。

モンゴル羊毛に対する評価を概観したが、これらの評価に対して問題点を指摘することができる。すなわち、モンゴル羊毛がどのような構造をもっているかについて、また、モンゴル羊毛の良質な部分についての研究がなされていない点である。

2. 畜産業・羊毛工業

畜産業と羊毛工業におけるモンゴル羊毛に対する評価の情報は、研究書として書かれたもの以外に、神戸大学附属図書館デジタルアーカイブの新聞記事文庫[3)]を利用して必要な情報を入手した。

当時の新聞記事におけるモンゴル羊毛の評価について見てみよう。以下の５つの新聞記事では、概して、モンゴル羊毛がメリノ種羊毛に比べて品質が悪いという評価が述べられているものの、北海道の畜産加工工場経営者であるカール・レーモンによる寄稿では、モンゴル羊毛がメリノ種羊毛に対して優秀な防寒機能と絶縁機能をもっている可能性について、高く評価されている。

> 「欧洲戦乱の結果我が毛織物界は非常なる活況を呈し従って我社の如きも頗る繁忙を極めつつあり従来露国陸軍が軍隊用羅紗は蒙古産と西伯利亜産とを以て之に先て来れり是れ蒙古産は品質に於て濠洲産に劣れるも之を西伯利亜産に混淆して紡織する時は何等染色の労を要せずして自然的に其色合所謂カーキー色となり恰も土色と異なるなく軍服として恰好品なりし為め従来は一に之れのみに依りしに開戦以後欠乏を告げ止むなく濠洲品を染色して代用せしが同品は価高く且つ蒙古品に比して質弱きも脊に腹は替えられず現に之を原料として日本及び米国に於て旺んに製絨しつつあり…… 」
>
> ――「毛織物界現況」（日本毛織会社社長川西清兵衛談）
>
> 満州日日新聞1915.9.23

> 「本邦の軍需品としての羊毛独立策は大戦後最も真摯に研究され夫が資源として東蒙古の羊毛に対する注目は最近に至りて一層大を加えたるが如く今其の蒙古産羊毛の品質を聞くに元来羊は肉用種及び毛用種とに二大別せらるるものなるが蒙古の牧羊は主として肉と皮とに存するものなるが故毛質と最も密接の関係ある牧草及び種羊の改良飼育法の如きは全く顧みら

3）「新聞記事文庫」については、山本（1986）による説明が詳しい。以下にその概略を記そう。
神戸大学経済経営研究所によって作成された明治末から昭和45年までの新聞切抜資料であり、60年以上にわたって営々と積み上げられた切抜帳は約3200冊、記事数にすれば50万件という膨大な量になっている。「新聞記事文庫」の収録範囲は経営・経済を主体としながら、社会・政治・外交・法制・教育などにいたる。採録する記事の選択と分類は専門研究者の視点で行われていたことが大きな特色で、大阪の主要紙と経済紙である「中外商業新報」をはじめ、東京・大阪のその他の新聞、地元神戸の新聞、さらに主要地方紙や当時の植民地・外地紙などが採録対象となっている。

れざるを以て外国産羊毛に比し毛質粗硬捲縮少く軍用毛布軍用絨等には適するも上等毛織物たるに適せず又本邦に於て最も重要あるメリノー種毛の代用品たることは不可能なるべしと……」

――「蒙古羊毛品質」
満州日日新聞 1918.2.1

「……生産は九牛の一毛にすぎない然るに支那に於いては現在約二千万頭の緬羊があり五千万斤の羊毛が生産するが其土地は広漠で気候風土も緬羊の飼育に適するから二千万頭の羊を倍加することは至難ではないと思う然し支那産の羊毛は多く欧米に輸出され我国には僅しか需要がない之れ支那の羊毛が品質不良にして我国の毛織工業は之れを原料として製絨する迄の程度に発達していないのみならず之れを製絨しても製品の販路に苦むのである故に如何にして支那の羊毛生産を増加し其の品質を改良して我国の需要に応じ得るかは重大なる問題である支那全国の緬羊を改良することは別として満蒙の地には幸いにして多数の緬羊が居るから先ず手近なる満蒙の緬羊を改良することが策の得たるものである羊毛の出廻り高から推算するる満蒙の緬羊□数は二百五十万頭に上っているが蒙古緬羊は元来肉と毛皮を目的としているから毛質については何等改良□実が挙がらず毛の品質不良で且毛量少いのが欠点である満鉄公主嶺農事試験場では大正三年以来メリノ、サウスダウンシュロプシア等の優良種羊を輸入して毛質毛量の改良試験を重ねた結果満蒙の緬羊改良が技術的に明かになったのは一大発見である……」（印字不良で判読できなかった文字を□とした－著者）

――「満蒙の緬羊改良」（栃内満鉄農務課長談）
満州日日新聞1923.5.1

「……蒙古緬羊の羊毛はその粗雑な自然の状態のままで厚さ一吋位の毛布に織られ、蒙古人や支那人に適当に使用されている、私はメリノー種の羊毛が同様の厚さの毛布に織られたとしても果してそれが北満の冬季にあって同程度の保温力を発揮し得るかどうか疑問であると思う、仮令蒙古の緬羊が、メリノー種に比較してその三分の一の分量に相当する所謂劣等羊毛を生じるとしても前者が寒気に対する優秀なる防寒具を提供するのであるから、かかる差別は、前記劣等羊毛の科学的試験を行えば、厳正とはいわれないことは当然である、しかして蒙古羊毛が綿密なる検査と実験の題目に供する価値のあることは明瞭である、蒙古羊毛の偉大な絶縁的性質を想えば、これが将来において或種の新興産業に原料を供給するようになることは必ずしも不可能でない。

私は過去において微妙な柔軟な銀の如き糸、目方の軽い有効なる絶縁体即ち「絹毛」(シルク・ウール)のことを考えた、かかることを想像することは空想の如く考えられる、併し誰が二、三百年以前に木材パルプから絹を採り、石炭から液体燃料を採ること、その他幾多の発見を予想したであろうか、そこで右の「絹毛」は蒙古羊毛の優秀な繊維を破壊して作成するのではなくて、そこに含まるる自然の油脂を損せずにこれを乳剤質とし、更にこれを精製し再製して、メリノー種又はコリデール種の羊毛から得る繊維より更に選練された繊維を得ることを目標とすべきである……」

――「満洲国緬羊事業の有望性」特別寄稿　カール・レーモン氏[4)]
中外商業新報 1936.10.17-1936.10.20

1936年5月、オーストラリア政府は日本製絹布・人絹布（レーヨン）への関税率を大幅に引き上げた。翌月、日本政府はその対抗措置として通商擁護法を制定し、オーストラリアからの羊毛、小麦の輸入を制限した。オーストラリア政府はさらにこれの対抗措置として、日本の輸出品に輸入許可制を適用させた。報復合戦の結果として、12月に「日豪通商暫定協定（tentative agreement）」が締結され、それによってこの戦いはようやく終了した。日豪通商紛争はこのような経緯をたどったのであるが、その真っただ中において、佐々木（1936: 375-387）は、この問題の解決策として5つの提案をしている。そのうちの2つは、雑種羊毛の使用増加と内、鮮、満綿羊飼育事業奨励である。モンゴル羊毛については、特に以下のように述べている。

> 「……雑種羊毛はメリノー羊毛に較べて毛足が長く、太く觸感が硬いから肌着用のシャツや薄い婦人服には向かないが、男子服、オーバー、ジャケツ、靴下等には好適である。現に蒙古羊毛は可成り米露が使ってゐる。米露が使ふのに日本が使へぬ筈が無い。宜しく、今後は我が友邦満洲国産の粗毛を使ひこなす研究が肝要ではあるまいか。」「友邦満洲國に於ける緬羊頭数は大体四百万頭と見られてゐる。大部分肉食を目的とする蒙古種、カーペット種で、体量は牡は百三十封度、牝は九十封度位である。強健にして寒暑によく耐へるが、産毛量三、四封度の少量で、しかも品質が悪く、粗く、弱く、羊脂が少く、蒙古風を冠る結果生砂の混入が多く、加ふるに死毛も混入してゐる。」

佐々木は、モンゴル羊毛の品質がメリノ種羊に劣り、「カーペット種」とであるという評価以外に、当時の状況について述べている。羊毛は戦時中においては、もはや商品ではなく、軍需品であると主張する。

『支那の毛織工業』（全国経済委員会編 1941: 27-28）では次のように述べられてる。なお、同書で述べる「支那の羊種」には、夏羊、呉羊、蒙羊の区別があり、モンゴル羊 (蒙羊) もその中に含まれている。

> 「支那の羊毛は一般に甚だしく粗強で、光澤を帯び、繊維ヤゝ短く、衣料毛織物の紡織には餘り適してゐない。併しこれを用ひて絨氈を製織すれば、極めて優良であるが、それは繊維が稍粗く且つ弾力性に富み、出来上がった絨氈は頗る堅牢で踏つけても尚ほ倒曲しないからである。支那の羊毛にも亦寒羊の如き稍細手毛織物の紡織に可能なるものもあるが、併しその産毛量は極めて少なく且つ入手が容易でない。」

4) 「カール・レーモン氏は嘗つて本欄で「情熱とロマンスの工場主」として報じた通り、北海道畜産加工界の伸展のために永らく奉仕的力闘を続けて来た親日独逸人で、現在函館近郊でハム、ソーセジ等の加工工場を経営している、彼は僅か二十四歳の青年の折、世界畜産加工界のナンバー・ワンといわれるシカゴのアーム会社々長にその人材を認められ一躍一千二百名の職工を使用する大工場の次長となり、その後同社の技師長の要職にまで栄進したが、この輝かしい地位を振り棄てて来朝以来、夫人の故郷たる函館を第二の故郷とし、農村民に多角的有畜農業経営の必要なるを説き献身的にその普及に尽粋して農民感謝の的となっている、本稿は満洲における緬羊事業の有望なることを力説、日本緬羊業者を鞭撻の為め特に同氏が本紙に寄せられたものである」（同記事カール・レーモンの紹介より）

『支那の毛織工業』によると、モンゴル羊の羊毛はメリノ種ほど羊毛の品質はよくないが、フェルトとしての品質は高く評価できるとしている。

当時中国国内での羊毛分類方法はとても多様であり、採毛方法や採毛季節、採毛年齢、羊の性別、産地等によって分類されていた。これに対して『支那の毛織工業』では、「一定標準の缺除に伴ふ分類の困難」さが問題視されている。だがここに述べる「一定標準」とは、機械生産に応じたものであり、つまり、毛織工業にとっての「良い品質」の羊毛とは、細いほど優良であって、また繊維の長さや太さがそろっているもの、そして捲縮度の多い、脂肪含有量の多いもの、夾雑物の少ないものが「良質」であるという主張なのである。

ここには、伝統生活の中において家畜と人間の調和生活から生み出されてきた評価システムと、機械化大量生産のシステムとの対立が見られる。この時代の日本羊毛工業は、毛織物生産を中心としていた。そこから出発する羊毛に対する評価に限界が生じたのである。つまり、フェルトの製造のため、モンゴル羊毛がアメリカに輸出されているという情報は業界内で共有されてはいたものの、視野の中には上等な毛織物しか入っていなかった。南満洲鉄道株式会社、天津事務所発行の『北支那の羊毛』におけるモンゴル羊毛の品質に対する評価は、『支那の毛織工業』と一致している。

戦前戦中の日本におけるモンゴル羊とその羊毛に対する評価を整理すると、羊の品種は原始的で、羊毛は太くて粗く、メリノ種羊に劣り、良質な毛織物に適さないという評価である。この点以外に、2つの興味深いポイントがある。一つは、モンゴル羊毛の中に良質な毛があるとされている点、次にフェルト素材としてはメリノ種羊毛より保温性が高く、寒い地域で活用できると評価されている点である。

しかし、「良質な毛」とは何であるかについて、明確には記されていない。また、モンゴル羊の厳しい自然に対する優れた適応能力による羊毛の保温性についても、より詳しく検討する必要がある。モンゴル羊毛はどのような特徴を持っているか、また、それらの特徴とモンゴル羊の飼育方法や飼育主体であるモンゴル人の生活様式との関係性について改めて検討してみたい。繊維としてのモンゴル羊毛の利用可能性と、羊毛利用目的に関する歴史的・文化的背景を分析し、モンゴルの羊毛を改めて評価することとする。

次節では、内モンゴル自治区に関する中国の牧畜研究を参考にして、モンゴル羊について記述することにする。

II　内モンゴルの在来種羊

1. モンゴル羊と起源

「モンゴル羊」とは、明確な定義によって定着している概念ではなく、文字通り「モンゴル」種の羊、つまり、「モンゴル」という地域で飼われている羊として一般的には理解されている。あるいは、「モン

ゴル人」に飼われている羊として理解することもできる。「モンゴル人」は、生物学的人種の定義[5)]から出発する三大別（ネグロイド、コーカソイド、モンゴロイド）のうち、アジア州の東半分から大洋州の島々、また南北アメリカなどに広がっている「モンゴロイド」を意味しているのか、エスニシティ概念から出発した言語、宗教、生活様式など文化的要素や歴史的経験の共有感から生み出されたものか、それとも国民国家の概念からのモンゴル国なのか、極めて複雑で簡単にはまとまらない概念である。

加茂（1973: 826-828）と Zeuner（1963: 197）によると、犬の家畜化は羊と山羊の家畜化より先行し、後者の家畜化も犬を使ったことによって成立した。Zeuner は、羊が最初に西アジアで家畜化されたという説は学術的に説得力があると主張する。角田（2009: 277）は、モンゴル高原へ最初に移入されたヒツジのタイプは明らかでないが、現在のモンゴル羊は恐らくシュメール時代前後のメソポタミアから東方へ拡散してきた脂尾羊集団が基であり、さらに南下して様々な中国羊へと形態分化していったものと推定されると主張する。

本研究の検討する「モンゴル羊」は、「モンゴル高原」およびその周辺地域、つまり国の単位で考えると、モンゴル国や中国内モンゴル自治区の家畜として飼育されている在来種羊のことである。本稿では、内モンゴルを主な考察地域とすることにする。内モンゴル自治区の資料や情報が比較的に入手しやすく、また戦前戦中の資料も内モンゴル中心で展開していたためである。

2. 内モンゴルの在来種羊

羊の品種は、生息地域の自然環境や、そこで暮らす人間の暮らしと緊密な関係を持っている。したがって、地方の名前、あるいは部族の名前が羊の品種の名前に使われることがよくある。従来、在来種羊について、遊牧生活において、色や体格、尾の大きさ、鼻や耳や角の形などの基準がある程度は存在していた。しかし、近代以降の科学技術の発展に伴い、各地方の自然環境への優れた適応能力を有し、豊かな産物を提供してくれる在来種羊をさらに選別、交配、飼育、管理するなどのプロセスを経ることで、体に関してより具体的な基準を作ることができるようになった。中国においては、これらの一定の基準の枠内に収まる羊は中央や地方行政機関に一つの品種として認定されることが多くみられる。

このような背景のもとで、中国の政府や牧畜研究機関、現地の牧民などの協力に基づき内モンゴルの在来種羊は主に肉用品種とし、地方良種としてフルンボイル、ウジムチン、ソニド３種に定着している。

樊宏霞・薛強（2010）によると、ウジムチン種羊の飼育地は主にシリンゴル盟であり、特に東ウジムチン旗、西ウジムチン旗、アバグ旗およびシリンホト市で飼育されている。ソニド種羊はゴビ羊とも呼ばれ、

5）　ここで近代科学における「生物学的人種」の概念自身がさまざまな問題を抱えていると考えられるので、ここで説明する必要がある。『 文化人類学事典』における竹沢泰子の人種についての解釈によると、「人種とは、遺伝的に異なった身体的特質をもつと社会的に信じられてきた集団である。かつては、皮膚の色、眼の色、毛髪の形状、体型等の身体形質により○○人種、○○人種というように、人類をいくつかの数に分類するための生物学的な概念である。しかし今日では、人種は生物学的に有効な概念でなく、社会的につくられた概念にすぎないというのが、国際的な通説となっている。（日本文化人類学会編 2009『文化人類学事典』P132）」。

さらに竹沢（2005）によれば、「人種概念の内在特性」とは、「第一に、人種的資質とされるもの（可視的および非可視的身体要素、気質、能力など）が、系譜的に世代から世代へと身体を媒介に『遺伝する』もの、出自によって決定され、環境や外的要因では『（容易に）変えることができない』ものだと信じられていること。第二に、自己・他者認識の境界を引く主体が他者集団に対して排他性を示す傾向が強く、とくに古典的な人種概念においては集団間に明白な序列階梯が想定されること。第三に、その排他性や序列階梯が政治的・経済的あるいは社会的制度や資源と結びついて発露するため、単なる偏見やエスノセントリズム（自民族中心主義）に基づく差異の認識にとどまらないこと、つまり組織的な差異化であり利害と関係しやすいこと、である。」竹沢（2005: 14-15）

シリンゴル盟東西ソニド旗、ウランチャブ市四子王旗、包頭市ダルハン・ムミンガン連合旗、バヤンノール市ウラド中旗で主に飼育されている。フルンボイル種は、主にフルンボイル地域、つまり、フルンボイル市新バルグ右旗、新バルグ左旗および陳バルグ旗三旗とエヴェンキ族自治旗で飼育されている。

(1) フルンボイル地域のフルンボイル羊

本節では、フルンボイル地域のフルンボイル羊について、その特徴を詳述しておこう。それに先立って、まずは、フルンボイル地域について確認しておきたい。

内モンゴル自治区の東北部にあるフルンボイル市は、総面積25.3平方キロメートルである。内モンゴル自治区における三つの少数民族自治旗（オロチョン自治旗、エヴェンキ族自治旗、モリンダワダウール族自治旗）はフルンボイル市に含まれる。フルンボイル市は、南北に走る大興安嶺山脈によって東地域と西地域に分かれる。西部はモンゴル国と接し、東は黒龍江省に隣接する。南は内モンゴル自治区の興安盟に、北部および北西部はアルグン川を境界としてロシアと接している。

長期的な自然淘汰や人為淘汰を経て、フルンボイル羊は、現在フルンボイル市の主な在来種羊品種として定着している。フルンボイル羊は主にバルグ種と短尾種２つの品種に分かれている。

まず、バルグ種羊について、王玉・劉衛平（2006）のバルグ種羊に関する研究によると、新バルグ右旗、新バルグ左旗および陳バルグ旗三旗の地域で多く飼育されているバルグ種は、現地の牧民には「バルグ羊」と呼ばれている。また、短尾種のフルンボイル羊に関しては、李宏図・秦秀娟（2006）の研究によると、尾部がバルグ種羊より短いことからその名で呼ばれ、主にエヴェンキ族自治旗に飼育されている。短尾種羊はフルンボイル地域でおよそ１世紀に渡って飼育される歴史があり、起源については明確な記載がなく、主に次の２説に分かれている。一つは、もともとフルンボイルの地域に存在していた品種であるとする説であり、もう一つは、1918年に２人のブリヤート人の牧民がソ連のバイガル湖地域から２つの群れ約2000頭をフルンボイル地域につれてきた羊の品種だとする説である。フルンボイル種羊に関する上記の2つの研究に基づいて、フルンボイル種羊の外部形態を表1にまとめる。

表１　フルンボイル種羊の外部形態

	バルグ種	短尾種
体格	・体格の大きさが中等である ・骨格が強固である ・後躯が発達している（飼育環境によって足の長さに差がある）	・体格の大きさが中等である ・尾部を除いてバルグ種と似ている。 ・体高がバルグ種より少し高い。
尾	長さ：17–19cm 幅：14–16cm 脂尾タイプ	長さ：8–14cm 幅：11–20cm 脂尾タイプ ・尾部の形によって小桃型と長円型に分かれる ・尾部が退化し生殖器が外部に現れているため交配しやすい超短尾型も存在する
鼻	ローマン形*	ローマン形
耳	耳が大きい。垂耳**である。	耳が大きい。垂耳である。
角	・牡羊は部分的に角がある ・牝羊は角がない	・牡羊は螺旋状の角がある ・牝羊は角がない

＊　鼻の形状が横から見ると、鉤鼻となっていることである（角田2009: 263）。

＊＊　野生羊の耳はかなり小さく堅いが、家畜化によって大きさの増加とともに下垂してきた。垂耳の羊は古代エジプト時代から存在していた。これは体温調整と関係する必要性からの変化ともいえる（角田2009: 262）。

写真1　バルグ種の羊

出所：新バルグ左旗出身の友人アルシャン提供。

写真2　バルグ種の羊

出所：新バルグ左旗出身の友人アルシャン提供。

(2) シリンゴル地域のウジムチン羊

ウジムチン種羊は内モンゴルシリンゴル盟東部のウジムチン草原で主に飼育されている。1978年ウジムチン羊の選育は内モンゴル自治区の重点科学研究項目となった。1986年内モンゴル自治区人民政府は、ウジムチン羊を正式に国家級標準の「ウジムチン種羊」として認証し、それ以来地元に定着している。

坡・特木爾（2005）は、ウジムチン種羊を足の長さと羊毛の太さによって、足短いタイプ、足長いタイプ、その間の長さのタイプ、毛の太いタイプの４種に分類したが、そのうち足の短いタイプと長いタイプが主に選育されている。

外部形態について、佟玉林（2005）によると、短脚種と長脚種の30％が14対肋骨を持ち、鼻はローマン形である。牡羊の多数は螺旋角であり、牝羊は角をほとんどもっていない。耳は大きく下垂し、一年中の放牧生活に優れた適応性をもっている。体格は強健で、後躯が発達し、背中がひろい。

王（1989）は、外見の違いによってウジムチン羊はM、H、L型３種に分けられるという。このような遺伝的多様性を持つ特徴が形成される原因についても王（1989）では言及されている。王によれば、ウジムチン羊の飼育環境は厳酷で（冬は長く、壊滅的な力をもつブリザードが吹き荒れている）、羊の群れは大きく（大きい群れは2,000頭程の規模を持っている）、飼育方法は粗放である（柵と屋根がない）ため、人間による淘汰よりも、自然による淘汰の方が、圧倒的に強い力を持っている、ということである。自然選択の結果、１つの生態環境の群体に２種、あるいはそれ以上の種類が混在していることもある。遺伝的多様性は、生物種が環境を利用する際の効率を上げ、環境を適応する面で意義があると王は主張する。

写真３　ウジムチン種羊

出所：2013年８月、東ウジムチン旗と接している興安盟ウランモドソム地域にて筆者撮影。

(3) ソニド羊

ソニド羊の肉が古い時代から中国では特に有名である。優良な在来種羊の品種として地元の行政や牧民たちに保護されている。ソニド左旗人民政府のソニド羊品種の認証システム[6)]の資料によると、ソニド羊は「ゴビ羊」と呼ばれ、モンゴル羊に属し、ソニド草原で主に飼育されている。元、明、清時代の皇族に貢物として献上され、古い歴史を持つ北京の有名な羊鍋料理レストラン「東來順」の専用羊肉でもある。1986年にはシリンゴル盟技術監督局に地方良種として認定された。1997年内モンゴル

６）　ソニド種羊のデータ、養殖モデル、屠殺加工、購入した畜肉の情報を調べるシステムである。中国語のサイト：http://www.sntyr.com/index.aspx（最終閲覧：2018年２月11日）

自治区人民政府に正式に「ソニド羊」と命名された。現在は畜肉ブランドとして中国において非常に有名である。ソニド羊の体格は、大きく強健で、牝羊も牡羊も角はない。他のモンゴル種羊と較べると、首の部分が発達している。臀部はやや盛り上がっている。

現在の内モンゴルにおける在来種羊のうち、国家レベルで認定された品種として定着したのはウジムチン種である。内モンゴル自治区政府レベルで制定され、品種として定着したのは、フルンボイル種とソニド種である。以下では、3種類の在来種羊の共通点をまとめることによって、内モンゴル在来種羊の外形および特徴について説明したい。内モンゴルの在来種羊に見られる共通点とは、中等の体格、垂耳、脂肪尾、ローマン鼻形であり、牡羊には角が見られるが、牝羊には見られないことである。また、頭や首、目周り、そして、手首および踵以下に斑が良く見られる。寒い地域での放牧生活に適し、太るのが早く、繁殖力が高く、病気と自然災害に強いなどの共通点も見られる。

自然環境は、国境や行政区分によって切り分けることができない。ウジムチン種羊は必ずしもシリンゴル盟に飼育されているとは限らず、ホルチン地域のジャルート草原、そしてシリンゴル盟の近隣地域でも見られる。また、モンゴル国にも「ウゼムチン」という名前の羊が存在する。

中国においては、羊毛のための品種改良を内モンゴルで行っているが、これらの在来品種の羊が品種として定着できるのは、良質な畜肉を求める市場があるからである。そして、さらに重要なのは、これらの羊がモンゴルで長い飼育歴史を持ち、牧民に飼い慣らされており、内モンゴルの草原地帯の自然環境や現地の牧民の放牧活動にもっとも適しているからである。モンゴル高原の主な地域は標高が900－1300mであり、大陸性気候である。降水量は毎年200－300mmで、平均気温が10℃前後である。厳しい自然条件の中で、モンゴル在来種は一年を通じ放牧生活に適応し、太りやすく、大雪が降った後、放牧ができない時にしか乾燥させた牧草飼料を与えない。このような自然環境の中では、人為淘汰よりも、圧倒的に自然淘汰の力が強い。そのために、遺伝的な多様性を持つようになったこともモンゴル在来種羊の特徴の一つである。このような遺伝的多様性は、モンゴル羊の自然災害への適応能力に積極的な意義を持つ。FAO（国連食糧農業機関）のDAD-IS（家畜多様性インフォーメーションシステム）が提唱するように、現在、家畜の多様性を維持することは世界レベルで重要視されている。品種の多様性は、気候変動に起因する困難な課題の解決に繋がるからである。また、動物の遺伝資源への脅威に対処できるように、脅威をより具体的に特定する必要性を提唱している。

モンゴルの在来種羊に対する中国の研究者や業界関係者などの評価は、羊毛利用以外の面でより適切だと言えよう。これと対照的に、なぜ、日本におけるモンゴル在来種羊に対する評価は「原始的」であり、そして比較対象が常にメリノ種羊なのかという問題は、第四章で具体的に論じられる。いずれにせよ、モンゴル羊と羊毛を考えるにあたっては、人間と家畜の歴史や産物をどう利用するかという文化的背景、そして環境などの諸要素を視野に入れて、総合的にモンゴル羊と羊毛を考えなければならない。

Ⅲ　「良質な毛」とは

前章では、内モンゴルにおける在来種羊の外部形態の共通点を取り上げたが、本章では、中国の牧畜学および繊維学による研究成果を通じて、モンゴル羊毛に含まれる繊維の種類とモンゴル羊毛の特徴を明らかにしたい。具体的には、本章は羊毛という繊維の一般的な説明からはじめ、野生羊から多種多様な家畜羊までの毛の変化を考察する。

「良質な毛」について、芝田（1957）には、「梳ったものは抓毛又は梳毛と呼び良質なるも産量が甚だ少い」という説明がある。この良質な「抓毛」が何であるかを明らかにすることは、モンゴル羊毛の品質について再評価するためにはきわめて重要な点となる。

満洲日日新聞1918年２月１日の新聞記事「蒙古羊毛品質」の内容によると、

> 「春季清明の節に至れば　鉄製の抓子を用いて抓取りたるものにて　長さは套毛に及ばざるも細繊にして品質良好なり　之れには生羊より抓取せるものを散抓毛といい　羊皮よりとれるものを皮抓毛という　又抓取の際　右手□鉤子を持ち　左手を毛を受けて　手に満れば両手を以て堅く丸めて一塊となし　羊毛の一端を以て緊縛投出せるものにて　掌中の最良毛は外面に表れ　粗毛は内部底部に匿るため　一見頗る良品の観を呈するものあり　之を爪子毛と称す　又皮子毛とは爪子毛の外部に在る細毛を選みたる最優良品なり　但し一般に優良品を挽子毛と称することあり 」

と説明されている。要するに、「良質な毛」としての「抓毛」とは、羊毛を太い毛と細い毛に手と道具で分ける作業によって取れた羊毛である。以上の内容から見ると、モンゴル羊毛とは、少なくとも太い毛と細い毛の２種類の毛が存在することが理解できる。

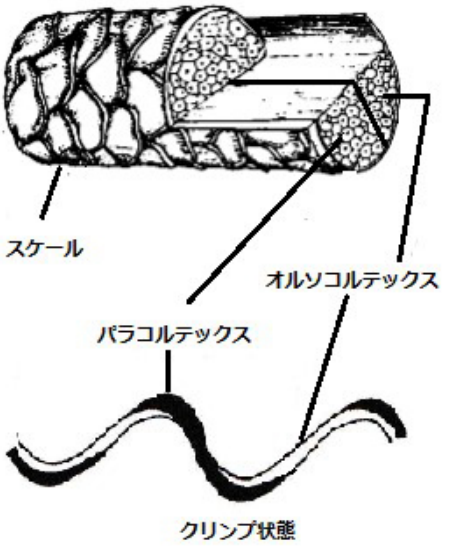
1. 羊毛繊維とは

羊毛とは羊から刈り取った繊維で、一般的にウール（wool）とも言われている。英語では、wool ＝羊毛とは限らない。他にアンゴラ繊維、アルパカやラクダの毛も含まれているからである。羊が人間生活の中で占める位置が大きくなるにつれて、本来多種の動物の毛を意味した「ウール」が羊の毛だけを意味するような存在になったのである。

羊毛は優れた吸湿性や撥水性、弾力性、保温性を持つ繊維である。図1の「羊毛の構造」が示しているように、羊毛の外側はスケールという鱗片状のものに覆われ、水気をはじくと同時に湿気を吸う。つまり、撥水性と吸湿性という相互矛盾な性質を持っている。羊毛の内部には、パラコルテックスとオルソコルテックスという化学的構造の違う皮質組織がお互い組み重なっている。二つのコルテックスは、空気中の温度や酸、アルカリに違う反応をするため、羊毛繊維が弓なりに縮み、反転しながら伸びていく。このような捲縮状態は、クリンプ状態といわれ、羊毛の弾力性と保温性はクリンプ状態と直接関係している。また、羊毛には空気を浄化する機能があり、燃えにくい、染めやすい、色落ちしない、紡ぎやすい、しわになりにくい、型崩れしにくい特徴があり、毛刈りによって毎年収穫できる持続可能な繊維でもある。

欠点について、本出（1988）によると、動物性繊維であるため虫やアルカリに弱く、毛織物製品は洗濯することによって縮み、糸がほつれにくくなる。縮んでは困る衣料品にとっては、フェルト化はその欠点の一つであると言えよう。

図1　羊毛の構造



出所：本出（1988: 八巻）（1995）を参考にして作成。

2. 野生羊に近いモンゴル羊

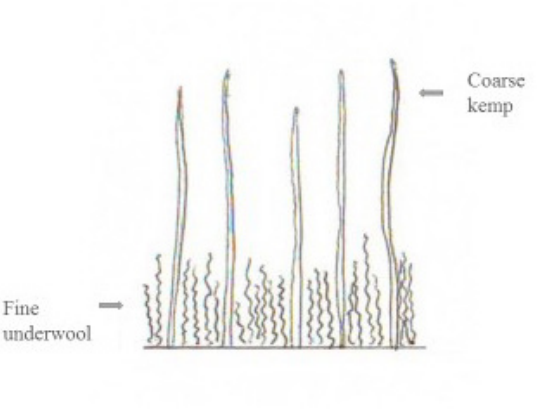
以上の2つの羊毛の構造以外にも、毛によっては中心髄質という第3の構造を持つものもある。髄質について、ライダー（1980：15）は以下のように述べている。

「太い毛だけが髄質を持っている。毛が太ければ太いほどなかの髄質の直径が大きくなる。……髄質の構造は皮質の構造ほどにはよく知られていない。最も太い髄質は格子型とよばれるもので、内部は、気体のつまった空間をケラチンでできた支柱が格子状に仕切っているつくりになっている。この種の髄質は、ヤギやヒツジやシカの外被として生える粗毛にみられる。」

野生羊被毛の構成は、図2が示しているように、coarse kemp と fine underwool で構成されている。「coarse」と「fine」は形容詞であり、太くて荒い毛は「kemp（ケンプ）」と言い、細くてやわらかいのは「underwool（アンダー・ウール）」と言う。ライダーによればケンプは、つまり山羊や羊や鹿の外毛であり、広い格子状の髄質を持つ。細かいアンダー・ウールは髄質化していない。

Zeuner（1963: 198）によると、羊毛の利用が始まったのは、羊毛が大きな塊となって抜け落ちるのを人間が初めて発見したときからであると推測することができる。角田（2009）は、この毛の抜け落ちることを「換毛」と呼んだ上で、この特徴が野生羊のものであり、アジアの在来種羊にはこのような特徴がみられるが、高度に改良された現代の羊にはほとんどこの傾向が見えないとしている。モンゴル羊にはまだ「換毛能力」が残っており、このような意味において、モンゴル羊は野生羊、つまり、原種に近い品種とも言える。

図2　二種類の毛を持つ野生羊の被毛



出所：Ryder（1983 : 16）より作成。

3. モンゴル羊毛の繊維タイプ

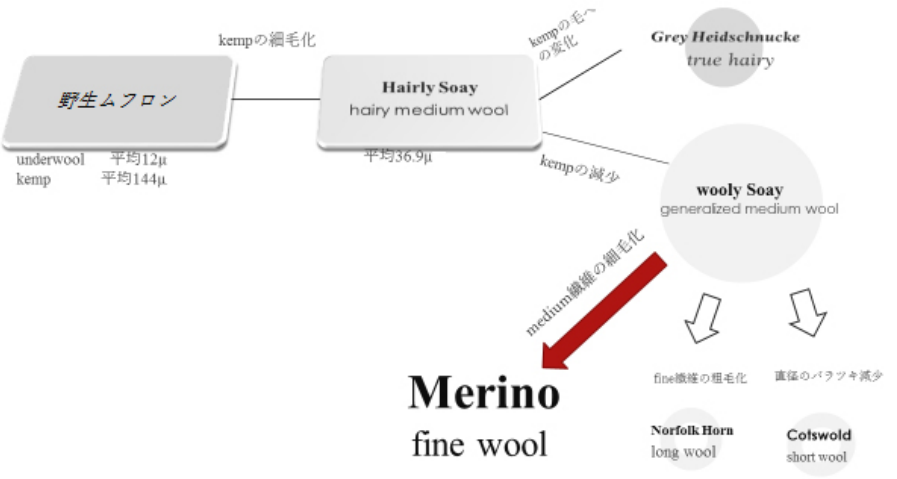
ライダー（1980）によると、羊は家畜化されていくことによって、野生羊の2種類の毛から、2つの進化の方向へ変化していく。一つの方向は、粗毛が細くなって、さらにより細くなり、メリノ種羊に見られる繊細な羊毛タイプや羊毛の直径範囲が20 μ～30 μにせばまることによってできあがったショートウールタイプ、直径が35 μ～40 μまで finewool の繊維が太くなることによってできあがったロングウールタイプに変化する。つまり、繊維の直径と長さの変化である。もう一つの方向として、異型毛という第三タイプの毛の繊維が発達し、人間の選択的育種の産物である完全に新しい毛のタイプに変化する。

本節では、この2つの進化の方向を考察し、羊毛の主な繊維タイプに基づいて、モンゴル羊毛の繊維タイプおよびその特徴を考える。

(1)「細毛化」プロセスによる換毛能力の喪失――野生ムフロンからメリノ種羊まで

Ryder（1983）によると、野生羊の毛皮は２つのタイプの毛からできている。家畜化された羊は、さらに野生羊の２種類の毛から変化していく。羊の毛は、今日のメリノ種に見られる繊細で、均等な直径と長さを持つ繊維になっていくと同時に、羊自体が換毛能力を喪失するに至る。図３は、換毛能力のある野生羊から換毛能力のないメリノ種羊への変遷様相の推定を示している。野生羊のムフロンでは、kemp(上毛) の繊維直径が平均頻値 144 μ であるのにたいして、underwool(下毛) は 12 μ となっており、差が著しく見られる。Kemp の細毛化に伴い、hairy medium wool の段階の代表である hairy soay 羊から、kemp が喪失する。そして、hairly soay 羊が wooly soay 羊となり、さらに３類の long wool や short wool、fine wool の羊に変化する。その fine wool の代表がメリノ種（Merino）である。

図３　野生羊から家畜化過程による毛質の変化



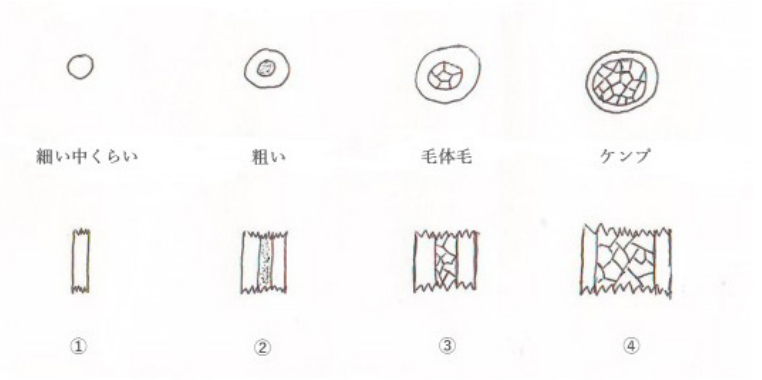
出所：Ryder（1983: 46）の「Fig.2.6 Changes in fleece type during the domestic evolution of the sheep.」より作成。

(2) 異型毛の繊維への進化

ライダー（1980: 53）によると、異型毛という名は、夏と冬とで毛のタイプが変化することからつけられた。図４は羊の主要な繊維での切片標本であり、細さと髄質状態の違いによって、羊毛繊維がこの四つに分けられている。

異型繊維は太い先端部と細い基底部をもつため、針毛とよばれることもある。夏には毛の繊維が髄質化して粗毛のようになるのに対して、冬になると毛の繊維は細くなり、毛髄質を失って、繊細な羊毛のような外観で成長するようになる。異型毛の特徴は、毛（1989）によると、髄質のある部分と髄質のない部分の両方を、一本の毛の中に備えていることである。

図4　羊の主な繊維タイプ



出所：ライダー（1980: 52）の図18「ヒツジの主要な繊維での切片標本」より作成。

1937年10月号の『日本畜産学会報』に収録されている「支那山東省産羊毛に就いて」という研究報告（中原・林 1937）では、山東省産の羊毛を、当時の中国の他の地域の羊毛、特に脂尾羊種のもの、つまり「カーペットウール」に比較している。同時代の先行研究である佐々木（1936）において、モンゴル在来種羊の毛を「カーペット種」と呼んでいることから、中原・林（1937）における「カーペットウール」は、「蒙古種」羊の毛を指すと推測できる。この「カーペットウール」つまり太い毛が多く存在している羊毛には、「緬毛」、「粗毛」、「粗緬毛」3種類の繊維があると結論が出ている。中原・林（1937）によると、「粗緬毛」とは「緬毛」と「粗毛」の中間に位するもので、semicoarse wool 或いは hairy wool と呼ばれている。また、本出（1988）によると、動物の毛は大きく3つに分けることができる。すなわち、①太くてまっすぐな毛＝外毛・ヘアー（hair）。②やわらかくて細い毛＝内毛・産毛・ウール（wool）。③固く太く中心に毛髄質のある繊維＝ケンプ・メデューラ（medulla）の3種類である。なお、中原・林（1937）と本出（1988）の研究において、異型毛に関する言及はない。

(3) モンゴル羊毛の繊維タイプ

本節では、羊毛繊維のタイプに関する考察に基づいて、また、中国における在来種羊の繊維タイプに関する研究を参考にして、モンゴル羊毛の繊維タイプについて考えたい。

王・劉（2006: 143）の研究によるとフルンボイル種の毛の色については、多くは体の部分が白く、足の部分に斑がついているものが多く見られ、頭部、特に目の周りに、サングラスのような黒色や茶色の毛を持つ牝羊は、このような遺伝的特徴を次の世代に残す傾向が強い。この特徴を持つものは、特に冬季雪のある寒い地域に適応する能力が極めて強い。バルグ種羊の太い毛の量は一般のモンゴル羊より多くなっている。しかし、羊毛に太く荒い毛が多く含まれている羊は、自然適応性が強く、体格がより強固で、肉の生産量が高い。現在、中国のフルンボイル地域では、羊毛のための品種改良を行うよりも、他の優良な特徴を保持することが重要であると王・劉（2006: 143）が主張している。李宏図・秦秀娟（2006: 148）によると、短尾種の被毛の各類型の繊維の比率は：「絨毛」（髄質のない細い毛）率が53.49%、「両型毛」（異型毛）率が6.03%、「有髄毛」（髄質のある太い毛）率が40.48% である。

ウジムチン種の場合、牡羊は、「絨毛」率が46.34%、「両型毛」率が1.63%、「有髄質」率が52.03% で、

そのうち「死毛」[7]の比率が30.6%である。牝羊はそれぞれ54.58%、2.68%、42.74%で、「死毛」率は9.46%[8]。ソニド種の羊毛は、髄質のない細い毛が52%～61%，異型毛が3%～4%,「死毛」を含まない髄質のある太い毛が8%～11%,「死毛」が28%～33%を占めている[9]。

以上の研究によると、モンゴル羊毛には、四種類の毛が存在する。つまり、髄質のない細いウール、異形毛、髄質のある太い毛、死毛である。

本章のテーマである「良質の毛」とは何かについて、以下のように主張することができる。モンゴルの羊は、野生の羊と同様に、春から夏にかけて毛が抜け落ちる。これは「換毛能力」とよばれ、現在のヨーロッパで毛のために改良された羊のほとんどは、その能力を喪失している。要するに、モンゴル羊は、「毛が自ら抜け変わる」という能力をもつがゆえに、ヨーロッパの羊に比べて野性に近い品種であると判断できよう。

モンゴル在来種羊の毛は、細くてやわらかい髄質のない繊維、異型毛の繊維、髄質のある太い毛の繊維と「死毛」で構成されている。「太くて粗い」という言い方は、実際には一種類の毛ではないことがわかる。また内モンゴルの３種類の在来種羊の細くてやわらかい毛の比率が、平均的に羊毛繊維全体のおよそ半分を占めていることを、無視することはできないであろう。つまりこの細くてやわらかい毛は「良質の毛」である。異型毛はわずか２～3%であり、「死毛」、つまり太くてまっすぐな毛と髄質のある太い毛が残りのおよそ半分を占めている。

羊毛繊維に関する用語は、以上の複数研究の中でそれぞれ異なっている。Ryder（1983）の野生羊の「ケンプ（kemp）」と呼ばれるものは、モンゴル羊の「死毛」とどのような関係を持つのか。そして、本出（1988）は、毛髄質のある繊維を表すために「ケンプ」という言葉を使用している。また、本出（1988）の分類した動物の繊維タイプを参照すると、①の「太くてまっすぐな毛＝外毛・ヘアー」と「死毛」の共通点は、まっすぐであるところにあり、両者は同じ種類の繊維かどうかは不明である。モンゴル羊毛に含まれる「死毛」と「髄質のある太い毛」を二種類の「ケンプ」と呼ぶか、それとも「外毛・ヘアー」と「ケンプ」と呼ぶか。さらに、モンゴル羊は野生羊に近い品種であるゆえ、野生羊の「ケンプ」まで持っていると言えるかどうかは、今後の課題として明らかにする必要がある。したがって、野生動物と家畜の間に立つモンゴル羊の「太い毛」に対する叙述は、単に「ケンプ」という用語だけでは不十分である。

4. カシミヤ生産技術の導入による「綿羊絨」の誕生

「良質な毛」としての「抓毛」は、手と櫛のような道具を使って入手できることが、前述の戦前日本における多くの資料で紹介されている。羊の体を梳かす作業が実際に存在していたことは、戦前の研究によって明らかになっている。この作業にカシミヤ生産機械や技術を導入することによって、大量生産が可能になったのである。

2002年９月20日の「中国紡織報」の１つの新聞記事によると、1995年中国河北省の農民、史跃蕊

7）　死毛とは、繊維が薄く平らな状態であり、白い、光沢がない、まっすぐになっている毛である。ごくい一部曲がりくねるものも含まれる。髄質が連続性をもち、長さが25mmまたはそれ以上のものを指す。（中華人民共和国国家標準　GB/T 14270-2008 毛絨繊維類型含有量テスト方法　Test method for fiber type content of hair fibers）

8）　重慶市牧畜科学院 牧畜知識ベース http://bk.xumu001.cn/index.php?doc-view-2887（最終閲覧：2017年１月13日１：44）

9）　ソニド左旗人民政府認証サービスプラットフォーム　ソニド羊トレーサビリティ認証プラットフォーム http://www.sntyr.com/viewarticle.aspx?id=343&type=snt（最終閲覧：2017年１月13日１：53）

がカシミヤ分櫛[10]の技術を羊毛生産に応用し、在来種羊の毛から「綿羊絨」を引き出すことに成功した。その技術をセーター製品の開発に利用したところ、市場の反応はとてもよく、非常に大きな利益を得たという。その後、カシミヤ分櫛技術を羊毛に導入することが当時彼の住んでいた黄金庄村に広がっていく。鄭文新・王楽（2009）によると、2009年の時点で、この産業は河北省に限らず、内モンゴル、江蘇省、上海、青海省、新疆などの地域に広がった。そのうち、価格が最も高いものは、1トンあたり120万元であった。その原料は主に内モンゴル産である。

趙（1997）の研究によると、実は、1986年の時点で「綿羊絨」という繊維に関する報道が存在している。河北省の東高集団という有限会社が、史跡蕊よりも前に、800万元（1億2,000万円程度）を「綿羊絨」の生産・加工の研究へ注ぎ込み、北京紡織科学研究所などの協力の下、「綿羊絨」製品を開発している。

「綿羊絨」という言葉に対する統一された英語の表現はない。たとえば、「Sheep Down」（鄭・王など、2009）、「True wool」（劉1995）、「underfleece of sheep」（王・瀋・王1998）。また中国国内には、この種類の繊維を「絨」と呼ぶのか「毛」と呼ぶのかを巡る議論が行われている。「絨」とは動物の細くやわらかい産毛のことであり、つまり野生羊の「underwool」にあたる言葉である。

直径の比較から見ると、カシミヤの中国国家基準 (GB18267-2000) によると、カシミヤは、「山羊から採集した直径が25μまたはそれ以下のもの」と定義され、ヤク絨は35μまたはそれ以下のもの（GB/T 12412-2007）、ラクダ絨は40μまたはそれ以外のもの（GB/T 21977--2008）、と定義されている。

劉（1995）、王・瀋・王（1998）の実験結果によると、モンゴル在来種羊の毛の細いものは、直径14～25μに集中している。こういう意味で「綿羊絨」という言い方にはある程度の合理性があると考えられる。しかし、羊毛の「絨」に関する国家基準がいまだに存在しない。その一つの重要な理由として、鄭・王・張（2009）は、「絨」として認証した場合、「ヤギ絨」つまりカシミヤと混同しやすいため、カシミヤ市場に混乱をもたらす可能性が高いと主張し、モンゴル在来種羊の細い毛がカシミヤと混同されやすい品質をもっているが、スケールの形態や重ね方、構造の面でまったく違う繊維であり、光沢と手触りも違うと述べている。

在来種羊の細い毛をどのように扱うかについてまだ議論が続く一方、機械技術が発達していない時代と異なり、太い毛と細い毛とが分けることができる現在ではモンゴル羊毛は繊細な繊維としてこれから非常に高い可能性をもっている。繊細な毛の割合はモンゴル羊毛の半分またはそれ以上を占める。これがモンゴル羊毛の新しい発展の道につながり、羊を飼っている牧民の経済生活にも役立つことは考えられる。

メリノ羊毛の品質と産毛量は機械での大量生産にとって最も効率的である。モンゴル羊毛は全面的なメリノ種羊の代用品とはなり得ず、ファインウールはカシミヤとどう差別化するかという問題はあるが、繊維としての可能性は十分あると考えられる。

戦前戦中の日本におけるモンゴル羊毛に対する評価の背景には、当時の日本羊毛産業が羊毛の自給を図る中、「メリノ種の代用品」という考え方があり、効率問題は常に評価の基準として羊毛産業や畜産業にとって重要だった。効率の文脈上、モンゴル羊の産毛量はメリノ種羊より圧倒的に低く、繊維の長さも人間が長期的に力を入れ改良したメリノ種羊の統一性に及ばないが、これらの基準には機械生産が背景としてあることが無視できない。戦後、当時内モンゴルで羊毛関係の仕事を従事している人々が帰国し、モンゴル羊と羊毛に対する研究もそのまま日本国内の羊毛業界に受け継がれたと考え

10）原毛中に混在するうぶ毛と粗毛を分離し、うぶ毛だけを取り出す作業である。

られる。「綿羊絨」という繊維は現在日本羊毛業界にあまり知られていない。

Ⅳ　羊と羊毛の利用目的から考える評価基準

前章において、モンゴル羊毛の「良質な毛」を分析した。モンゴル羊毛は繊維として可能性を持っている。しかし、羊の利用は、家畜化の長い歴史の中、羊毛に限らず、乳肉や内臓、毛皮、骨、角、糞に至るまで遊牧民にとって必要な産物である。羊が衣食住さまざまな面で人間生活を支え、羊毛の利用も実は多様であることが無視できない。現在の内モンゴルのモンゴル人の日常生活のあらゆるところに羊の文化が浸透している。モンゴル羊毛に対する評価は、評価する側がどんな立場に立って羊毛をどう利用するかによって違っていく。本章ではモンゴルの伝統的遊牧生活における羊毛利用に着目し、日本における現行評価形成の原因を分析することによって、モンゴル羊毛に対する毛織物生産基準以外の評価の仕方を探る。

1. モンゴルにおける遊牧民の羊毛利用――フェルト（エスギー）

日本は古代より麻・絹・綿の伝統的な服飾文化をもっているが、羊毛工業の発足から現在までの歴史はわずか120年余りといわれる。家畜文化が欠けている背景のもと、すべての動物の毛を「毛」という言葉で表現し、羊と羊以外の動物の毛をはっきりと区別しない。それに対して、ヨーロッパまたはユーラシア大陸においては、羊と羊以外の動物の毛を異なる言葉で表現し、異なる扱いをしてきた。たとえば、モンゴル国では、羊とラクダの体から刈り取った毛を「ノース」、牛と馬から刈り取った毛は「フーブル・ヒャルガス」、ヤギの体からとった毛を「ノーロル・ヒャルガス」と言い方を区別している。このような区別は、遊牧生活における毛のさまざまな用途から生まれる。各種の家畜の毛はどのような特徴をもち、どこに利用するのか、どんな使い方に適応しているかについての遊牧民の知識や技術から誕生したとも言える。

明治維新以前の日本では、牛や馬、豚に比べて、羊とのかかわりが極めて少なかった。江戸中期から明治時代にかけて、羊毛の毛織物が日本に輸入され、一般人もこれを着用するようになったが、羊の毛で作られているという紹介や解説を欠いており、ただ単に「羅紗（ラシャ）」、「サージ」などと呼称されていた。「羅紗」という言葉の語源はポルトガル語の ‘raxa（厚手の毛織物）’ を元とする。漢字の「羅」とは「薄い絹織物」の意味で、「紗」とは「薄絹」を意味する。どちらの漢字も原語である raxa には結びつかない意味を表している。当時の日本人が、羅紗が羊毛製であると認識していなかった理由の一端はこのことに求められよう。

1870年には兵制が確立し、陸軍、海軍軍服はすべて羅紗を用いることが決められていた。その後、婦人服として毛織物が急速に普及するようになった。山根（1989）によると、サージやセルの実物は、日本にも入って来ていたものの、実はどちらも羊毛からできているものとしては日本人に感覚的に理解されていなかったという。

日本の風土と農耕文化の中、麻、絹、木綿などの素材が日本では主に使われていた。自然環境から見れば、明治時代の日本人には牧草及び牧場などは身近なものではなく、牧畜文化は日本に根付かなかった。本稿では、戦前および戦時中の多数の研究を参考に、日本人、あるいは日本の羊毛業界、畜産業界がメリノ種羊に特にこだわっていた理由を、羊毛で絹の様な生地を生産しようとしたからであ

ると考える。繊細な絹の代用品として用いるには、モンゴル羊毛は不適切なのである。

日本と違う風土であるモンゴル高原の遊牧民の暮らしにおいて、羊毛の利用は毛織物ではなく、フェルトとして主に使われてきた。1924から1925年にかけて、モンゴル人民共和国の首都ウランバートルとロシアのキャフタのほぼ中間地帯に、匈奴の王のものとされるノイン・ウラ古墳群が発掘され、その中には古代衣服の標本が含まれていた。衣服は、男子の単衣（ひとえ）と袷（あわせ）の絹製長衣2着、錦・絹・毛織物製の脚衣各1着が発見された。袷とは、単衣を重ね合わせて着る長衣であり、表と縁の部分は中国製絹布、裏は0.5cmのフェルト生地で作られていた。毛織物製の脚衣は匈奴の末裔といわれるカザフ族の19世紀の羊の皮脚衣とほぼ同寸法である。毛織製脚衣は皮脚衣を祖形として製造されたと考えられ、この皮製脚衣の脚部は左右各一頭分の羊の皮が使われ、脚衣の上端は羊の首に近い部分の皮で、動物の体形をいかして作られている。この発見から、モンゴル高原で暮らしていた遊牧民が紀元前後すでにフェルトの服を着るようになっており、毛織物のズボンも履いていたことがわかる。現在「モンゴル」という地域で暮らしている「モンゴル人」といわれる人々は、数千年の東西南北の民族融合で形成された民族だと考えられる。衣食住のすべての面で羊の畜産物に恵まれているという点で、イギリスに共通する部分も指摘できるが、モンゴルにおける羊毛が毛織物ではなく主にフェルトとして使われている点が大きく異なる。つまり、遊牧という暮らしの形態がフェルトを選んだと考えられるのである。

羊毛で作られたフェルト製品は、モンゴルの遊牧生活において不可欠なものである。フェルトはモンゴルの遊牧生活から生まれ、遊牧生活に一番適するテキスタイルである。Sjöberg（1994; translated by Spark 1996: 23）は、フェルト製品がモンゴルの遊牧生活に適している理由として、まずは羊を人間の手で管理し、その産物としての羊毛を簡単な道具を用いて、短い時間で集中して作ることができることを挙げている。さらに、Sjobergによれば、フェルトがある程度の厚さと品質を持っているために、様々な需要に対応することができることや、その厚さのためにゲルの外側に防風材として使われること、また、フェルトの中で薄く柔軟なものが靴下等に使われることも理由の一部であるのではないかとされている。

ゲルに使われるフェルト製品は、ゲルの壁のような面積の大きいものと、座布団やブーツなどの小物に分けられる。フェルト作りは、ものづくりでありながら、祭りとも言えるものであり、儀式としての重要な役割をも果たしている。フェルト作りを通して、共同体の中で、祭りを楽しみ、宴を開くのである。

内モンゴル自治区内もモンゴル国内も、伝統的遊牧生活が行われている地域は、以上のようなフェルト作りの文化を持っている。このようなフェルト作りの具体的な製作プロセスに関しては、内モンゴルとモンゴル国において数多くの研究が行われている。モンゴル国出身のバ・エルデネツェツェグ（2009）の研究が、その中では、より詳細なものであるため、本研究では主にバ・エルデネツェツェグ（2009）の研究を参考にし、以下に整理する。また、近年、内モンゴル自治区においては、伝統的遊牧生活が行われる地域がほとんど存在しないため、最新の研究成果として、2015年8月に今岡良子と本出ますみによって行われた、モンゴル羊毛に関する現地調査 (モンゴル国ウブルハンガイ県のトゥグルグ地域) 時に撮影した写真を通じて説明する。

毛刈り (Shearing)

羊を敷物あるいは防水帆布の上に倒し、2本の前足と1本の後足をロープで結び、脚→胸→体の順

番で刈り取る。羊毛を汚さないように、また無駄が出ないように心掛ける。

羊毛叩き (Stick-beating)

羊毛を天日の下に広げて、汚れの塊などを取り除き、湿気をなくす。そして、なめした牛皮の敷物の上に乾いた羊毛を敷き、端から叩く。この作業は、羊毛をほぐすために行うものであり、一回で3、4kg の羊毛を叩くことができる。ゲル用フェルト一枚分、すなわち約25kg の羊毛を作るには、このような作業を6、7回行う必要がある。叩き棒としては、白樺や柳で作られたものが丈夫で、この作業に最も適している。

叩く人はお互いに向き合って座り、棒の先に羊毛繊維が引っかからないように気をつける。よく叩かれた羊毛は、重ね敷きしやすく、ほこりがついていないため、上質なものになる。

フェルト化 (Feltmaking)

ほぐした羊毛を両手で引き伸ばし、繊維を同じ方向にそろえて母フェルト（mother felt）に敷く (cf. 写真4)。その上に水あるいは乳清などをかける (cf. 写真5)。カラマツ、白樺などで作られた木の軸を、敷かれた羊毛の上に置き、端から巻き上げる (cf. 写真6)。さらに、フェルト全体を牛の生皮で覆う。朝の涼しいうちに、それらを馬やラクダなどの家畜に引かせ、1.5－2km の距離を、20回から30回走らせる (cf. 写真7・8)。そして、昼間の暑いときさらに15回から20回程度走らせる。最初はゆっくり引っ張り、水分が大分出て軽くなったら、家畜の走るスピードを上げる。

一枚のフェルトが完全に出来上がるためには、このような作業を３回繰り返さなければならない。この作業が繰り返される中で、１回目に出来たフェルトは「乙女フェルト」、２回目にできたものは「英雄フェルト」、３回目のものは「母フェルト」と呼ばれている。

写真4　母フェルトに羊毛を置く

出所：モンゴル国ウブルハンガイ県のトゥグルグ地域にて増澤圭撮影（ひつじの惑星 https://www.facebook.com/hitsuji.wakusei/）

写真5　乳清をかける

出所：モンゴル国ウブルハンガイ県のトゥグルグ地域にて増澤圭撮影（ひつじの惑星 https://www.facebook.com/hitsuji.wakusei/）

写真6　羊毛を巻き上げる

出所：モンゴル国ウブルハンガイ県のトゥグルグ地域にて増澤圭撮影（ひつじの惑星 https://www.facebook.com/hitsuji.wakusei/）

写真7　フェルトを引っ張る (1)

出所：モンゴル国ウブルハンガイ県のトゥグルグ地域にて増澤圭撮影（ひつじの惑星 https://www.facebook.com/hitsuji.wakusei/）

写真8　フェルトを引っ張る (2)

出所：モンゴル国ウブルハンガイ県のトゥグルグ地域にて増澤圭撮影（ひつじの惑星 https://www.facebook.com/hitsuji.wakusei/）

写真9　形を整え、さらにフェルト化する

出所：モンゴル国ウブルハンガイ県のトゥグルグ地域にて増澤圭撮影（ひつじの惑星 https://www.facebook.com/hitsuji.wakusei/）

また、フェルトの上に刺繍（シルデッグ）を重ねて、ゲルの中のカーペットやベッドの上の敷物などに使うものを製作する。刺繍によって、フェルトはさらに丈夫になり、長持ちするようになる。楊（1996）によると、フェルト作りは、儀礼を伴う共同作業でもある。作業が全て終了した後、主人は宴会を開き、手伝いに来た人々に羊肉の料理をご馳走する。また、フェルトを大量に作った場合には、リードしてくれた人に主人がフェルトのお礼を渡し、作ったフェルトの枚数が少ない場合には、前年に作った比較的きれいなフェルトあるいは羊 1 頭分を献上する。母フェルトが他の家から借りたものであれば、返すときには必ず羊の胸肉をお礼として相手に贈る。

フェルトはモンゴルの遊牧民の生活にとっては、不可欠な生活用品であり、また遊牧生活における共同体内部の人間関係作りに積極的な意義を持っている。毛織物生産の観点から離れてみても、モンゴル羊毛は、雨風から人間の命を守り、多数の道具を必要とせずに、もっとも実用的で移動生活に適する素材である。近年、日本におけるアスベストを含む建装材の問題解決として、自然素材の導入への需要が高まりつつある。モンゴル羊毛の建築用断熱材としての活躍も期待できよう。

2. 伝統的遊牧生活の中の羊利用

前節では、毛織物生産とフェルト作りの視点からモンゴル羊毛を改めて評価したが、いずれの評価においても、羊毛を「資源」、つまり「もの」と見なしてきた。平時と戦時の資源利用には根本的に違いがある。日本におけるモンゴル羊毛に対する評価の背景には、戦争があることを無視できない。本節では、モンゴルの伝統的な遊牧生活と戦争がそれぞれモンゴル羊に求めたものを比較し、持続可能性の観点からモンゴルの羊毛を改めて評価する。

羊からの畜産物は遊牧民に利用されるが、それらは実際に単純な「もの」とされるのではなく、人間

と家畜との間には深い歴史的・文化的・経済的な絆が存在している。日本におけるモンゴル遊牧社会の畜産関係の研究は、地域研究の分野で多く蓄積されている。その中、内モンゴルに関しては、戦前および戦時中の現地調査が非常に多く存在している。しかし、これらの研究の内容は、当時の政治的・社会的情勢において地域研究としての限界が見られる。本研究が考察した範囲内では、人間と家畜の関係に着目したものの数が少ない。モンゴルの「伝統的遊牧生活」と言っても、内モンゴル自治区とモンゴル国両者の間には、さまざまな相違点があり、また、内モンゴル自治区内でも地域ごとに多様性を持っている。

小貫（1985）によると、モンゴル国ブルド地域は、モンゴルにおける遊牧の典型的地域であり、モンゴル民族の発展史上、古い時代から重要な役割の一端を担った地域でもあった。小貫（1985）がブルド地域を調査対象にした研究は、詳細なものであり、参考とする価値が高いと考えられる。したがって、本研究は、小貫（1985）の研究をベースにし、冬営地 ― 春営地 ― 夏営地 ― 秋営地という遊牧生活のサイクルに沿って、遊牧民の羊利用について説明する。

冬営地（11月～3月）

この時期羊に関する生産活動は、11月から12月にかけての食肉用羊の屠殺・貯蔵作業と2月から3月にかけて仔羊分娩・育成の仕事が中心的に行われる。

11月から12月にかけては、羊が最も肥える時点であり、また気温も大分下がることから、羊を屠殺し、冷凍して保存する。これは、1年において最も楽しい行事である。この時期には、脂肪の多い羊肉をよく食べる。骨付きの羊肉を茹でて食べることを遊牧民は好む。羊の肉だけでなく、羊のミルクを加工した乳製品なども一緒に長い冬の間に大切に消費していく。夏より、冬の食事は圧倒的に肉が多い。

長谷川（1996）によると、モンゴルにおける屠殺の方法は、イスラム系遊牧民が用いる「頸切り」方法ではなく、羊・山羊のような中型家畜に対して「腹割き」方法が使われる。この方法は、モンゴル語では「オルルフ」と呼ばれる。小刀で胸部を少し割き、手を突っ込み、人差し指と中指で心臓近くの大動脈を切断し、羊が痛みを感じないうちに即死させる。

畜肉以外にも、内臓や毛皮、骨などの産物も、衣服や生活用具などに使われている。ゲル（天幕）の中の革紐や家畜の毛で作った縄類、牧畜用の鞭、投げ縄、馬取り縄類、羊のくるぶし骨で作った遊び用の「シャガイ」と将棋（シャタル）、楽器、羊や山羊の膀胱を加工した火薬入れなど、幅広い分野で活用されている。

2月下旬頃から仔羊が生まれ始める。羊はマイナス30度程度の寒さの中で出産する。厳しい自然条件のなか、寒さで仔羊が死なないように、細かい手間をかけて命を保護する。遊牧民はこの時期、徹夜で寒風の中ランプを照らして仔羊を見張るのである。

春営地（4月、5月）

冬営地の周辺の枯れ草はほとんど食い尽くされ、家畜は痩せている。この時期にはまだ積雪があり、枯れ草の残された新しい牧地を求めて春営地に移動する。5月に入ると、山羊の毛刈り作業を行い、母羊の搾乳作業もこの時期から行い始める。子羊と母羊を一緒に放牧すると、仔羊が母羊のミルクを全部飲んでしまうため、子羊と母羊の群れは別々に分けて面倒を見る。人間が生きていくためには、どうしても家畜から肉やミルクをとらなければならない。しかし、長期的に家畜の恵みで暮らしていくためには、家畜を増やしていかなければならない。そこで人間は、母羊のミルクを仔羊と分け合い、

人間と家畜のバランスをとるための知恵を、長い歴史の中で身につけてきたのである。

夏営地（6月～8月）

6月初旬には、夏営地に移る。この時期は、家畜の食べる草の量が豊富であり、家畜の泌乳が盛んになる。羊を搾乳し、ミルクの加工や乳製品作りの仕事をする。羊を搾乳するときは、母羊をロープで羊の頭を交互入れさせる形でつないで行く。絞ったミルクは加工され、冬の食用のために保存される。モンゴルの乳製品は、静置、クリーム分離、調合、加熱濃縮、発酵、攪拌、蒸留などさまざまの処理工程の組み合わせで、保存性の高い製品に出来上がっている。

秋営地

9月初旬、草の多い牧地を求めて、移動の回数を重ねていく。山羊と羊の交配がこの時期に行われる。冬に使う燃料として、羊と山羊排泄物で出来上がったレンガ状のものを集めて、越冬の準備をする。そしてまた冬営地に移動し、冬の生活が再びはじまる。

羊毛がモンゴルの伝統的な遊牧生活でどのような位置を占めているのかを整理しておこう。遊牧民は羊毛だけのために生産活動を行うのではなく、羊に関して利用できる全てのものを無駄が出ないように利用している。中国や日本の畜産業における多数の研究において、このような伝統的な遊牧生活の中の家畜飼育活動は、「粗放」的、あるいは「原始的」と説明されている。しかし、このような遊牧生活は、「移動」と「定住」の相違を前提にして、それぞれより妥当な方法で評価されねばならない。伝統的な遊牧生活では、「移動」という方式によって牧地の生産力を保ち続けることに重点がおかれているが、現代の畜産業では、畜肉と羊毛を資源として捉え、その規模を無限に拡大することに重点が置かれている。両者はそもそも出発点からして食い違っているのである。また、現代の畜産業のように、羊の畜産物を単純な「資源」として搾取することは、過放牧の状態を引き起こし、結果として、環境問題に繋がり、最終的には牧地を喪失することになりかねない。

3. 羊毛と戦争

日清戦争直後から、日本国内経営は大陸における海外市場を目標として進み、このような好景気は毛織物工業に大きな発展をもたらした。ダイヤモンド社編集（1967: 48）の『ウール・羊とウールと人間と』によると、明治29年には原毛輸入税が撤廃され、日本羊毛工業は日露戦争を経て、第一次世界大戦中、軍需産業として発展した。「戦争景気」は羊毛工業に限らず、産業界一般において長続きするものではなかった。戦争が終結に向かうと、羊毛工業界は不況に陥った。しかし、第二次世界大戦の軍需拡大による日本羊毛工業の発展は、再び「ヨーロッパ先進羊毛工業国と肩を並べることができるようになった」。

当時の日本政府は羊毛資源の自給を目的とし、満洲と蒙疆地域で在来種羊の改良事業を国策として以前より積極的に取り組んだ。中生（2000）によると、1937年の盧溝橋事変後、日本の繊維製品の輸出は第三国に向けて盛に奨励され、綿製品の国内使用を禁止するほどにまで海外への輸出に力が入っており、国防上必要な物質を購入していた。関東軍が張家口を占領し、二回改組によって、1939年蒙古連合自治（蒙疆）政権が設立され、日本人の顧問が実質的権限を掌握し、日本軍の統治下におかれた。このような背景の下、対内的な政策として、牧畜の技術革新による増産が重要になった。

さらに角替（1944: 297）によると、日中戦争勃発以前の貿易相手は英米と日本の植民地であり、欧

州戦争の始まりによって、ドイツとイタリアとの貿易が不可能になり、英米依存の傾向がますます強まってきた。また、角替によると、太平洋戦争による食糧不足を補うため、より一層食糧増産が強調され、この時期、英米は日本に対する貿易を全面停止させ、日本国内資源の輸出と国内への必要物資の輸入ができなくなった。1937年以降、繊維原料資源の輸入は軍需上必要な物資として輸入するため、国民の衣生活の最低限の需要を満足することすら容易ではない状況だったと角替は述べている。中生（2000）は、この時期、羊の品種改良、モンゴルの牧畜業の生産性を上げる政策の実行が求められていたと論じている。丁暁傑（2014）の日本の羊毛改良政策に関する研究によると、戦争のための軍需生産が、内モンゴルの牧畜業に大きな負担をかけた。また、オーストラリアから羊毛を輸入できなくなった結果として、日本は軍需物資のために羊毛生産と羊の改良を内モンゴルに押し付けることになったのである。

日本の羊毛工業が戦争に加担しながら自らの発展を遂げた一方、羊毛自給のためにモンゴル地域で強行した改良事業は、武見（1938）によると、自然的、技術的困難があるにも関わらず、モンゴル人の生活様式に変化を迫り、生活を悪化させたのであった。横堀（1932）によれば、日本の羊毛工業による改良事業によって、多くの羊の体が弱くなり、栄養不良で寄生虫が大量に発生していたという。当時のモンゴル人が求めていたものについて、横掘は、羊毛のための改良よりも、家畜を伝染病の流行から救うことであったと述べている。

遊牧民の羊利用と戦争目的の羊利用は対照的である。戦争をするということは、戦争を維持するために不要なもの、すなわち戦争にとって効率の悪いものをすべて排除することであって、戦争に役立つか否かということが、物事を評価する唯一の基準になっていく。モンゴルの羊と羊毛が、毛織物の産出だけを重視しているのではないことは、既に述べたとおりである。ここに、モンゴルにおける羊利用と、近現代の西洋で行われた羊改良との根本的な相違点が見えてくる。羊の肉やミルクが人間の食糧となることをはじめ、羊毛はゲルや敷物として活用されてきたフェルトとして人間を厳しい自然環境から守り、そして遊牧生活がモンゴル羊と羊毛の特徴を作り上げたといってもよいのであろう。

遊牧が「時代遅れ」で「原始的」であると指摘されてきたように、モンゴルの羊毛も「近代化」の大きな波に乗れなかったものとして一般的には理解されるのであろう。しかし、「近代化」の暴力性を無視してはならない。歴史上、家畜文化のなかった日本は、モンゴル羊に対して改良事業を試み、日本軍が敗北し、大陸から撤退することに伴い、改良事業も終焉を迎えた。その背後にあるものは、単純に技術の問題ではない。2016年のデータ[11]によると、内モンゴル自治区羊の年中総頭数のうち、在来種羊の頭数は8345.21万頭である。改良羊は、2980.61万頭である。羊を改良したところで、それを内モンゴルに完全に定着させることができないことがわかる。モンゴルの在来種羊は、家畜多様性と生態系の維持において重要な役割を果たすがために、改良羊と完全に代替可能ではないこと、および現地の牧民が在来種羊の外見と習性に慣れていることが原因として考えられる。

V　結論

戦前や戦時中におけるモンゴル羊毛に関する研究は、当時の日本の畜産学や畜産業および羊毛工業の分野の研究者によってなされていた。毛織物生産を基準として、モンゴル羊毛は、「毛が太くて粗い、

11）　内モンゴル統計局ホームページ（最終閲覧：2018年5月28日18：00）

メリノ羊毛のように良質な毛織物に適さない」と評価されていた。そして、戦後日本とオーストラリアの羊毛貿易の回復によって、モンゴル羊毛は日本中の人々の関心から離れていった。当時の評価はそのまま残っている。しかし、モンゴル羊毛のすべてが「太くて粗い」毛で構成されている訳ではなく、その中の半分または半分以上に細い繊維も含まれている。技術の発展に伴い、カシミヤ生産技術が羊毛に導入された結果、細い毛だけを集めることもできるようになった。その毛は、繊細な工業製品の材料となる可能性を十分に有する。つまり、モンゴル羊毛は、毛織物生産を基準としても評価できる部分があるにも関わらず、日本においては十分な評価を得ていないと言えるだろう。

また、フェルトはモンゴルの遊牧民の生活にとっては、不可欠な生活用品であり、遊牧生活における共同体内部の人間関係作りに積極的な意義を持つ。毛織物生産の観点から離れても、モンゴル羊毛は、雨風から人間の命を守り、多数の道具を必要としないことから、もっとも実用的で移動生活に適する素材であると評価することができる。

しかし、戦争の背景のもとでは、羊毛は「資源」に変身し、戦争を維持するために不要なもの、戦争にとって効率の悪いものはすべて排除され、戦争に役立つか否かということが、物事を評価する唯一の基準になる。その結果として、持続可能性を失う危機にさらされる。遊牧民は羊毛だけのために生産活動を行わず、羊に関して利用できるすべてのものを無駄が出ないように利用する。「移動」という方式で牧地の生産力に配慮しながら、家畜・人間・自然のバランスをよくとることに持続性が見えてくる。そのような意味で、モンゴルの羊毛はより環境にやさしい、人間社会の持続性に配慮した素材として評価されるべきである。

おわりに

筆者自身、中華人民共和国内モンゴル自治区通遼市の「モンゴル族」家庭出身で、牧民家庭育ちでなく、幼稚園の後半から大学を卒業するまで中国語教育を受けていた。両親は二人とも学校教員で、「モンゴル語」で授業を行っていた。学校の合併により、父はこの十数年来、中国語の「普通話」で授業するよう求められている。両親の中国語はあとから勉強したもので、とても堪能であるとは言えない。そのような家庭環境の中で育った著者は、コミュニケーションをとる場合、両親とはもちろん「モンゴル語」で、また自ら半分強制されるかたちで家庭内や周囲の親友たちと「モンゴル語」で日常的な会話を行っている。戸籍上「モンゴル族」になり、名前、言語、衣食住など非常に細かいところまで「モンゴル」というしるしがつけられている。民族のアイデンティティとは、都市生活を送り、中国語教育を受けてきた自分にとって、はっきりとしないものである。中国社会に存在する「遅れている民族」・「先進的民族」や「原始的」・「文明的」という対立から、自分たちの文化と歴史に対して数多くの疑問を抱いてきた。

しかし、モノは常にその民族集団の歴史と文化を伝える力を持つ。羊毛で作られた敷物は筆者とともに内モンゴルから北京まで移動し、大学の四年間、筆者を湿気や寒さから守ってくれた。日常的に羊と羊毛を利用することから生まれる、それらに対する愛着は「私はどこからきたのか」という問いに対して今まで答えを与え続けてくれた。そこから、モンゴルの羊と羊毛に興味を持つようになり、修士論文のテーマとすることまでに至ったのである。

本研究はあくまでも認識論的なものを提示したものであるが、西洋中心的な価値観や近代の価値観

から離れ、アジアや羊毛原産地としてのモンゴルの視点から羊毛を考える試みであった。それと同時に、本研究は、他者を理解するための試みでもあった。ノルウェー出身の平和学者、ヨハン・ガルトゥングは、平和の対置概念とは、戦争ではなく、「暴力」だと提唱した。彼の言う「暴力」とは、「実現可能であったものと現実に生じた結果とのあいだのギャップを生じさせた原因」、つまり、各人の能力の全面的開花を阻害する諸要素を意味する。「直接的な暴力」以外にも、「構造的な暴力」や「文化的な暴力」もこの社会に存在していることを無視してはならない。本研究の発展的課題として、各種の「暴力」がモンゴルの伝統的な遊牧生活の中にどのような姿をとって現れるのか、モンゴルの遊牧社会にどのような影響をもたらしたのかについて研究したい。

来日してすでに五年間も経った。この五年間、今岡良子先生は、フィールドや普段の院生生活の中で筆者に惜しまず指導してくださった。また、フィールドワーク中に撮影したフェルト作りの写真を本論文に掲載させてくださり、心から感謝の意を申し上げたい。今岡先生を通じて知り合った、羊毛素材学専門の本出ますみ先生の著作『羊の手帖』は、本論文の執筆に際して、本当に重宝した。これからの研究も、地域の土台への理解を深め、地域に根ざしたものになればよいと考えている。

参考文献

〈英語〉

Gunilla Paetau Sjöberg translated by Patricia Spark. (1996) *Felt : new directions for an ancient craft*. Interweave Press.

Ryder, M. L. (1973) *Hair*. London: Edward Arnold.（加藤淑裕・木村資亜利 訳『毛の生物学』朝倉書店1980年）.

Ryder, M. L. (1983) *Sheep & man*. London: Duckworth.

Zeuner, F. E. (1963). *A history of domesticated animals*. New York and Evanston: Harper & Row, Publishers.

〈中国語〉

谢成侠编著（1985）. 中国养牛羊史（附养鹿简史）农业出版社 .

王安越（1989）. 乌珠穆沁的类型分析 .《中国养羊》, 1: 9-10.

毛新元（1989）. 关于两型毛定义的商榷 .《中国纤检》, 2: 35-36.

刘海源（1995）. 绵羊绒纤维的形态结构及其与山羊绒的比较研究 .《毛纺科技》, 5: 40-45.

赵云峰（1998）. 浅析绵羊绒的开发 .《中国养羊》, 2: 32.

王趁红，沈金清，王柏华（1998）. 毛绒类纤维鳞片排列特征统计分析 .《北京服装学院学报》, 18（2）: 12-15.

坡・特木尔（2005）. 培育目前及未来市场需求的乌珠穆沁羊 .《全国畜禽遗传资源保护与利用学术研讨会》.

佟玉林（2005）. 浅论乌珠穆沁羊遗传资源保护与开发利用 .《全国畜群遗传资源保护与利用学术研讨会》.

王玉，刘卫平．沙志娟等（2006）. 呼伦贝尔羊“巴尔虎”品系的外形分析 .《中国草食动物科学》, 1: 142-143.

李宏图，秦秀娟，乌恩巴雅尔等（2006）. 呼伦贝尔羊＂短尾＂品系的外形分析 .《中国畜牧兽医学会养羊学分会全国养羊生产与学术研讨会》, : 148-149.

郑文新，王乐等（2009）. 关于“绵羊绒”纤维分类以及名称的考证研究 .《草食家畜》, 2: 4-9.

樊宏霞，薛强（2010）. 内蒙古养羊业的现状、问题及对策 .《内蒙古农业大学学报（社会科学版）》, 12（6）: 95-97.

丁晓杰（2014）. 日本主导下伪蒙疆政权绵羊改良计划的反复及破灭 .《古今农业》, 2: 81-91.

〈日本語〉

井島重保（1929）『羊毛の研究と本邦羊毛工業』光弘堂。

伊東光太郎（1957）『日本羊毛工業論』東洋経済新報社。

今岡良子（2002）「1990年、バヤンホンゴル県における広域調査のフィールド・ノート」『大阪外国語大学論集』

26。
F・E・ゾイナー（1983）『家畜の歴史』(国分直一・木村伸義 訳) 37 (6): 272-281, 法政大学出版会。
M.L. ライダー（1980）『毛の生物学』（加藤淑裕・木村資亜利 訳）朝倉書店。
大内輝雄（2015）「日本のウールの歴史は百年」『 SPINNUTS』90(1): 2-3。
小貫雅男（1985）『遊牧社会の現代』青木書店。
大阪大学歴史教育研究会（2014）『市民のための世界史』大阪大学出版会。
加藤定子（2002）『古代中央アジアにおける服飾史の研究 ―パジリク文化とノイン・ウラ古墳の古代服飾』東京堂出版。
加茂儀一（1973）『家畜文化史』法政大学出版局。
木戸衛一編（2014）『平和研究入門』大阪大学出版会。
草刈虎雄（1950）『畜産学』実業教科書株式会社。
小長谷有紀（1996）『モンゴル草原の生活世界』朝日新聞社。
佐々木秀賢（1936）『毛織工業』一宮市工業会。
芝田清吾（1957）『最新畜産学』明文堂。
白石典之（2002）『モンゴル帝国史の考古学的研究』同成社。
全国経済委員会編；中支建設資料整備委員會訳編（1941）『支那の毛織工業』（編譯彙報；第52編）南京：中支建設資料整備事務所編訳部。
竹沢泰子編（2005）『人種概念の普遍性を問う―西洋的パラダイムを超えて』人文書院。
武見芳二（1938）「蒙疆地域とその羊毛の将来」『地理』1（3）: 110-113。
谷泰（2010）『牧夫の誕生 ―羊・山羊の家畜化の開始とその展開』岩波書店。
ダイアモンド社編（1967）『ウール・羊とウールと人間と』ダイアモンド社。
角替利策（1944）「大東亜戦争と繊維工業」『繊維学会誌』1（5）: 297-303。
角田健司（2009）「ヒツジ ―アジア在来ヒツジの系統―」在来家畜研究会（編）『アジアの在来家畜』名古屋大学出版会。
角田健司（2010）「ヒツジ」正田陽一（編）『品種改良の世界史・家畜篇』悠書館。
角山栄（1975）『産業革命と民衆』河出書房新社。
中生勝美編（2000）『植民地人類学の展望』風響社。
中原重樹・林英夫（1937）「支那山東省産羊毛に就いて」『日本畜産学会報』10（3-4）: 299-304。
野澤謙・西田隆雄（1981）『家畜と人間』出光書店。
長谷川有紀（1996）『モンゴル草原の生活世界』朝日新聞社。
バ・エルデネツェツェグ（2009）『モンゴルの伝統的なフェルト作り』ウランバートル。
福井勝義・谷泰編著（1987）『牧畜文化の原像 生態・社会・歴史』日本放送出版協会。
プレブドルジ・アリューンダリ（2011）「モンゴルの羊毛のデザイン」卒業論文 , 京都工芸繊維大学。
本出ますみ（1988）（2016改訂版）『羊の手帖』SPINNUTS。
南満洲鉄道株式会社天津事務所調査課編（1936）『北支那の羊毛』（北支経済資料；第32輯）天津：南満洲鉄道株式会社天津事務所。
百瀬正香著，田邊佳子絵（2000）『羊の博物誌』日本ヴォーグ社。
八巻邦次（1995）「羊毛の品質について」季刊誌『シープジャパン』4月号。
山根章弘（1979）『羊毛文化物語』講談社。
楊海英（1996）「モンゴルにおけるフェルト造り ―方法論と儀礼性を中心に―」『繊維製品消費科学。』
横堀善四郎（1932）「満蒙の家畜衛生」『中央獣医会雑誌』45（5）: 364-370。

（あるす）

《研究ノート》

モンゴル国における放牧地の生物多様性の保全活動に関する研究

― タルバガの保全的移植の事例を通して ―

ジャルガルサイハン・ラマー

はじめに

遊牧という生業にとって、放牧地の生態系を保全することは不可欠なことである。モンゴル国では1989年の体制移行後、牧畜業をとりまく状況の変化の中で放牧地の生物多様性の減少がみられる。その原因の一例として、地球規模の気候変動、ヤギなどの特定の家畜の過放牧、地下資源の採掘、自動車の走行などが挙げられる。

これに対して、放牧地の生態系の保全を目的とする代表的な取り組みとしては害虫の駆除などが挙げられるほか、家畜資産税の課税[1)]も特定の家畜の過放牧を抑制する役割を果たしていると考えられる。

こうした状況の下、草原（ステップ）を生息域とする地下生の草食哺乳類動物であるタルバガ（モンゴル名：Тарвага、学名：Siberian marmot）が土壌の生物多様性に果たす役割を再評価し、放牧地の生態系の回復に活用しようとする動きがある。

しかし、タルバガは古来、人間によって衣食住または医薬の資源として狩猟・利用され、現在では国際自然保護連合（IUCN）の編纂する『絶滅危惧哺乳類動物図鑑』（レッドデータブック）に記載されるまでに、生息域及び個体数の減少が進んでいる。

近年、生息域と繁殖を保護する方法として、また放牧地の生物多様性の回復・保全に活用する目的で、タルバガの「保全的移植」[2)]が積極的に実施されているが、だれが主体となり、いつから、どこで始められた取り組みなのか、どのような目標が掲げられ、実施のプロセスや成果はどうなのか、本論の第１の課題は、タルバガの保全的移植事業の動向と実態を把握することである。

他方、モンゴル社会においては、タルバガを動物資源として利用し続けたいとする文化的・経済的な要請も根強く存在している。タルバガの禁猟制限に対する住民の意識を高める必要があり、密猟に歯止めがかからなければ、保全的移植の実施はかえって、さらなる個体数の減少をまねくリスクを抱えている。本論の第２の課題は、保全的移植の実効性や持続性を検証する方法として、動物資源としてのタルバガの利用に対する考え方について考察することである。

１）　家畜資産税（Малын хөлийн татвар 1997年制定、2010年５月改定）：５種の家畜の価値をヒツジの価値に換算し、毎年徴税する。ウマ、ウシはヒツジ５頭、ヤギはヒツジ1.5頭、ラクダはヒツジ２頭と換算する。税額はヒツジ１頭につき100トゥグルグと決められている（Байгал орчин, аялал жуулчлалын сайдын 2010 оны 5 сарын 27-ны өдрийн А-156 дугаар тушаалын хавсралт）。

２）　保全的移植とは、国際自然保護連合の定義によれば、「ある地域から別の地域へ生物を意図的に移動させ放出すること」である（IUCN 2014）。

先行研究の検討

タルバガに関する研究は多くの研究者によりなされており、近年のモンゴル国ではシンポジウムが開かれている[3)]。管見の限り、本論で扱うタルバガの保全的移植に関する研究は見当たらないため、次の諸研究の知見をふまえる。

本論に関連性が高い研究としては、第1にタルバガの生態に関する研究が挙げられる。代表的な研究は、モンゴル国科学アカデミー生態学研究所の哺乳類研究者である Ya. アディアの研究（Адъяа 2000）であり、タルバガの身体や巣の構造、餌となる植物の種類などが詳述されている。

第2に人間がタルバガを狩猟し、毛皮や肉を利用してきた歴史をふまえ、その行為が近代の人間社会にペストの流行をもたらす一要因になったと、原山煌（2009: 125-162）が指摘している。原山煌の研究が対象とする20世紀前半には、タルバガの毛皮に対する大規模な需要が生じ、それを獲ろうとする人々が圧倒的に増え、獲れるだけ獲ろうという時代でもあった。

第3にモンゴル人民共和国における農牧業協同組合（ネグデル）の事業として実施されていたタルバガの狩猟とその改善点について、Kh. ゴンガージャブ（1959）が考察している。原山煌の研究が対象とした20世紀前半と異なり、制限しながら獲ろうという考え方に変わってきた時代だった。

第4にモンゴル国タルバガ保護協会（Монголын Тарвага Хамгаалах Нийгэмлэг）による、タルバガの生息密度に関する調査結果（Монголын Тарвага Хамгаалах Нийгэмлэг 2010）が挙げられる。これはモンゴル国内におけるタルバガの個体数をデータ化した唯一の調査結果である。

1．タルバガとはどんな動物か

タルバガはげっ歯類の草食哺乳類動物で、国際的な分類ではマーモット科に属するとされる。現在、地球の北半球に14種類のマーモットが生息しており、その内の8種類がユーラシア大陸に生息している（Адъяа 2000: 26）。モンゴル高原には、アルタイタルバガ[4)]、モンゴルタルバガ[5)]の2種類が生息する。タルバガの平均寿命は10年で、草原に生育する約80種類の植物を食糧とし、生活史の87,5％の時間

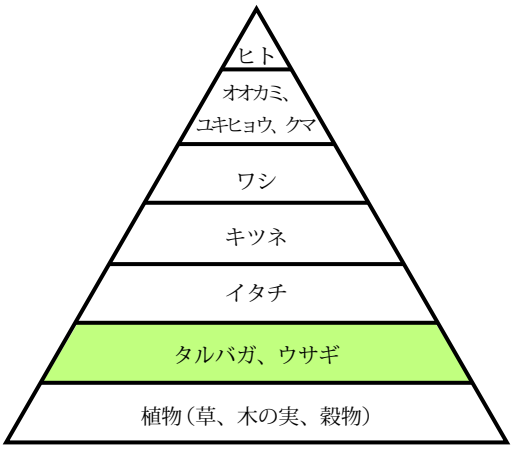
3）　論文集: Жавзмаа, Н., Мөнхөө, Л. (2010) : モンゴル国自然史博物館の職員が中心となり、タルバガの写真展示会とともに、それぞれの研究成果を報告し、それをまとめたものである。モンゴル国自然史博物館は2010年5月24日に、モンゴルタルバガ保護協会とともに、モンゴルタルバガシンポジウムをモンゴル国自然史博物館会議室において開催した。

4）　アルタイタルバガの国際的な学名は Grey marmot, Altai marmot 等がある。本論においては便宜的に「アルタイタルバガ」と表記する。

5）　モンゴルタルバガの国際的な学名は Siberian marmot, Mongolian marmot, Tarbagan marmot, Transbaikal marmot 等がある。本論においては便宜的に「モンゴルタルバガ」と表記する。

を土の中にある巣で過ごす（Адъяа 2000: 46,84）。モンゴル国の草原における生態系ピラミッドの中で、タルバガは被捕食動物の最下層に位置している。（図１参照）

図1　タルバガからみた生態系ピラミッド



Ya. アディア（2000）によれば、成年期のタルバガの体重は約9.8㎏、身長は約63㎝であり、また、深さ１～1.5ｍで長さ３ｍくらいの巣を掘る。繁殖力が強く、１回の出産で10匹程度の子を産む（Адъяа 2000: 40）。また、他のげっ歯類哺乳動物と同様にペストなどの病源菌を保菌する特徴がある。

古来、モンゴル人はタルバガを衣食住や医療に用いてきた。最も古い記録は『モンゴル秘史』の記述[6]であり、幼少のテムジン（後のチンギス・ハーン）はタルバガの肉を食し、飢えを凌いだとされている。モンゴル医学における利用例を挙げれば、ナツメグと煮たタルバガの心臓は心臓病に、生の状態のタルバガの膀胱、腎臓は腎臓病に効能があるとされた他、脂肪、匹蓋骨、歯などは医薬の原料として用いられた（Чимэдрагчаа, Алимаа, Төмөрбаатар 2012: 69）。また、家畜に対する医療にも用いられてきた[7]。

ゆえに、タルバガを表すモンゴル語の語彙には、年齢の区別（１～４歳以上）、オス・メスの区別（4歳以上の繁殖適齢期に限る）がある[8]。こうした年齢や性別を区別する語彙は、5種の家畜（ウマ、ウシ、ラクダ、ヒツジ、ヤギ）にはみられるが、野生動物一般を表す語彙にはみられない。つまり、タルバガはモンゴルの遊牧民にとって、数ある野生動物の中でも特に近しい存在であったことがうかがわれる。

現在、モンゴル国において２種のタルバガは絶滅に瀕しているとみなされており、『モンゴル国絶滅危惧哺乳類動物図鑑 2006年版』（Монгол Улсын Хөхтөн Амьтны Улаан Данс 2006: 31）に掲載されている。この図鑑は国際自然保護連合（IUCN: International Union for Conservation of Nature and Natural Resources）が提示する基準[9]に従って編集されており、モンゴルタルバガについては「絶滅の危惧」

6）　Паламдорж, Ш., Мягмарсамбуу, Г. (2009 : 43)

7）　例えば、蹄の痛みにタルバガの脂肪を塗布する。弱った家畜の滋養にタルバガの胃（乾燥保存したもの）を食させる。

8）　1歳は мөндөл, 2歳は хотил, 3歳は шар хацарт, 4歳以上（繁殖適齢期）のオスは бурхи, メスは тарч という。

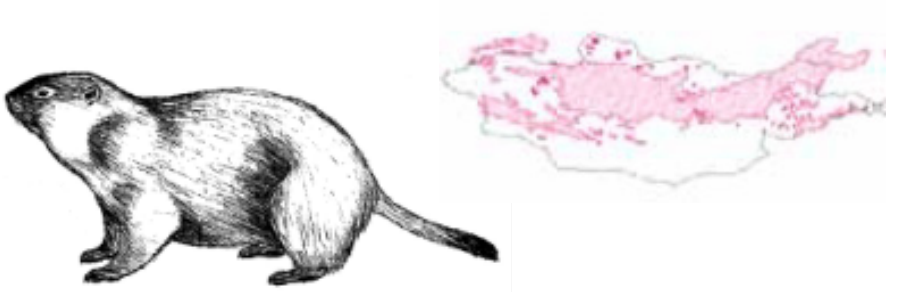
9）　国際自然保護連合（IUCN）よる絶滅危惧動物の評価レベルには、①絶滅（устсан）、②野生種の絶滅（байгалд устсан）、③特定地域における絶滅（бүс нутгийн хэмжээнд устсан）、④深刻な絶滅の危惧（устаж байгаа）、⑤絶滅の危惧（устаж болзошгүй）、⑥準絶滅の危惧（эмзэг）、⑦個体減少の傾向（ховордож болзошгүй）、⑧低懸念（анхааралд өртөхөөргүй）、⑨データ不足（мэдээлэл дутмаг）、⑩未評価（үнэлэх боломжгүй）というレベルが示されている。

（устаж болзошгүй）、アルタイタルバガは「データ不足」（мэдээлэл дутмаг）と記載されている。また、この図鑑の出版時点（2006年）で、モンゴル国における２種のタルバガの分布状況は、次の図に示されている（Монгол Улсын Хөхтөн Амьтны Улаан Данс 2006: 32）。（図２、図３参照）

図2　モンゴル国におけるアルタイタルバガの生息地

モンゴル国絶滅危惧哺乳類動物図鑑（レッドデータブック）より

図3　モンゴル国におけるモンゴルタルバガの生息地



モンゴル国絶滅危惧哺乳類動物図鑑（レッドデータブック）より

2．タルバガの利用に対する考え方の変化

2.1　獲れるだけ獲るという考え方

Kh. ゴンガージャブ（1959）、O. ナムナンドルジ（1964）、原山煌（2009）らの研究によれば、19世紀後半にタルバガの毛皮の膨大な需要が生じたため、ペストに関する基礎知識のない大勢の人がタルバガを金銭目的で狩猟するようになった結果、19世紀末から20世紀初頭の時期にペストが大流行し、多くの人が死亡したとされる。商品価値のみ見いだされ、“ 獲れるだけ獲る ” という考え方であったといえる。O. ナムナンドルジは「身分、国籍関係なく、タルバガの狩りに専念し、わなを使う、巣を掘る、巣に水を入れる、煙を使うなどの様々な方法で獲り始めた」（Намнандорж 1964: 119）と回想している。

ペストの流行が契機となり、タルバガの狩猟法が変化する。原山煌によれば、20世紀初頭ごろモンゴルを旅したロシアの探検家であるルーカシキンは、1927年にはペストにかかったタルバガを見分けるために銃による狩猟が法律で定められていたと書き残している（原山 2009: 157）。

2.2　制限しながら獲るという考え方

自己消費の目的ではなく、売買目的でのタルバガの乱獲が進む中、モンゴル人民共和国は1924年に「狩猟法」（Ан агнах хууль）を制定し（Хайдав, Чагнаадорж 1969: 16）、タルバガ猟の制限を打ち出す。

1930年代に発足した農牧業協同組合（ネグデル）では、タルバガ猟は「計画的」に実施された。バヤンホンゴル県エルデネツォグト・ソム出身のYo. バヤンダライ（1932～2017）によれば、「1940年代の農牧業協同組合（ネグデル）には狩猟を専門とする構成員がいてひと夏の狩猟期間に1000匹くらい獲る人もいた」と回想している。Yo. バヤンダライの場合、ひと夏15～20匹を獲り、その毛皮をなめしてズボンなどの生地として、また肉を食料品として利用していたという[10)]。

20世紀後半に入ると、タルバガ猟の規制強化が提言されるようになる。Kh. ゴンガージャブ（1959）は、タルバガの頭数が減少しつつあるため、次の点に配慮するよう提起した。

①繁殖期である春には獲らないようにする。タルバガの繁殖期を避けることによって、子のタルバガの育ちに貢献する。また、春の時期のタルバガの毛皮の質が良くない特徴がある。
②狩猟期間は8月1日から冬眠するまでとする。
③個体数の減少が著しい、ウムヌゴビ県、ドンドゴビ県、スフバートル県ではタルバガ猟を一時中止し、タルバガが完全にいなくなった地域に移植させる。
④タルバガ猟は隔年で実施する。
⑤タルバガの捕食者である、オオカミ、猛禽、イタチなどの数を調整する。
⑥「狩猟法」（Агнуурын хууль）に違反した者を厳しく取り締まる。
⑦巣を破壊してまで獲らないようにする。巣を破壊することによって繁殖率が下がるリスクがある。
⑧ペスト予防のため、わなでの捕獲を禁止し、動きのにぶいものは獲らない。
⑨狩猟の際、タルバガを傷つけないよう注意する。
⑩（農牧業協同組合の）狩猟専門の構成員は研修を受講させた上で、任務につかせる。

Kh. ゴンガージャブの他にもタルバガ狩猟事業を見直そうと提案していた研究者がいる。モンゴル人民共和国科学アカデミー生態系研究所のO. シャグダルスレン は、「年間平均100万枚の毛皮だけが生産されている。今後は肉を干すか燻製にして日常的に食すようにし、個体数が減少しつつあるドルノド県の東部、ヘンティー県の南部、スフバートル県、ドルノゴビ県などでは隔年で狩猟することが重要である。さらに、狩猟匹数のノルマを減らすことが適切だ」（Шагдарсүрэн 1966: 82）と提案している。

このように、20世紀後半のタルバガ猟は農牧業協同組合の生産体制の中で実施されたが、“制限しながら獲る”という考え方が登場したことがわかる。他、実際に実施されたかどうかをはっきりさせていないが、タルバガを移植させようと提起する者がいたことがわかる。

2.3　体制移行後におけるタルバガの乱獲

1990年に農牧業協同組合が解体し、狩猟専門の構成員が個人レベルで狩猟・売買するようになる。モンゴル国政府は1991年度に465,600枚数のタルバガの毛皮を獲る計画[11)]を立てていたが、その目

10）　筆者によるインタビュー調査：2016年12月29日バヤンホンゴル市。

11）　Засгийн газрын 1992 оны 5 сарын 22-ны өдрийн 95 дугаар тогтоол (захирамж) (1992). “Тарваганы арьс бэлтгэх, нийлүүлэх, борлуулах ажлыг шалгасан дүнгийн тухай, УБ

標が達成されなかった理由は、公的な生産物ルートに毛皮を卸さない狩猟従事者が現れたことである。

2002年にモンゴルのタルバガ保護協会（Монголын тарвага хамгаалах нийгэмлэг）が、モンゴルの東部地域（ドルノド県、スフバートル県、ヘンティー県）に居住する所有家畜数の少ない世帯を対象に行った調査結果によれば、回答者の半分弱が「普段タルバガの狩りをしている」と、15％が「毛皮などを売り現金を得ている」と答えている（Монголын тарвага хамгаалах нийгэмлэг 2010: 5）。

この調査が示すように、モンゴル国では体制移行後の経済的な困窮の下で、個人レベルでタルバガの乱獲が広く行われた。タルバガの個体数の危機的な減少を受け、2005年に自然環境省大臣の命令でタルバガ猟を2年間完全禁止した後、その命令は解除されないままである。また、タルバガの密猟者に対する罰則も強化しており、2011年にモンゴル国政府は1匹につき、オス17万トゥグルグ、メス20万トゥグルグと罰金を改定している（Засгийн газрын 2011 оны 23 дугаар тогтоолын 1 дүгээр хавсралт 2011）。

しかし、密猟に歯止めがかからない状況の下、タルバガはモンゴル国の絶滅危惧種リストである、レッドブックに掲載される程に減少している（Монгол улсын хөхтөн амьтны Улаан данс 2006: 31,32）。タルバガ猟に対する考え方は、“制限しながら獲る”から“獲れるだけ獲る”という考え方への逆コースを辿っている。

3．タルバガの繁殖の保護 ―― 保全的移植の動向

2000年代に入り、タルバガの繁殖を保護・促進する取り組みが始まった。2005年1月13日、国会大ホラルは、絶滅の恐れのある野生動植物の保護に関する命令（決定第03号）を出し、「生態系において大きな役割を果たす」としてタルバガの保護を指示している[12)]。この命令は、タルバガを動物資源としてだけ見なすのではなく、生態系における役割という従来見落とされてきた観点に立った取り組みに着手する契機となる。

一般に野生動物の保護策を立案するとき、人為的な行為を排除する空間（自然保護区）を設けるという方法もあるが、草原すなわち遊牧民にとっての放牧地の生態系に好ましい影響を与えるという点から、タルバガの場合は保全的移植の方法が採用される動向にある。

保全的移植のプロセスは、その動物の生息域や個体数の調査から開始されるが、モンゴル国環境省や科学アカデミー生態学研究所がその任に当たっている。例えば、猟犬が多く飼われている場合、移植の対象から外すなどしている（Дорнод аймаг байгаль орчин, аялал жуулчлалын газар 2017）。

移植の実施に当たっては当該地域の住民に対する研修や意見交換会を催し、住民を主体とする組織に移植後のモニタリングを要請するケースが多くみられる（News.gogo.mn 2014.07.01）。研修の主な内容は、タルバガを移植するメリット、モニタリングの方法、法的な環境などである（Дорнод аймаг байгаль орчин, аялал жуулчлалын газар 2016）。

1つの地域に対する移植の規模は約20～120匹、移植後1年間の繁殖率は約230～300％という結果が報じられている（Сүхбаатар аймгийн байгаль, орчин аялал жуулчлалын газар 2015）。

住民として参加している個人の思いとして、ドンドゴビ県のB. バトエルデネ及びセレンゲ県のG.

12） Улсын их хурлын тогтоол, Байгаль орчны талаар авах зарим арга хэмжээний тухай (2005): “Улсын их хурлын тогтоол, Байгаль орчны талаар авах зарим арга хэмжээний тухай”, УБ, 2005.01.13

トゥメンフー[13]は、新聞社の取材に対して次のように語っている。B. バトエルデネは「タルバガはげっ歯類の草食哺乳類動物で、土の通気性をよくしてくれるのだ。さらに、その糞も肥料になるから草の育ちやすい環境作りに役割を果たしている」という（Bolod.mn 2013.08.28）。G. トゥメンフーは「タルバガをはじめ絶滅危惧種となっている他の動物の繁殖にも役立たせたい」と語っている（News.mn 2016.02.16）。両氏のコメントからみれば、放牧地の生態系の保全という目的意識をもって参加していることが確認される。

他方で、移植されたタルバガを捕獲しようとする者も少なくないようである。ドルノド県のバヤンオーラ・ソム、ツァガーンオボー・ソムには、2016年6月に117匹のタルバガが移植されたが、後のモニタリングによりバヤンオール・ソムから約120個、ツァガーンオボー・ソムから10個あまりのわなが回収されている（Дорнод аймаг байгаль орчин, аялал жуулчлалын газар 2017）。

タルバガの保全的移植は住民の参加を得て、その成果を挙げつつあるが、移植の目的が広く住民一般に浸透しているとは言えない状況である。タルバガを動物資源とみなし、文化的・経済的に利用してきたモンゴル人の間に、その狩猟を禁止して繁殖を保護する取り組みを根づかせていくことは容易ではないと考える。この懸念を予兆させるものとして、地域間でタルバガを奪い合うという、新たな問題が発生している。一例として、スフバータル県出身の遊牧民の Ts. スフトゴーは、2016年にドルノド県のバヤンオール・ソムからタルバガのオス10匹、メス9匹を連れて行き、スフバータル県のエルデネツァガーン・ソムに移植した。しかし、行政の了承や科学者の審査を受けておらず、動物に関する法律に違反したとされる[14]。他方、Ts. スフトゴーがタルバガを連れ去ったドルノド県のバヤンオール・ソムでは、別の地域からタルバガを移植する計画を立てていたところでもあった（Control.mn 2016.05.11）。

国際自然保護連合（IUCN）は「移植は人の利害に影響を与えるだけでなく、人の利害によって影響される」と警告を発している（IUCN 2014）。

おわりに

本論は、モンゴル国における放牧地の生物多様性の保全について、タルバガの繁殖保護活動の実態を把握すると共に、活動の実効性・持続性を検証する方法として、タルバガの利用に対する考え方を考察した。

モンゴル国においてタルバガは古来、動物資源として狩猟され、絶滅が危惧される程に減少した近年、草原（放牧地）の生態系に与える影響が再評価されるようになった。その影響を活かしつつ、タルバガの繁殖を保護する取り組みとして保全的移植の方法がとられており、成果を挙げている事例もある。

しかし、依然としてタルバガを動物資源とみなす意識は根強く、移植されたタルバガを捕獲したり、地域間でタルバガを奪い合うという問題も生じている。

13）　セレンゲ県サント・ソム在住の遊牧民である G. トゥメンフー氏が郷里のホブド県からアルタイタルバガを連れて来て、セレンゲ県で繁殖を計画しているとされる。

14）　Монгол улсын хууль, Амьтны тухай（2012：7）「動物に関する法律」の第2条8項には、（動物に関する）専門的な機関が、学術機関が出した調査結果に基づいて、当該の行政機関からの許可を得た上で動物を移植させることができると定めている。

モンゴル人は古来、タルバガを動物資源として衣食住や医療に用いてきたが、19世紀末から20世紀初頭において金銭的収入を目的とする狩猟が広がった点について、“獲れるだけ獲ろう”という考え方が見出される。20世紀半ばには、農牧業協同組合（ネグデル）による狩猟が行われる中、“制限しながら獲る”という考え方が提言されていた。しかし、1989年の体制移行後、経済的な困窮を深める中で、再び“獲れるだけ獲ろう”という方向へ後退した経緯がある。

タルバガの保全的移植の取り組みは、牧畜業の振興と放牧地の生態系の保全という現代モンゴルの課題に対する挑戦の1つである。ただし、タルバガの禁猟制限に対する住民の意識の醸成が進まなければ、却って個体数の減少を招くリスクを抱えているといえる。

今後の課題は、モンゴル国環境省などの行政機関や科学アカデミーで立案・作成された計画書やモニタリング調査報告書などを収集し、保全的移植の実態をより詳細に把握することである。また、移植先だけでなく、移植元の住民意識についても、住民に対する聞き取り調査を実施して、活動の実効性・持続性の検証を確実なものとしたい。他、農牧業協同組合による狩猟事業の実態を受け、当時の研究者らが提起した配慮点、とくにタルバガの移殖に関するところについて検討を深めたい。近年実施されている保全的移植に関係する部分があるかどうか調べたい。

文　献

〈資料〉

Дорнод аймаг байгаль орчин, аялал жуулчлалын газар (2017) “Байгаль хамгаалах нөхөн сэргээх зардлаар 2016 онд хийж хэрэгжүүлсэн ажлууд”, Дорнод аймаг байгаль орчин, аялал жуулчлалын газрын цахим хуудас, http://dornod.mne.gov.mn/?p=676 /2017/01/12.

Дорнод аймаг байгаль орчин, аялал жуулчлалын газар (2016) “БОНХАЖ сайд-дорнод аймгийн засаг даргатай байгаль орчин, ногоон хөгжил, аялал жуулчлалын бодлогыг орон нутагт хэрэгжүүлэх талаар 2016 онд байгуулсан бүтээгдэхүүн нийлүүлэх гэрээний биелэлт, Тарвага нутагшуулах /Баян-Уул, Цагаан овоо, Гурванзагал сум”, http://dornod.mne.gov.mn/?p=670 /2016/11/27.

Монгол улсын хөхтөн амьтны улаан данс (2006) Emma L. Clark, Ж. Мөнхбат эмхэтгэсэн. УБ. : Admon хэвлэлийн газар.

Сүхбаатар аймгийн байгаль орчин, аялал жуулчлалын газар (2015) “Сүхбаатар аймгийн байгаль орчин, аялал жуулчлалын газрын 2015 оны 8 сарын тайлан”, http://baigalorchin.su.gov.mn/?p=378/2015/12/03.

IUCN(2014). Guidelines for reintroductions and other conservation translocation, version 1. (関東地方環境事務所野生生物課、株式会社プレック研究所 (訳)『再導入とその他の保全的移殖に関するガイドライン』第1版).

〈モンゴル国の法律、政府決議〉

Засгийн газрын 1992 оны 5 сарын 22-ны өдрийн 95 дугаар тогтоол (захирамж) (1992). “Тарваганы арьс бэлтгэх, нийлүүлэх, борлуулах ажлыг шалгасан дүнгийн тухай, УБ

Байгал орчин, аялал жуулчлалын сайдын 2010 оны 5 сарын 27-ны өдрийн А-156 дугаар тушаалын хавсралт (2010) . “Байгал орчны хохирлын үнэлгээ, нөхөн төлбөр тооцолх аргачлал”.

Засгийн газрын 2011 оны 23 дугаар тогтоолын 1 дүгээр хавсралт (2011) . “Ан амьтны экологи-эдийн засгийн үнэлгээ”, УБ.

Монгол улсын хууль, “Амьтны тухай” (2012). /шинэчилсэн найруулга /2012/05/17/ УБ.

Улсын их хурлын тогтоол, “Байгаль орчны талаар авах зарим арга хэмжээний тухай” (2005) . /2005/01/13/ УБ.

〈研究〉

［モンゴル語］

Адъяа, Я. (2000) . *Монгол тарвага биологи, экологи, хамгаалал, аж ахуйн холбогдол.* УБ. : Admon хэвлэлийн газар.

Гунгаажав, Х. (1959) . *Тарвага бол манай орны үндсэний баялгийн нэг мөн.* УБ. : Улсын хэвлэлийн газар.

Жавзмаа, Н., Мөнхөө, Л. (2010) . *Монгол тарвага эрдэм шинжилгээний бага хурал, фото зургийн үзэсгэлэн 2010.3.26-4.11* . УБ.

Монголын тарвага хамгаалах нийгэмлэг (2010) . *Монгол орны зарим бүс нутагт нутгийн иргэдийн оролцоотой тарваганы тархац, нөөцийг тогтоох судалгааны ажлын тайлан*. 2010.12.УБ.

Намнандорж, О. (1964) . *Бүгд Найрамдах Монгол Ард Улсын дархан газар, ан амьтад*. УБ. : Шинжлэх Ухааны Академийн хэвлэл.

Хайдав, П., Чагнаадорж, Б. (1969) . *БНМАУ-ын Ан амьтад*. УБ. : Улсын хэвлэлийн газар.

Паламдорж, Ш., Мягмарсамбуу, Г. (2009) . Монголын нууц товчоо. УБ. 2009

Чимэдрагчаа, Ч., Алимаа, Т., Төмөрбаатар, Н. (2012) . *Монгол анагаах ухааны идээн ундаан засал*. УБ.

Шагдарсүрэн, О. (1966) . *Монгол орны агнуурын үндсэн ан амьтад*. УБ.

［日本語］

原山煌（2009）「タルバガンとペストの流行」安富歩・深尾葉子編『「満州」の成立』pp. 125-162. 名古屋大学出版会。

〈新聞 (紙媒体、電子媒体)〉

News.gogo.mn (2014.07.01) “Галшар суманд тарвага нутагшуулав” http://news.gogo.mn/r/142937.

Control.mn (2016.05.11) “Дөрвөн суманд тарвага нутагшуулжээ” http://www.control.mn/i/2380/#.V34DVOiLTIU.

News.mn (2016.02.16) “Тарвага үржүүлдэг малчин” http://www.news.mn/r/235501.

Bolod.mn (2013.08.28) “Хаалган хаданд тарвага нутагшуулж байна” http://www.bolod.mn/News/108700.html.

（じゃるがるさいはん　らまー）

《研究ノート》

地域の資源と人々に根ざした企業の誕生

― モンゴル国フブスグル県におけるお茶づくりの事例から ―

D. ツェレンナドミド

はじめに

筆者は2012年に日本へ留学して日本語学校で学んでいる時に、山口県熊毛郡上関町祝島という小さな島で作られているビワ茶について耳にした。祝島から4km離れた「田ノ浦」という場所が原発建設用地として決められ、それに対し祝島の人々は1982年から現在まで35年間、原発の建設に反対し続けてきた。祝島の人口は現在381人[1)]。原発から入ってくるお金に頼らずに、島で採れるビワでお茶を作り、地域経済の自立と安定を目指していることを知った。美しくて豊かな祝島に一生住み、その島の暮らしと自然を次の世代に残すために35年間頑張っていることに感動した。この祝島の事例の中に、モンゴルにおいても地域の暮らしのあり方を考えるヒントがあるのではないかと思った。

図1. 祝島の地図

出所：http://www.chikyumura.org/bureau/2011/10/05172304.html

モンゴル国は1990年代に中央計画経済システムから市場経済システムに移行した。移行時期に国営企業は民営化され、畜産物の加工工場や食品工場などが倒産して失業者や貧困層が増加し、国内生産物が少なくなり、ますます輸入品に頼るようになった。そんな中、地域経済の再生を目指して、地域に自生する薬草を利用してお茶づくりを行う企業が私の故郷であるフブスグル県に生まれた。

祝島では、島の自然の恵みを使い原発に頼らない暮らしを目指している。フブスグル県では、地下資源に頼らずに、祝島と同じく地域の自然の恵みを利用して国内生産物を作っている。この両者を比較し祝島から学び、考察を深めながら地域の資源を活かした国内生産物の可能性について考えていき

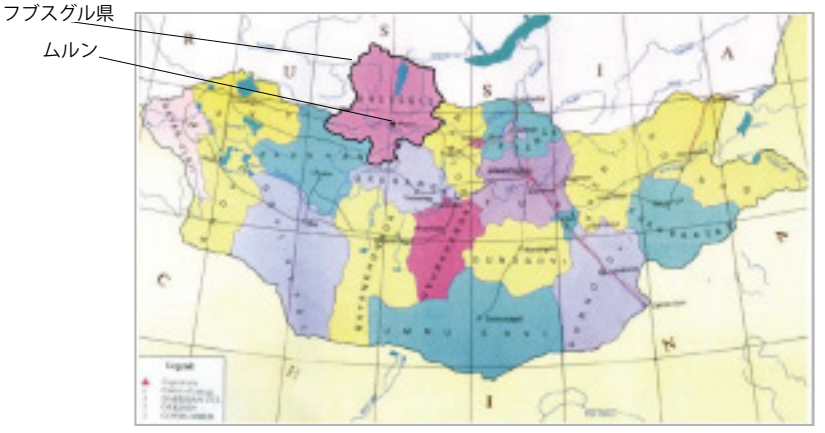
1） 祝島ホームページ http://www.iwaishima.jp/

たい。この研究ノートでは、フブスグル茶、原料となる薬草、摘み取り作業などを簡単に紹介し、今後の研究のスタートとしたい。

1．フブスグル県とは

フブスグル県はモンゴル国の最北部に位置し、首都のウランバートル市から北西約800km に位置する。県中心地はムルン。ロシア（トゥヴァ共和国、ブリヤート共和国）と境を接している。国内では東にボルガン県、西にザブハン県、南にアルハンガイ県に接する。1931年に設置された。モンゴル国内では人口が多い県と呼ばれ、現在約12万人[2)]が暮らしている。フブスグル湖を有し、美しくて豊かな自然に恵まれている地域だ。面積は109.200km^{2}である。気温の年較差が大きい。夏は最も暑い7月には15℃から20℃になり、最高気温は34℃に達する。冬の最も寒い1月には、-24℃から-49℃になる。-49℃から -52℃まで下がることもある。年間降水量は北部で300～400mm、南部では200～300mm であり、大部分は7月と8月に降る。 重要な産業は農業と遊牧である。東のタリアラン、エルデネボルガン、ラシァーント、イヘオール、トソンツェンゲル、トネル郡では昔から農業をしていた。

図2. フブスグル県



出所：https://www.legendtour.ru/eng/mongolia/informations/mongolia_administrative_map.shtml の ADMINISTRATIVE MAP OF MONGOLIA を参考に作成。

2） http://www.1212.mn/BookLibraryDownload.ashx?url=hun_am_oron suutsnii_2015 toollogo.pdf&ln=Mn

図3. フブスグル県の郡

出所：http://dalaieej.mn/index.php/en/lms/courses/course/02a の地図を参考に作成。

2．フブスグル茶とは

故郷のフブスグル県でお茶を作っている企業はセレンゲという有限会社であり、県中心地のムルン郡にある。2001年に設立され、2003年から自然薬草を原料にお茶の製造を始めた。セレンゲ有限会社の説明書によると「国産の茶の製造を発展させ、100パーセント自然薬草で作られたお茶を地域住民だけではなく全国に広げることをめざしている」と書かれている。ここで説明するフブスグル茶とは中国から輸入する緑茶、磚（たん）茶ではなくフブスグル県の大自然が育ててくれた薬草を乾燥させたハーブティーのことである。地元の薬草でお茶づくりを行うことによって地域の雇用機会も増え、従業員の子どもたちも大学に学費を払って教育を受けることができ、さらに国内生産を発展させる良い企業となっている。

ハーブティーとはモンゴル語で「urgamaliin tsai」、英語で「herbal tea」のことで、ハーブを乾燥させて煮だした飲み物である。

3．草を摘み取る準備や許可

フブスグル茶の生産は、摘み取るために毎年6月から10月の中旬まで山間部に入り、薬草を摘み取ることから始まる。しかし、許可なく山間部に入り摘み取りができるわけではない。春4、5月に、地域の郡長や住民による環境保護チームと話し合う。その年摘み取る薬草の量を申請し税金を支払い、特別な許可を出してもらう。許可が出てはじめて山間部に入ることができる。毎年この手続きを必要とする。一人では全然できる仕事ではないので、15人から20人のグループで行う。各グループは薬草が自生する山に着いたら、まず男性がゲルやテントをたてたり（キャンプを作る）、食事を作る薪を集めたりして、ゴミを置く場所やトイレの場所を決める。女性は川から水を運んできて kheeriin tsai[3] を作り、tsainii deej[4] と牛乳を川、山などの神にささげる。これは豊かな自然を与えてくれた神

3）　家ではなく外（草原）で沸かしたお茶のことである。
4）　お茶を沸かして誰かが飲む前の最初の一杯のことである。

様に感謝の気持を表し、自然を壊さないように守りながら薬草を摘み取りますという意味である。摘み取る作業は毎年の作業なので、自然を壊してはいけない。自然を壊せば年々薬草の量が減り、やがては薬草が絶滅することもあり得るのだから。

4．薬草を摘み取る労働者について

セレンゲ社の社員は全員フブスグル県出身者で約20人が働いている。社員以外に地域の遊牧民や遊牧民の子どもたち、夏休み中の生徒や大学生など誰でも自由にできる仕事である。人々が摘み取った薬草の1kgを、約400トゥグルグで買い取る。例えば、男性は一日に約100～120kg、女性は80～100kg、10歳から18歳の子どもは5～80kgを摘み取る。この収入は地域住民に大いに貢献している。摘み取る仕事をしている人々はそれぞれの目的をもっている。例えば、夏休みを利用して学費を稼ぐ大学生、結婚する娘に新しい家具を買ってあげるお父さん、馬を買うために働いている夫婦、子供たちも自分の体を動かしてもらったお金で新しい服や勉強道具を買うのが一番幸せで入学の準備ができる。

社員たちはキャンプに滞在するが、地域の遊牧民などは家畜の世話をするという一番大切な仕事をしながら空いている時間に山間部に入る。その遊牧民たちはキャンプに来る時、牛乳、ヨーグルト、ウルム[5]などをもってきて情報交換したり遊んだりする。県中心地から来た人の話を聞くのは楽しい。単なる摘み取る仕事ではなく地域と地域の住民、そして地域の住民同士を結ぶ機会ともなっているのだ。摘み取り作業をする人々が出発した後、キャンプに残った人々は薬草を広げて太陽光で乾燥させる。完全に乾燥させるまで2日間から3日間かかる。

表1．薬草を摘み取る社員たちの一日（晴れの日）

番号	時間	仕事	
1	朝	5：30－6：00	起きて朝食を食べ、薬草を摘み取る具をもって山間部に入る。
2	昼	11：00－13：00	摘み取った薬草をキャンプまで運んできて、量を量り昼食を食べる。その後休憩してから戻って山間部に入る。
3	夜	17：00－21：00	昼から摘み取った薬草をキャンプまで運んでくる。また量を量り、翌朝持っていく具などを用意する。その後、晩御飯を食べて、遊びながら休む。

雨の日は、薬草を摘み取らないで休むことにする。なぜならば、雨の日に摘み取った薬草は臭くなるのが早いから。雨のおかげで休んでいるからキャンプ周辺の掃除をやったり薪を集めたりする。女性はBoortsog[6]を作る。

5）牛乳で作る乳製品のことである。
6）小麦粉に砂糖、塩、バターを入れ加えて、小さい形にして油で揚げたドーナツのことである。

5．フブスグル茶に使用する薬草

フブスグル茶の原料となる薬草は、フブスグルの森林や川辺などに自生し、住民が伝統的に食用として利用してきたものである。セレンゲ社によれば、ビタミン類が多く含まれ健康増進に役立つとのことである。社では、現在８種類の薬草から５種類の薬草を製造している。そのうち、ここでは４種類の薬草を紹介する。

表2. 使用されている薬草

番号	写真	名	生えている地域	収穫時期
1		モンゴル語名：khuvun oroitm 英語：Charmaenerion 日本語：ヤナギラン	トネル郡	お茶の重要な材料で、夏７月中旬から８月上旬までのあいだに積み取る。
2		モンゴル語名：Nokhoin khoshu 英語：Rosa acicularis Lindl 日本語：オオタカネバラ	ツァガーン・オール郡 イヘ・オール郡	８月に摘み取る。モンゴル人の日常生活の中に重要な食品として使用されている。
3		モンゴル語：Orol 英語：Malus baccata(L) Borkh 日本語：エゾノコリンゴ	イヘ・オール郡	これは果実の一種でフブスグル、セレンゲ県に良く入っている。８月上旬から９月末までの間に摘み取る。
4		モンゴル語：Khalgai 英語：Urtica cannabina L 日本語：イラクサ	イヘ・オール郡 ムルン郡	６月上旬から６月末までの間に摘み取る。モンゴル人は春にKhalgai が咲くとすぐ摘み取ってホーショルの具にして食べる。

6．おわりに ― モンゴルでのお茶を生産する意義と『トワンの教え』

SH. ナツァグドルジが1968年に書いた『トワンの教え』によると、清朝下の1860年代、厳しい封建制社会の中でモンゴル人は貧困な暮らしをしていた。お茶と家畜を交換していた領民に、封建領侯トワンは、「お茶はモンゴル人にとって毎日使うものだから、家畜と交換すれば、今後数年間で家畜が減ってしまう」とを考えた。「中国から買わないで地域の薬草で作るのが一番良い方法だ」と考え、「お茶を飲みたいなら地元の薬草で作るお茶を飲むように」と注意し教えた。

筆者はトワンの教えた通り、地域にお茶となる薬草が豊かにあるにもかかわらず輸入茶を買って飲む必要はないと思う。フブスグル茶の生産は、いわばトワンの教えの実践であり、その成果も少しずつではあるが出ている。セレンゲ有限会社が生産しているフブスグル茶は県内だけではなく、モンゴル国内市場でもよく飲まれ始めている。モンゴル国内生産を発展させるためにも良い影響を与えるはずだ。

モンゴル国では朝から晩まで一日中にお茶を飲むことが習慣になっている。主婦は朝、早く起きて火をおこしお茶をわかして家族全員が一日に飲めるお茶の準備をしておく。そして飲む前、天にささげるのも大切な習慣である。その日常を考えてみると、モンゴル人にとってお茶というものは、なくてはならないものであり、これからも続けていく習慣だと思う。だからこそ、輸入茶に頼らずにモンゴル国内産のお茶を利用する方がいいと思う。外国のお茶を飲むことを否定するわけではないが、大自然の薬草を摘んでお茶にして飲むといった選択肢があるとことを示し、今後の研究では、祝島のような事例も調べて、そこから学びたい。

参考文献

Ш.Нацагдорж (1968) “То Вангийн сургааль” УБ, хуудас 45.
М.Нямаа(2001) “Хөвсгөл аймгийн лавлах толь” УБ,хуудас9,43,175,190,194.
С.Бадамхатан, Ч.Банзрагч “Хөвсгөл аймгийн товч түүх” мөрөн.
Ш.Чоймаа, Ч.Онгоодой (1991) “Монгол идээн товчоо” УБ.
セレンゲ有限会社説明書。

〈インターネットから〉
www.biwa-cha.com (閲覧日2015年5月)。
www.iwaishima.jp（閲覧日2017年12月10日）。
http://www.khuvsgul.nso.mn/page/766（閲覧日2018年1月10日）。
http://www.neargov.org/jp/page.jsp?mnu_uid=3751（閲覧日2018年1月10日）。

（D. つぇれんなどみど）

《追　悼》

内藤君のこと

松 岡　正 喜

大学入試を機に内藤君と知り合いになった。1969年のことだった。

この年のモンゴル語の入学生は16人。新入生歓迎の行事も終わり、それぞれに言葉を交わすようになって分かって来たのが、多くが浪人を経験していたということだった。内藤君も私も浪人を経験していた。現役は3～4人しかいず、浪人をして片身の狭い不安というか、後ろめたい気持ちがいくぶん解消されたように記憶している。このころ外語は浪人生の比率が、西洋語より東洋語のほうが高かったように思う。

1969年は東大の入試がなかった年だった。浪人をして入学した学生の多くが京大を落ちて入って来ていた。中には岡山大学や滋賀大学を辞めて来た学生もいた。入学して初めの頃は授業があったように覚えているが、5月の連休を過ぎて6月に入ると軒並み休校が続いた。大学はいわゆる「学園紛争」の真っただ中にあった。そして封鎖に入った。

連日のようにアゴラ集会なるものが開かれていた。主導者の主な学科は中国語・ロシア語の学生のようだった。いつ頃かはっきり覚えていないが、内藤君の姿を見たことがある。後にベ平連の集会でも何回か顔をみたことがあった。内藤君はこの手の集会に関心があるんだな、と思った。私は浪人していた頃から「赤旗」を勧められ、読み始めていた。と同時に、予備校に比較的近かった立命館の広小路学舎に足を向けていた。反民青のノンセクトラディカルの集会だった。同志社も近かったが、なぜか行かなかった。要はそれぞれのセクトの区別がこの頃の私にはできていなかった。大学に入学してからもじゅうぶん分かっているとは言えなかった。

秋になると封鎖が解かれ、大学はいくらか正常さをとり戻してきた。このころから16人が揃ってモンゴル語の授業で顔を合わせるようになった。「帝国主義大学解体」を叫んでいた学生が急に静かになった。なんと4回生の中には学生服に身を包んで就職活動をし始める者がいた。

「あれっ、『帝国主義大学解体』って叫んでたじゃないか。それなのに、なんで今さらそのような恰好で就職活動を始めたり、勉強するようになったんだ？おかしいじゃないか」と先輩の後ににについて責め寄ったことが何度かあった。彼らに対する不信と大学を変えていくためにはどういう力が必要なのか、考え込むようになった。この頃だったと思うが、内藤君と話をするようになった。

あるとき英語のテストがあった。

「なんや、あんさんと点が一緒や。京都を英語で案内しとったんやろ」

「ちょっとだけな」

これには参ってしまった。一本とられてしまった。それにしても直截に物を言う人だな、と思った。浪人時代アメリカの旅行者を、英会話を学んでいた仲間で案内したことがあった。それをさも自慢げにどこかでしゃべっていたのかもしれない。このときこれ以外のことも話したはずだが、この何気な

い内藤君とのやり取りがいまでも記憶に残っている。英語の講読の授業だったと思う。二人とも85点がついていた。

授業のことで言えば、東洋史の授業が忘れられない。1回生か2回生の教養の頃だったと思うのだが、内藤君も東洋史の授業をとっていた。あるとき、授業担当の外山軍治先生いわく「この教室に畏れ多いことに私の恩師に当たる内藤湖南先生のお孫さんがいらっしゃる。大恩ある内藤先生のお孫さんの前で講義するなど、誠に恥ずかしい限りである。内藤先生は日本における東洋史学の一大権威で、東に白鳥山脈あり西に内藤山脈ありと言われた方であり、云々･･･」と。このことは今でも記憶に鮮明だ。外山先生のやや時代がかった、しかし滔々として歌舞伎役者まがいの講説に驚き恐れ入った。先生は金朝史研究の権威と言われていた。通常の授業は高低差の低いトーンで淡々と進んでいたから、この時ばかりは先生の破格の感情移入した話に聞き入った。

外山先生の大仰な言い回しと違って、内藤君の受け止め方はクールであった。先生の話に絡めてお祖父さんの自慢話でも出て来るかもしれないと思ったが、そうではなかった。彼は淡々としていた。これは後で気づいたことだが、内藤君の物事を距離を置いて観察し、突き放して観る見方はこの頃からあったように思う。感性的な人間である私とは違っていた。

浪人時代、私はソビエト科学アカデミー発行の「世界史教程」を読んでいた。加えて、予備校の歴史の先生から影響を受けていた。「歴史は覚えるものではない。考えるものだ」ということを教えられた。それもあり大学では歴史学をやりたいと思っていた。語学ではなかった。外山先生の金朝史に格別興味があって授業に出ていたわけではない。清朝の事実上の支配下にあったモンゴルをやる以上、中国史の一つも知らないでは済まされないと考えていた。清朝の末期は日本が大陸侵略を始める前段階の時期とも重なっていた。中国への侵略を想定して日本は朝鮮半島の植民地化へ乗り出していた。朝鮮近代史もやってみようと思い井口和起先生（後の京都府大の学長）の「朝鮮近代史」の授業も受講した。歴史の教養書・専門書を読み始めた頃である。この頃から内藤君と歴史についていつとなく話をするようになったと思う。私が何をこの頃しゃべったかは覚えていない。また調子に乗ってベラベラ空虚なことを言っていたのだろう。

ほどなくしてＥ・Ｈ・カーの「歴史とは何か」（岩波新書）を二人で読むことになった。前から知っていた本だったが、読み切っていなかった。どことなくパンチ力がなく、平板な叙述に少々食傷気味だった。しかし、二人で読むとなると相手のあることだから着地点がいる。結果この本になった。内藤君の提案でもあった。上六の交差点を渡り、北へ少し歩いた左手に喫茶店があった。外語の学生が時たま利用していたが、２階は客でいっぱいになることはなかった。輪読会をやるには格好の場所に思えた。声に出して１ページずつ読んでいった。お互い疑問に思った箇所を出して感想を述べ合った。私は内藤君に教えてもらうことが多かった。あるとき私が読めない字が出てきた。「陥穽」が読めなかった。まずいと思ったが、もうどうしようもない。「読み方が分からない」と言ったら、内藤君は黙ってさりげなく教えてくれた。またあるときは、江戸時代に活躍して幕府から弾圧された蘭学者や思想家の話もしてくれた。高野長英や安藤昌益の名前を知ったのも内藤君からだった。内藤君は私の一歩前を進んでいた。

1970年の７月、有志６名と大学の先生（山口先生）の援助で「モンゴル研究会」を立ち上げた。夏休みに小豆島の後輩のお家に泊めてもらい、「アジア・アフリカ問題入門」（岩波新書、岡倉古志郎著。先

生は外語の教授、岡倉天心の孫）とモンゴル語の学習を行った。内藤君は当初は研究会に入っていなかったが、のちに加わった。私たちの学年では内藤君と私の二人だけであった。この研究会での本読み・学習が私たちの学生生活の中心であった。のちにドイツの留学から帰ってこられた小貫先生を交えてモンゴル研究の方法論やモンゴルの歴史的発展段階をどうとらえるかなど、研究会仲間と議論しあった。さきに紹介した朝鮮語科の井口先生らと資本論の輪読会を始めたのも、この頃と前後していた。この読書会は中途で挫折したが「商品論」の箇所で先生と議論したことを覚えている。私は1回生の秋には先輩の勧めで民青に加入していた。大学のカリキュラム改革をして学生の学びたい授業をどう作り出していくか、学習しながら大学当局と交渉する取り組みを始めていた。

3回生の夏休みが終わって輪読会をやっていた喫茶店で久しぶりに内藤君に会ったとき、彼は「モンゴル人民共和国史」を1ヶ月かけて読んだと言っていた。もちろん原文である。モンゴルの歴史家による正統的通史であった。かなり大部の本で、彼の努力家としての営みを垣間見た思いがした。また私は遅れを取ってしまった。

その頃、私は自治会の三役をやっていた。忙しい役回りのため授業から足が遠のいていた。それが何か月も続くと自ずから授業から遠ざかり、遅れをとっていることを知りつつ、そのままの状態にしてしまっていた。4回生の頃は、とりわけその後半は選挙活動に没頭した。当然、モンゴル語学科の同級生からは相手にされなくなっていた。3名の女子学生のうち2人が校内で顔を合わせると声をかけてくれる程度であった。内藤君ともだんだん距離が遠くなっていった。私は柔道部にも所属していた。真面目な部員ではなかったが、時間があれば練習に参加していた。時おり内藤君と顔を合わせると「あんさん、まだ野蛮なことやっとるん」と声をかけてきた。内藤君独特の皮肉交じりの言葉だった。後になって分かったのだが、勉強を続ける意思があるんだったら柔道も学生運動もどこかで切り上げないといけない、という忠告であったような気がした。事実、京大の大学院や大阪市立大学の大学院に進んだ先輩・後輩は程よいところで切り上げ、勉学にスイッチを切り替えていた。

不勉強と努力不足が重なって私は同期生より2年遅れで卒業した。大学院へ行って研究の道に進もうと考えていた。会社に入って宮仕えする気にはなれなかった。内藤君は時事通信の記者の道に進んだ。お祖父さんの道を選択したんだと思った。私はアルバイトをしながら4畳半の安アパートで「奮闘」の日々が始まった。その頃だったと思う。だれにも住所は知らせていないと思っていたが、内藤君が訪ねてきてくれることになった。誰から住所を聞いたのか、それとも私が何かの機会に知らせていたのか、とにかく訪ねてきてくれた。私の安アパートは木造・モルタル造りの築数十年の建物だった。2階の廊下はやや傾きかけていた。本がけっこうあったので座が抜け落ちないかなと思ったほどの年季の入った代物だった。内藤君が訪ねてきてくれたのがちょうどお昼頃だった。せっかく訪ねてきてくれるのだからとお昼の準備をしていた。お皿を買ってきて肉を焼いて提供した。学生時代、内藤君と何度か一緒にご飯を食べたことがある。彼に好き嫌いを聞いたことはなかったが、概ねトンカツや肉料理が好きだったと思っていた。それで肉を焼いて出したというわけである。ご飯は「冷や飯しかないけど」というと、「いや、かまへんで」と言ってくれた。これはよく覚えている。あの頃は「チン」がなかったのだ。果たして内藤君は美味しそうに食べてくれた。日頃はもっといいものを食べているだろうに、気にすることなく平らげてくれた。そのとき何を話したか覚えにないが、訪ねてきてくれたこと、私の作った食事を美味しそうに食べてくれたことだけで嬉しかったように思う。そのとき買っ

た皿は２枚。今でも残っている。その皿を使うたびに当時が甦ってくる。

大阪府警詰めで、２～３年はそこで「まあ、修行ですな」と言っていたように記憶している。私の勉強の進み具合を気にかけて来てくれたのかもしれない。

そうこうしているうちにその年の年末になった。１単位残して大学に残っていた。来年は卒業だというとき、私のアパートが火事に見舞われた。冬の12月22日の真夜中だった。家庭教師のアルバイトから11時を回ったころ帰ってきて、遅いので寝ていた。するとハス向かいに住んでいた近大の農学部に通っていた岡山出身の真野君という学生が「松岡さん、火事ですよ。起きてください」と大声でたたき起こしてくれた。彼の部屋の真下が火元だった。一緒になってアパートの住民に声をかけて回った。そのうち煙に巻き込まれそうになり、着の身着のままアパートから飛び出した。アパートはすぐに燃え上がった。30人ばかりいた住民は全員無事だった。12月の真夜中は寒かった。布団から起きたままの恰好だった。唯一頭が働いたのが、田舎へ電話を掛ける10円玉を取りに部屋に入ったことだ。あとは何もできなかった。消防車を遠巻きにしながら、燃え落ちるアパートをただ茫然と見ているだけだった。

その夜は結婚の約束をしていた未来の妻の家に寄せてもらい、お世話になった。私の焼け落ちた安アパートからそう遠くないところに彼女の家があった。幸いだった。その彼女の家で２～３日お世話になっているとき、内藤君が家を探して訪ねてきてくれた。内藤君がどうやって私がいるところを探しあててくれたのか、たぶん聞いたと思うが記憶にない。「松岡が火事で焼け出された」との一報を小貫先生をはじめ、モンゴル研究会のメンバーやら知り合いに連絡してくれたのは、内藤君だった。「警察詰めの記者にはこの手の一報が真っ先に入るんや」と言ってくれたが、無視しても構わないことだった。

内藤君は余計なことを言わない人だった。言うときは核心をつき直截的だった。そしてリアリストであり行動の人だった。「時事通信はニュースの問屋みたいなもんや。けどな、『赤旗』も【時事通信発】という提供元をつけて記事を書くようじゃあかんで」とよく言っていた。「赤旗」にも事情があったと思うが、私は反論しなかった。批判とも激励とも取れたからだ。

生きていてくれたらいいのになぁ。お互い時間が取れたらもっと教えてもらえたかもしれないのに。若いころ喫茶店の隅で本を読んだ時のように、今度は人生を経てきた者同士で語り合い、話しあうことができたかもしれない。いや、きっと私のほうが教えてもらうことのほうが多かったに違いない。本を読むこともできたかもしれない。どれだけそういう機会が持てたか分からないが、二度ともう内藤君に会えないと思うと、若いときに交わした言葉・共有した経験が、内藤君の立居振る舞いとともにより一層鮮やかに甦ってくるのを覚える。

内藤君は決して死んではいない。この世にいるものが死んだ人のことを忘れない限り、その人は人の心の中で生き続けていると私は思う。

「あんさん、そりゃあかんで」、「野蛮なことはやめときなはれ」、「やるときは真面目に、集中してやらんとな」、「時事通信から記事を提供してもろうてるようではあかんで」等々、内藤語録は私だけではなく、彼と行き来のあった人の心に、それぞれの思い出と共に生き続けるだろう。

2018年3月31日

（まつおか　まさき）

《追　悼》

内藤恭介さんへ

芝　山　　豊

『モンゴル研究』誌に追悼文を書くのは辛い仕事です。

これまでに、司馬（遼太郎）さん、磯野（富士子）先生の追悼文を書きました。司馬さんや磯野先生からいただいた言葉がなければ、モンゴル研究者としての私は存在しなかったという思いで、拙いながら、一所懸命書かせていただきました。

そして、今回は、研究会草創期の先輩、内藤恭介さんのために追悼の筆をとっています。司馬さんや磯野先生と同じく、内藤さんがいなければ、いまの自分はないという思いがあるからです。

内藤さんは私より５歳年上です。私が大学の１年に入った頃、内藤さんは専攻科におられたと思います。

「かの内藤湖南の孫で御公家さんみたいな人」と小貫雅男先生から聞かされていたその人は、白いワイシャツに、黒のズボン、下駄を履いて、色白でちょっと小太りの体に扇子で忙しく風を送りながら現れました。

「博引旁証やけど、自分自身の考えはどこにあるの？」

「それで、あんさん、ほんまは、なにがやりたいの？」

研究会での内藤さんのコメントは、柔らかなアクセントながら辛口、しかも、常に正鵠を射たものでした。内藤さんの前で発表するときは、いつも、とても緊張しました。ときにはシニカルで辛辣なコメントにも、常に内藤さんの優しさが隠れていて、言われたことに勇気づけられることはあっても、傷ついたことは一度もありませんでした。

内藤さんが翻訳して『モンゴル研究』に発表された僧院による牧民搾取についてのイシ・ナツァグドルジの論文の注の整理をお手伝いした時には、資料のとり扱いの正確さについて、教えていただきました。時事通信に入社され、新人記者のお決まりのコース、社会部のサツ回りをしておられた頃、スーツに身を包み、美味しいケーキの入った箱をぶらさげて、研究会の例会にぶらりと現れては、現代社会の断面や記者クラブ制度、メディアの仕組みなど、学生の知らない世界について、あれこれ教えて下さいました。

私は就職後間もなく、体を壊して入院するはめになったのですが、ある日、病室で、所在なく本を読んでいると、突然、内藤さんが現れました。忙しい先輩にお見舞いをいただくなど全く予期せぬことで、とても驚いて、いま思うと、まともな対応もできなかったのではないかと思います。ただ、鮮明に覚えているのは、まさに、寸鉄人を刺す次の一言です。

「新書版ばっかり読んでいると、新書版みたいな人間になるよ。」

その時、何を読んでいたのか、覚えていません。しかし、いまも、資料集めや原稿を書いている最中に、ふと、内藤さんの言葉を思いおこして、自問します。

「原典と格闘しながら、自分の思想を組あげていく本当の学問をしているのか？おまえはお手軽な《新書版みたいな人間》になっているんじゃないのか？」と。

外信部に移られた内藤さんは、ロシアや中東など海外で活躍されました。そのころお書きになった記事の幾つかはいまでもＷＥＢ上で読むことができます。

物理的な距離もあって、疎遠になってしまっていたのですが、村井宗行さんから内藤さんが50代にして、あっさりと通信社を退職し、悠々自適、晴耕雨読の生活に入られたとの消息をうかがい、連絡をとって、東京でお会いすることにしました。

2005年に、小貫先生の古希と『モンゴル研究』創刊30周年を記念して研究会から本を出そうという、結局は幻に終わった計画の相談が口実でした。

新宿の紀伊国屋で待ち合わせ、食事をして、本題もそこそこに、四方山の話しをしました。読書三昧の生活であろうと想像しつつ、毎日、何をしているのかを尋ねると、高尾山麓を日がな自転車で走っているという意外な返事でした。

外大時代の思い出話の他に、大学での仕事の愚痴もこぼしました。

その時、学者の家に生まれ、周囲に多くの研究者を見てきた内藤さんは、次のような金言を教示されました。

「学者にとって最も大事なのは Last man standing になることやね。」

「どういうことですか」と尋ねると、内藤さんは茶目っ気のある口調で解説してくれました。「いかに優れた研究成果や天才的な着想を残しても、学者が夭逝すれば、後にのこっている才能の乏しい連中がその研究成果や着想を使って死ぬまで商売をすることになる。学者、研究者は最後に残ったものが勝ち。だから、どんなことがあっても、自分より利口な連中や馬鹿な連中より長生きしなきゃだめ」というのです。

運動嫌いだと勝手に思いこんでいた内藤さんが、毎日、自転車で体を鍛えているのは、これから大きな仕事をまとめようとしているからに違いないと一人合点しました。

再会を約しながら、ご無沙汰を続けるうちに、2013年10月、内藤さんの訃報を伝える電子メールが飛び込みました。ご本人の意思で入院は伏せられていたので、お見舞いにうかがうこともできませんでした。入院から僅か1ヶ月後の帰天とのことでした。

余りに突然で、信じられず、「内藤さん、Last man standing やって言うてはったやないですか！」とこころの中で叫びました。

モンゴルでは日本資本によるウラン開発が始まり、日本では1930年代さながら、特定秘密保護法施行や憲法の捻じ曲げの危機が迫るいまこそ、内藤さんの知識と経験と分析力が必要なのに・・・。

ヒトリカガミニウチヨリミレバ、皺ノヨッタヲアハレムバカリ（誰知明鏡裏　形影自相憐）という齢になり、周囲で、叱ってくれる人がめっきり少なくなりました。内藤さんが叱ってくれないと、寂しくてたまらない。

そんな思いを言葉にしたら、内藤さんの声が聞こえるような気がしました。

「なにを甘えてんの。後に残ったからには、自分たち自身で問題と格闘して、あんさんらのいつも言うてるほんまのモンゴル研究をやらなあかんでっしゃろ。」

はい。『モンゴル研究』誌は創刊40年、モンゴル研究会はこれからも、こころの中で内藤さんと対話しながら、渡されたバトンをつないでいく覚悟を新たにしています。

ありがとうございました、内藤恭介さん。あなたを先輩にもてて、とても幸せでした。

2014年5月10日
（しばやま　ゆたか）

《追　悼》

谷 博之君を偲んで

千 歳　正 信

谷君。

谷君との別れがこんなにはやく訪れるとは夢にも思っていませんでした。

わたくしは、谷君とは大阪外大モンゴル語科で同級生でした。

大学卒業後はお互いそれぞれの道を進み、お互いあと少し、老後となってから時間が十分あるときにいろいろ思い出話でもしようと思っていたのが、非常に悔やまれてなりません。

今日は仕方なく一方的に私の谷君への思い出を語らせていただきますが、どうぞそのことをお許しください。

谷君、あなたはいつも飄々とされていました。

少なくとも私にはそう見えました

しかし、心の内では、人知れない葛藤があったのかもしれません。

谷君、あなたは、老子・荘子が好きでしたね。

無理して偉くなろうとしない、成功しようとしたりしない。

自分が納得するように頑張って、後は大宇宙の法則に委ねればそれで良しとされたのでしょうか？

人類が世界共通語を持つという、エスペラントの思想に共感して、エスペラント語の普及活動もされ、参考書も何冊か書かれました。

老荘思想とエスペラントは，深いところで繋がっていて、どこか共通性があると思います。

谷君、あなたは言語ヲタクで、世界のあらゆる言語に精通する、言語の天才でした。

ブルガリア語の翻訳も手がけていたとも聞いています。

モンゴルのキリル文字，旧文字，パスパ文字がすべて読める人は、今となっては少ないと思います。

人種・民族・国籍を越えて、あらゆる人類と仲良くなろうとしていました。

時には犬や猫も含めて、

いわゆる、コスモポリタン、自由人でした。

さまざまな現実を、逆境も含めすべて受け入れる柔軟性を持ちつつも、自分の思想的立場は決して変えない、良い意味での頑固者でした。

その頑固さが我々凡人には到底理解できなかったのかも知れませんが、今となってはそれを知る術もありません。

それが非常に残念です。

最後に、谷君にはお姉様が３人もおられると聞いております。

弟に先立たれる御心痛はどんなにお察ししようとしても察しきれないものだと思いますが、なんとかこの悲しみを乗り越えて、お身体にも気をつけていただきたいと思います。

谷君、どうぞ安らかに眠ってください　また、いつか、天国であなたとお会いできるかもしれません。

この弔辞は、同じく同級生の小松君とともに考え、わたくし、千歳が同級生を代表して読ませていただきました。

ご冥福を心からお祈り申し上げます。

平成26年8月28日　千歳正信

（せんざい　まさのぶ）

［追記］これは弔辞として読まれたものです。

《追　悼》

中西 和隆君を偲んで

千 歳　正 信

作家、ツェンディーン・ダムディンスレンについての彼の考察に関しては、研究会誌の『モンゴル研究』に譲るとして、ここでは、大学時代の同級生、中西和隆君との思い出を書いてみたいと思います。

私たちが1974年（昭和49年）にモンゴル語科に入学したとき、上本町六丁目の大阪外大のキャンパスでは、「全共闘世代」が終わり学内にヘルメット姿の学生を見かけることも少なくなっていました。徐々に政治的な関心も以前と比べて失われてゆき、「ノンポリ世代」と呼ばれ始めていたのが我々の学年です。

カール・マルクスの『資本論』の難解な読書会のなかでも、中西君は今から思えば、サブカルチャーの走りか、マルクス兄弟の素晴らしさを私に説いていました。私はたちまち、それに感化されてしまい、書を捨て街に飛び出し、一乗寺の京一会館で深夜映画を漁るように観たものです。現在の私のDVDのコレクションの中にも、マルクス・ブラザーズものはたくさん残っている次第です。

モンゴル文学の話ではなくて申し訳ないですが、当然、彼の文学的蘊蓄にも相当影響を受けたもので、その中でも一例を取り上げるとしたら、小林信彦でしょうか。彼の代表作、オヨヨ大統領シリーズはよく薦められました。大袈裟な言い方ですが、小林信彦をオタク的な文学者と位置付けるなら、そのオタク的な伝道師が中西君であり、現在の私のオタク的な面はまさにその影響を受けたものです。

また、中西君は推理小説にも造詣が深く、正統な推理ものから外れたところかもしれませんが、フィリップ・マーロウに傾倒していました。ハードボイルドを目指し、ハンフリー・ボガード風にトレンチコートを着こなそうとしていたのですが、どうしても当時流行っていた刑事コロンボのヨレヨレのレインコートにしか見ませんでした。

大学時代の私生活のことも少々触れておきましょう。当時、モンゴル語科生の一部には、ふざけてサロンと称していた伏見の京阪丹波橋駅近くの私の実家にもよく来てもらいました（小貫先生にも来ていただいてお酒を飲み交わしたこともありました）が、また逆に中西君のご実家にも呼ばれてよく寄せていただきました。上本町六丁目辺りで飲んだ後、私にとっては上八のキャンパスからの帰宅とは逆方向になる、ほぼ明石に近い国鉄朝霧駅を深夜目指したものです。今は海峡大橋が架かっていますが、海を見渡す、その後も大好きになった鐵道路線です。

お父様は外洋に出かける船員をされていたそうで、めったにお会いすることはなかったのですが、小柄なお母様には良くしていただき朝御飯も何度かご馳走になりました。中西君はかなり大柄で、外大の柔道部からも誘いを受けるほどでしたが、その体格からは想像も出来ないほど繊細なところがある人柄でした。きっとお母様の教育の成果だと思っておりました。

彼の数少ない欠点のひとつは、お酒に弱いと言うところでしょうか。お互いの実家で夜を明かして飲む時はそうでもないのですが、キャンパスや当時開催されてた語科合宿（今でもあるかもしれませんが）の酒盛りでは、彼の醜態を何度か目にしています。衝撃的でアナーキーな行動があったことは

確かですが、ここではその詳細は彼の名誉の為に伏せておきましょう。

コメディっぽいエピソードなら紹介出来ます。冬に、サロンの実家で酒を酌み交わしてお互いの死生観を論じていた時、彼は冗談だとは思うのですが、何故か戸を締め切って練炭心中を試みようと言い出したのです。当時、日本間の暖房には練炭火鉢を用いることがよくあって、戸を締め切れば酸欠状態になり、「阿鼻叫喚の巷と化す」（彼の好きな表現です）とでも考えたのでしょうか。しかし、日本間には当然欄間があり、酸欠になるはずもなく、彼の目論見はあっけなく外れたのですが、いたずら好きな眼差しでしようもない提案をよく持ち出していたものです。

最後に、彼の繊細さに纏わる話をして、この原稿を締めたいと思います。大学を卒業し、年賀状だけを交わすぐらいの付き合いの頻度になって行き、いずれその年賀状も、私の引っ越し、そして、渡米、結婚、何度かの引っ越しで次第に途切れて行くのですが、年賀状の一通に、富山の雨晴海岸からのものがありました。雨晴海岸はその絶景で有名で、その海岸の素晴らしい風景を目にすることも多いと思うのですが、年賀状の彼の写真は雨晴駅の駅名標だけでした。それを見て彼らしいなあと思った次第です。彼は大柄な体格ではありましたが、決して自分を実物以上のものに見せかけようとせず、いつも等身大の姿を私に見せてくれていたのだと思います。私はその点反省をしなくては。中西君、今までいろいろありがとう。ご冥福をお祈りしたいと思います。

（せんざい　まさのぶ）

〓創刊 30 号記念特集〓

明日に向かって

「明日に向って」原稿募集の会員宛てメール

1975年に第1号を発行してから40余年、研究会の発足からも45年余りが経過したこと、発行が30号を数えることなどを記念した企画です。

私たち会員も、年齢は世代が違う（？）と言えるほど多様となり、生き方も多様、社会とのかかわり方も年数もまた多様です。各自のこれまでの経験を踏まえて、今の社会をどう考え、現在から未来へとどのように社会とかかわり生きていくのかをともに考えてみたいと思います。そこで、「明日に向って」というテーマで雑感を募集し、合評会でも議論したいと考えています。気恥ずかしいなどと思わず、この機会にいろんな意味でそれぞれの原点を確認し、ともに「明日に向って」考えてみませんか。

文芸的な未来と私

織田　幸彦

「モンゴル研究」30号おめでとうございます。

第４号に寄稿してから早いもので、４０年近くになります。あの頃にくらべて、日本は文芸的になったと思います。世界中と気軽にＩＴ媒体で送受信される時代となり、若い人達の文化への関心と理解は深まり、個々の芸術性は高まっています。また、大旅行時代が到来し、こちらからも出かけて行くし、近隣アジア諸国からも手頃な運賃で行楽に訪れます。この国の伝統的な模倣主義と生真面目な修養が産み出した変格の文化を、心から楽しんでいるようです。

未来の日本はその国力・資力の衰退とは無関係に、芸術の洗練と退廃を繰り返し、交流し、世界中を楽しませるでしょう。

私はといえば、旅行代理店に就職し、ツアーコンダクター等しながら日々を送りました。その経験はありふれたツーリズムの範疇ですが、それでも、小さなのぞきからくりができました。

教会前で同行の観光ガイドがスリの手先の幼児を容赦なく足蹴にします。彼は倒れ、私は立ち尽くします。観光船ではコインを川に投げると子供たちが潜って拾います。
厳冬の空港では時限爆弾の脅威があり、装甲車の機銃が乗客に向けられています。荷物検査機の傍らには熊のような兵士が自動小銃を構えています。置き引き犯は捕縛され、私の目の前で警官に殴打されます。
牧民の湖は花盛りで白馬が草を食み、パゴーダでは雨期明け祭の燈明が揺らめきます。
　移民が眠る真夏のメトロ駅、灯火管制、喧噪、匂い、停電、「サイコ」のオープンセット、古城ホテルの怨霊、城壁、検疫、ペスト、幽閉、運河、孤独、鐘楼、森、雷光、沐浴、螢、風、、、、

世界は全て物語です。これからは部屋にこもり、記憶の断片を拾い集め、少しずつ思い出し、反省し、一人称で語りましょう。
「ひとつ、お聞きなされて、下さりませ・・」

（おだ　さちひこ）

二つのモンゴル

三上　喜美男

モンゴルについて思いを巡らせれば、いつも同じ記憶、同じ場面にたどり着く。

左右に見開いた地図帳を食い入るように見つめる自分の姿が脳裏に浮かぶ。

地図帳といっても現代地理ではなく、世界史の興亡を示した歴史地図帳だ。幼いころから世界地図を眺めるのが好きだった僕にも、そのページの持つ迫力は格別だった。

ユーラシア大陸の大半が、東から西までぶち抜いたように、同じ系統の色に塗りつぶされている。中国は完全にのみ込まれ、モスクワやバグダッドも占領されている。その先も後の時代も、地続きでこれほど版図を拡大した勢力は存在しない。まさに空前絶後のスケール。「モンゴル帝国」である。

一番熱を込めて地図を見つめたのは高校生のころだろう。モンゴルの兵士が馬にまたがってはるか西の果てまで遠征する。京都の田舎の高校生には、大陸の広さは想像もつかない。モンゴル高原を出発した伝令がハンガリー平原に駐留する遠征軍の本拠まで「ハーン死去」の知らせを伝えるのにひと月ほどかかったと知り、ため息をついた。

胸躍らせたのは、モンゴルの騎馬軍団が破竹の勢いで欧州勢を撃破したことだ。アジアがこれほどヨーロッパを攻め立てた例はほかにない。なにせ、ポーランドとドイツの連合軍をリグニッツァ（ワールシュタット）の戦いで撃破したのだから。大河ドラマのような合戦絵巻が頭の中で回る。

もし途中でモンゴル帝国のハーンが死ななかったら、チンギスハンの孫バトが率いた欧州遠征軍は帰郷せず、さらに西のイタリア、フランスへと侵攻しただろう。そうなれば世界の歴史は随分変わったに違いない。想像を巡らせては、胸を躍らせた。

その「モンゴル熱」をあおったのは井上靖の「蒼き狼」であり、司馬遼太郎の「街頭をゆく」５巻の「モンゴル紀行」だった。かたやチンギスハンの物語であり、かたや同時代に誕生した草原の社会主義国の牧歌的な点描である。玉手箱を開いたようにその世界にたちまち感化され、高校３年の秋に英語・英文学志望を急きょ変更した。モンゴル語科を目指したのは、ある同級生が語ったように「青春の血迷い」といえるかもしれない。

大学で初めてモンゴル語を学び、歴史物語ではない本物のモンゴル人と出会うことになる。それはそれで新鮮で興味深く、学ぶことは多かった。だが、実を言うとそれらは「モンゴル帝国」に傾倒した若き血迷いの十分な受け皿とはならなかった。かくして、ロマンと現実の「二つのモンゴル」が、僕の心の中に併存し続けることになる。

「二つのモンゴル」が一つに重なったのは、神戸で知り合った留学生のバト君が欧州遠征軍を率いた将軍と同じ名前で、かつての民族の栄光（特に遠征軍の強さ）を大いに誇りにしていることを知った時ぐらいだろう。だから３年前、アウシュビッツ強制収容所跡の見学のためにポーランドでモンゴル欧州遠征の歴史の跡に触れた時は、子どもの頃になくした宝物を見つけたように胸が高鳴った。

世界遺産の古都クラクフはモンゴル軍に攻められ、灰燼に帰した歴史がある。その受難の記憶は、

教会の塔で消防士が1時間ごとにラッパを吹き鳴らす通年の儀式として今日まで継承されている。モンゴル襲来を知らせる物見の兵士がモンゴル兵の放った矢に射抜かれ、警報のラッパを吹く途中で死んだという逸話を伝えている。現地の若い女性ガイドがそうした由来を丁寧に説明してくれた。

それだけではない。初夏の宗教祭には、馬にまたがったひげ面の「ライコニク」というキャラクターが登場して街を練り歩くそうだ。欧州人が「タルタロス（地獄の民）」と呼んで恐れたモンゴル兵がモデルという。ただし、ライコニクは今では「幸福を運ぶ使者」として子どもたちに親しまれている。恐ろしい外敵がいつしか人気者に変身した。長い時の流れが災厄や恐怖を祥啓の兆しに転化し、地域の祭礼へと昇華する。歴史がそうやって人間に「和解」を促しているのだとすれば、いきな計らいに思える。

過去はさまざまに形を変えながら、人々が継承する記憶の中で生き続けるのだろう。そうした歴史の伏流水に触れる。それは旅人として僥倖というほかない。

大学を出てからは「二つのモンゴル」のどちらともあまり縁のない生活をしてきた。しかし時折、モンゴルとの関わりは思わぬ贈り物をくれる。留学生バト君との語らいやクラクフでの体験がひときわ印象に残るのも、若き日の「血迷い」があればこそ、だろう。

次はどんな語らいや体験が待っているだろう。日ごろはほとんど意識しないが、モンゴルとの出会いは、還暦を前にした今もそれなりに進行形である。

（みかみ　きみお　1981年卒）

時空を越えて繋ぐもの

榊　正明

1970年の夏の小豆島での6人の「合宿」を起点とすれば、モンゴル研究会は2020年に、創立50周年を迎える。逆説的に聞こえるかもしれないが、一切の会則を持たず、また持とうともしなかったことが、自由で柔軟な運営を可能にし、半世紀に亘る継続を保証してきた大きな理由の一つかもしれない。併せて、創立の当初から今日に至るまで、研究対象であるモンゴルだけでなく、自国、即ち日本の現状への関心と関与を意識しながら活動を続けてきたことも、この研究会の大きな特色と言えるだろう。それにしても、よく継続してきたものだ。思い起こせば様々なことが頭を過るが、この2つの特性を継承しつつ、この稀有な研究会が今後とも更に創造的に発展することを願っている。

継承といえば、私が副理事長を務める日本ユーラシア協会が、昨年の秋に創立60周年記念行事の一つとして開催した「ロシア革命100周年記念講演会」で、講師の和田春樹氏が、ロシア革命が世界に残したものの一つとしてのその「反戦・反軍の思想」が、思想的な系譜として、第二次世界大戦後の日本における「平和国家論」、「平和憲法」にも繋がるという非常に示唆に富む指摘を行った。巨視的に見れば、一つの思想が時空を越えてそのように具現するものなのかと、改めて感じ入った。

この和田氏の講演に触発されてか、心に描いてきた年来のテーマに取り組んでみようかという気になっている。それは、20世紀の初頭から1910年代と1920年代に、西欧の文化と思想、より限定的に言えば、マルクス主義と社会主義思想が東アジアの国々でどのように受容され、それぞれの歴史的背景と社会的現実との中で変容していったのかという、壮大なテーマだ。その最も主体的な事象としての、1920年のモンゴル人民党（後の人民革命党）の創立、21年の中国共産党の創立、22年の日本共産党の創立と、その前後の時期のそれぞれの「受容」と「変容」の立体的な探究を主要な課題としたいと考えている。

もとより、自己の能力と限られた残りの時間を考えれば、どれほどのことができるか心もとない気もする。あるいは、先行研究を学ぶだけで終わるかもしれない。しかし、若き日々に考えた「モンゴル革命の特殊性と普遍性」の分析の視点を東アジアの全体に広げてみようという試みでもあり、できるところまでは進めてみたい。奇しくも、今年2018年は、カール・マルクス生誕200年にあたる。その年に、新たな課題に取り組むのもよいのではないかと思っている。

（さかき　まさあき）

足元の希望をその先へ紡ぐ

三原　裕子

19歳で初めてモンゴルの大地に立ち、天上ではなく、自分の足先から真っ直ぐ向こうに満点の星が見えたとき、生まれて初めて宇宙を感じました。そして、自分という存在がいかに小さくて無力か、自分が生かされている世界がいかに大きくて偉大か、瞬間的に私の身にインプットされたその感覚を、今でも忘れません。その翌年から1年間のモンゴル留学は、自分が培ってきた常識や考え方が180℃覆される日々で、1年後、まるで別人のようになって帰国したわたしに、家族が戸惑うほどでした。20歳のわたしには、日本で身につけた常識とモンゴルでの1年間に得た‘新しい常識’をうまくコントロールできず、その後も随分家族や友人達に心配をかけることになりました。

けれども、その後大学を卒業し、就職、結婚、そして、いま2児の母として子育てに追われる日々を送りながら、やっぱりわたしはあのときモンゴルに出逢えて良かったとの確信があります。違う国の言葉、違う国の文化や歴史、思想は、わたしに、自分の常識に囚われない柔軟な感覚を養ってくれました。おかげで、自分のお腹から生まれたのに性格も感覚も全く違う小さな人たちの所作や言動を面白いと思って尊重してあげられる余裕が少しはあります。新聞やニュースもろくに見られず夜は子らと一緒に寝てしまうけれど、沖縄や福島で同じように子育てしているお母さんたちに寄り添うココロもあります。ママ友と痴話話のついでに、核兵器廃絶国際署名や9条改憲反対署名を呼びかけたりもします。

昨年末、『民衆の敵』というドラマを観ました。平凡な主婦が、家族の幸せを求め、ママさん議員になり悪戦苦闘する物語。月9史上最低の視聴率だったそうですが、作中のセリフには考えさせられるものがたくさんありました。「私たち一人一人の無関心、それこそが民衆の敵」関係ないと知らぬふりをするのだけはやめたい、微力でも、行動していたい。そう決意新たに2018年を歩み出せるのは、あの、モンゴルの大地に立って感じた‘わたしはちっぽけな存在’の感覚が、決して消極的なものではなく、生かされていることへの感謝、大地への畏怖の念だったからに他なりません。

（みはら　ひろこ）

平和に生きるため歴史と向き合う

松村　晴恵

モンゴル国立大学での２年間の留学を終えたのが1986年９月。帰国したら予想通り「浦島太郎」状態で、しばらくは外に出るのもいやだった。モンゴルに戻りたくなり「逆ホームシック」になったのを覚えている。

修士論文を書かなければならないし、卒業後の就職先もどうなることやらという状況のせいだけではなかった。それ以前に、日本社会でやっていけるのか、不安だった。生活は便利だが、息が詰まるような生きづらさのある社会。細かな気遣いが求められ、おおらかさに欠ける。「男尊女卑」が根強いことも改めて痛感した。日本社会のそうした側面は今も変わらず、むしろ昨今「空気を読む」とか「同調圧力」とよく言われるように増幅している面がある。

それでもなんとか日本社会に適応し（？）、一つの職場で勤続30年超となった。モンゴルについてはおろか、「明日に向かって」じっくり考える間もなく仕事に追われ気味だ。ただ、社会人になってモンゴルを訪れたときの旅行記を含め、書きためてきたものはウェブページ「モンゴル見聞記」（https://mongoltemdeglel.jimdo.com/）にまとめている。

「明日に向かって」生きていくのに重要なものは平和と医療だと思う。生きづらい日本社会にあって世界に誇れるものはつまるところ、日本国憲法と医療の国民皆保険制度ではないか。日本の食や自然、文化がいいと言っても、どの国であれ「住めば都」だ。命に関わる安心感は何にも代えがたい。日本人が戦後、戦争の惨禍にさらされることなくこれたのは憲法９条に依るところが大きい。

ところが、憲法も医療もかなり危うくなってきた。医療保険制度は改悪に次ぐ改悪。憲法も安倍政権下「安保法制」成立で解釈改憲され、国会は「改憲勢力」が３分の２を占めている。

日本国憲法はその前文にもあるように侵略戦争の反省の上に成立した。だが、明治以降の植民地支配・侵略に関する歴史認識が社会にどれほど根づいているだろうか。私自身、学生時代それなりに近現代史を勉強したつもりが甚だ不十分だった、と社会人になって思い知る。

歴史学者、山田朗氏が「改憲問題は歴史認識問題である」とし、「司馬史観」とも称される「明治時代に対して高い評価をする歴史認識が、戦後の民主主義に対して低い評価をする認識を支え、改憲への強い志向性をもたらしている」と指摘している（『日本の戦争：歴史認識と戦争責任』2017年12月、新日本出版社）。

歴史認識や戦争責任をあいまいにしたまま９条改憲に突き進めば、再び軍事大国化・軍国主義の道を歩みかねない。明日に向かって平和に生き続けることを願い、主権者の一人として、歴史の真実に向き合い学び続けたいと思う。

（まつむら　はるえ）

「ほとんどない」から「6日に一回」、今はほとんど毎日モンゴル

荒井　幸康

1989年入学、平成をモンゴルとともに過ごした荒井幸康と申します。

研究会ができて45年以上、そして、『モンゴル研究』の30号、おめでとうございます。

この30年ですが、大学一年生の頃から、毎週水曜日の例会に集まるモンゴルに関心を持つ人々との交流や様々な発表で得た知識の蓄積の上に自分なりのモンゴル観とモンゴルへの関心を育てていけたことが、今につながっている、と改めて思いました。

芝山先生をはじめとしたモンゴルに情熱を捧げた大先輩の方々、田渕さん、秋山さんといったちょっと上の諸先輩方、同期入学した山田さん、横田さん、高田さん、山内さんたちとの議論で大いに刺激を受けました。

入学した頃、巷の話題にモンゴルがあがることはほとんどなく、モンゴル語を学んでいるといったら、モンゴルってどこにあるのという質問もいくつか受けた記憶があります。最初にモンゴルに行ったのは1992年7月。モンゴル国ウランバートルの第23中学校の日本語の先生として1年間いましたが、その頃から早25年もの月日が経ちました。

象徴的だったのは、1993年帰国時に偶然会った大島部屋と書かれた黄色い浴衣を着た方々。その中には旭鷲山や旭天鵬もおられたと思います。まだ、幕下にもなっていなかった頃でした。今調べてみましたが、まだ彼らは19歳とか20歳だったんですね。

彼らの活躍でモンゴルは大いに認知され、2007，8年ごろだったと思いますが、モンゴル人に日本事情を通訳した際に、先生との話の中で、「いまや日本で6日に一回はテレビでも話題に上る。というのも相撲場所は年六回15日、つまり90日はモンゴルのことが話題に上る」とお話されていました。

モンゴルの認知度は十分上がったといえます。

時代は流れて…… 2017年終わり、2018年の初め、今モンゴルの話題は毎日のように出てきます。

ただ、どちらかというと、相撲で勝てない日本の力士を見る観客のうっ憤を晴らすような論調でいささか残念な気がします。一時の問題で時が過ぎ去れば、こんな話はもう忘れられてしまうだろうと思います。

満州を体験し、モンゴルといわず「蒙古」といい、中国と混同する世代がありました。この世代の人々は、かなり少なくなってきたと思います。今、語られるモンゴル人は、新たに生まれている別のイメージの中にあるものだと思います。遊牧民であることや、真実かどうかわからないけれど、報道されるモンゴル人力士の態度から判断して、安易に馬鹿にして語る人、あるいは、熟慮せずに自分らの垂れ流す言葉は伝わらないだろうと思っている人がいることは残念に思います。

一方のモンゴル人は、今のところ日本人にかなり好感を持っているように思います。それだけにこ

のような状態が続けば、日本人はモンゴルを理解しないのだとそっぽを向かれないかなととても気になります。

モンゴルを大学時代４年間「勉強してしまい」、モンゴルに対してその後も何らかの関心を保っていらっしゃる方、運命とは言いませんが、おそらく何らかの縁を引き受けてしまったように感じます。

かくいう私も、モンゴル国から始まり、ブリヤートやカルムイクにまで行って縁を広げてまいりました。その後もモンゴル系のいる人がいる各地の人々との縁がいつの間にか広がっています。

日本でのモンゴルの縁はそれなりに広がりましたが、それをいい方向に向かわせるお手伝いをしつつ、そのほかのモンゴル地域とまとめて、日本との縁をつないで行ける、そんな活動をこれからも続けて行ければなあと思います。

（あらい　ゆきやす　亜細亜大学、青山学院大学、一橋大学、東京大学等兼任講師）

「何のためのモンゴル研究か？」の問いを引き継ぎながら 考え続けたい

T. エネビシ

私は2013年から日本の大学院に留学し、その時からモンゴル研究会の会員になり、1975年から2013年までの『モンゴル研究』を手に入れて目を通している。モンゴル社会を舞台とする数多くの出来事や人物の人生が流れ、まるで歴史の映画を見ているような気持ちになって、悲哀や喜びを感じながら読んでいる。

各号の前書きがまた興味深い。そこからモンゴル研究会をどのような思いで立ち上げ、何を大事にしながら続けてきたのかが読み取られるからだ。発足当初からモンゴル研究会の会員の一人ひとりが共通して常に問いかけてきたのは「何のためのモンゴル研究か？」という問いであったようである。一人で考えるより皆でと、同じ考えを持つ学生たちは夏の合宿を行い、そこから研究会の歩みが始まった。研究会の会員は各人の生き方に引きつけて考え、その生き方が絶えず問い直されるような研究を心掛けていくことを大事にしている。

『モンゴル研究』におけるあらゆる投稿の中身は単純な善悪の評価で終わるのではなく研究対象とするその時々のモンゴル社会の現状を通して日本社会を見直す、世界を見直す態度を示している。そして取り上げる問題の本質に触れて問題提起し、考えたことを書き残している。

先人たちのこの蓄積を吸収しながら、「何のためのモンゴル研究か？」という問いも引き継いで考えていきたい。そのために「何が大事なのか」ということを常に意識して、それに自分の問題意識や研究を合わせていきたい。

（T. えねびし）

歴女になるには …… ♬

吉本　るり子

最近「私の常識」が揺らぐときがある。

「私の常識」は、主として親からもらったものとたぶん学校教育で学んだものである。

母は私から見ると人格者で、主に専業主婦だったが、母親の在り方が私の行動の基準になっている。

母は両親とも早くに亡くし、しっかり者の祖母に育てられた。折りにふれ、諺のような祖母の言葉を引用した。「昔の人（お祖母さん）はこう言いました」と。

社会的な常識は、戦後民主主義が名残りを留めていた小中学校時代に学んだ。

そんな「私の常識」が、「え！そうなん？」と何かとぶつかる時がある。一方で、学んだ歴史が本当の歴史じゃないと考える時がある。

「歴女になりたい」と私は思った。本当の歴史はどうだったんだろう。何か忘れてきたのでは。できれば、民の論理と存在形態を探求してみたい。負けた側は「○○の乱」と記され否定される。ひょっとしてそこに何かがあったのでは。支配の論理、軍（力の）論理、資本の論理に圧されて、民の論理を見失ってきたのでは。その実態も隠されて。民の倫理と在り方を探求すること、意識すること、覚えておくこと、伝えること、それが大事なのでは。

手掛かり、足掛かりは？　今のところ、日本史では網野善彦、モンゴル関係では Sh. ナツァッグドルジの著作である。Sh. ナツァッグドルジの『ЧИНГИС ХААНЫ ЦАДИГ』は翻訳してみた（『チンギス・ハーン』2016年、アルド書店）。今年は Sh. ナツァッグドルジ生誕100年記念に当たり、著作集10巻本が出るそうだ。とにかく読んでいこうと思っている。もう一つの手掛かりは口承文芸である。無意識の領域の何かがそこにあるのでは、と思っている。

「ほっとけない！」『モンゴル研究』とモンゴル研究会。やって来た中で、そう感じる時があった。廃刊の話が何度か出た。でも「ほっとけない！」せっかく皆で築いてきた土俵なのに、このまま、放棄していいのか？と思った。資金難。でも預かった原稿がある。電子版で継続することになった。

ウラン開発問題。今岡さんが送ってくれた画像を見て驚いた。このときは、モンゴル研究会内に核問題研究会があって、その問題提起の集会を手伝った。『モンゴル研究』28号は核問題特集号になった。

この29・30号記念号で区切りとし、最後を飾るという話もあった。しかし、次号への投稿も予定されていて、研究会は当分、続きそうである。脈々と？　そうそう、先日例会で聞いた鉱山開発問題。「ほっとけない！」と感じている。何ができるかは今はわからない。

行き当たりばったりだけど、モンゴル研究会には出会いがある。出会いを大切にしたい。わらしべ長者の人生訓である。

「歴女になるには …… ♬」（中島みゆきの「悪女」のさびのメロディーで）と、出鱈目に口ずさみながら、今日も私はあがいている。

（よしもと　るりこ）

子育てはモンゴルで

野本　悠紀子

私は2018年1月現在、これまでに5回モンゴルに渡った。最短で5日間、最長で3ヶ月間滞在した。ウランバートルの他に、10以上の県に訪れ遊牧民の家庭でもお世話になった。モンゴル滞在期間を全て足しても半年と満たない短い期間ではあるが、そこで多くの事を学んだ。今回は子どもに対する私の考え方の変化を中心に書きたい。

もともと私は子どもが苦手であった。まず、何をしゃべっていいかわからない。兄妹・従兄弟の中で末っ子ということもあり、年下の扱い方にも慣れていない。本来人見知りということもあって、子どもと一緒に場を共有するということが得意でなかった。

2度目にモンゴルを訪れた2015年の7月に、モンゴル西部に位置するバヤンウルギー県に行った。ウランバートルから長距離バスで行ったが、その時の移動時間は42時間、2泊3日の行程だった（最近では道路も舗装され、24時間で行けるようになっているらしい）。そんな長い時間バスの中で過ごしていると、乗客同士も仲良くなる。バスの乗客は同じカザフの故郷に帰省する人たちばかりだったから、誰かがカザフ語の歌を歌うと、乗客30人ほぼ全員で大合唱が始まる。その中には子どもも何人かいた。

最初は彼らの親や祖父母世代の人たちと話していたが、いつの間にか、彼らとカメラで写真を撮ったり、ぬいぐるみで遊んだり、質問をし合ったりし、気づけば友達になっていた。今になって思うと、子どもたちが知らない国の知らない大人である私に怖がらず、好奇心旺盛に話しかけてくれたことで私の緊張もほぐれていったのだと思う。

その後、行く先々で子どもに出会った。どの県の街でも田舎（遊牧地域）でも、人がいるところには子どもがいた。そして、どの子どもも人懐っこくて無邪気だった。

それには、大人の中に子どもを大切にしよう、きちんと育てよう、という認識が広くあることが深く関係していると思う。もちろん自分が親であれば自分の子どもに対してそういう意識は働くだろう。が、他人の子どもに対しても同じように接するのが「モンゴル流子育て」だと感じる。仮に日本の電車である子どもが騒いだとすると、それを咎めるのはその子どもの親である。たまに注意せず放っておいたり、自らも大声で話したりする親も見かけるが、他の乗客は我慢するか見て見ぬ振りをすることが多い。こんなことを書きながらも、私自身他人の子どもを注意する勇気はない。

ところが、モンゴルでは勇気や遠慮などが入る隙はない。ゲルの中では親か否かに関係なく大人が子どもを注意し、叱り、ときには慰めるという場面をよく見かけた。公共の場でもそうかは定かではないが、日本の「我関せず」な態度よりは優しいものであってほしい。そんなことから、将来子どもができたらモンゴルで子育てをしたいな、と思うのである。

（モンゴル、日本と単純に一般化して比較はできないが、今回は便宜上特に定義をせずに「モンゴル」「日本」と表現した。）

（のもと　ゆきこ）

老害となることを危惧しつつ

山本　雅博

私は1970年4月に大阪外国語大学モンゴル語科に入学しました。諸先輩のお誘いをいただき、モンゴル研究会の初期の時期から、活動に参加するようになりました。しかし、私はまともにモンゴル研究というようなことをやったことはなく、どちらかというと、大阪外国語大学を、まともな学問研究のできる大学らしい大学にしようという当時の学生運動の中の一環として、モンゴル研究会の活動に加わっていたと思います。

ところが、私の次の世代の人たちからは、本当にモンゴル研究に取り組もうという人たちが続出してきました。その時点で私は、モンゴル研究会が質的に変化した、もちろんいい方向にですよ、と思ったので、もうこの人たちにまかせようと思いました。その後のモンゴル研究会の歩みは皆さんご存知のとおりです。

大阪外国語大学を卒業してから半世紀近くたつ、しかもまともにモンゴル研究などやっていない私はモンゴル研究会の「明日に向って」というテーマで何を書けばいいのか？ 編集担当の吉本さんから再三原稿依頼を受けながら、私にそんな資格があるのかという躊躇もあって、ずっとお断りしようかと迷って出すことができませんでした。しかし、自然な今の気持ちを書けばいいんだという助言もいただいたので、エイヤッ !! と少しだけ書くことにしました。

今はそうではないのかも、とも思いますが、私はモンゴル研究会の主役はあくまでも現役の学生であるべきだと思っています。OB、社会人は研究会の活動に参加することを歓迎しますよ、というスタンスであろうと。OB、社会人の本物の研究者としての活動は学会などでやってもらえばいいのではないか、と。で、本来現役の学生が主役であるはずと思っていることを前提にして、私の意見を言わせていただけるのなら、明日に向ってのモンゴル研究会の活動は、モンゴル研究を深めるということと、学生生活をより有意義なものにするということを両輪にしてほしいと思っています。そして、外国研究をすることの目的のひとつは、自国の課題を正確に理解することにつながるということをおっしゃる方々もいます。私も同感なので、そういう視点を持ち続けて、日本の、世界の明日をどうするのかという問題意識も持って、モンゴル研究を更に深めていってほしいなと思います。そして、本物の研究者は、前途有望な若者を応援してやってください。そして、たまには年寄りの素人も誘ってください。

まともなモンゴル研究の実績もない私にいつまでも声をかけていただけることの幸せを感じながら、そう !! これがモンゴル研究会の魅力のひとつなんですが。老害となることを危惧しながら書いてみました。大病を患いながら今何とか生命を永らえているので書かせてもらいました。失礼があればお許しください。更なる発展を期待しています。

（やまもと　まさひろ）

安倍政治が再び日本を崩壊させる

松岡　正喜

―ウソが政治を支配している―

昨今の新聞報道やテレビの国会中継を見ていると、腹立たしいことばかりでウンザリする。安倍政権は公明・維新をとり込み、多数を良いことにやりたい放題だ。裁量労働制のデータの採り方・比較の仕方のでたらめさ、それでも押し通そうとする。加計問題での、自衛隊スーダン日報問題でのウソ。森友問題でのウソにつぐウソの連続。極めつけは、財務省の国有地のタダ同然の払い下げ疑惑だ。政権は元の文書を改竄してまで1年間も国民にウソをつき続けてきた。この文書改竄は財務省だけでできるものではない。改竄せざるを得ないよほどの事情が背景にあったからこそ、やらなければならなかったし、できたと見るべきである。この度し難い、真実をまげて隠ぺいし、ウソをつく体質は何によってもたらされたのか、考えてみた。

―隠ぺいとウソつきは歴代政権の体質―

今年で戦後73年になる。ドイツと異なり、戦後の政治の中枢に戦争勢力の一員だった政治家や官僚が残り、息を吹き返した。彼等が「大東亜戦争」を総括し、改革を試みた面を否定はしないが、徐々にトーンダウンし妥協と変節を重ねた。背景には「連合国総司令部」名称のアメリカがいた。あの戦争に「負けた」ということを、「なかったこと」にして戦前を総括することを放棄し、アメリカの言うがままの構造に身を置いた。またそれを希む勢力があった。東西の冷戦がはじまり、日本が東アジアの反共のトッププランナーに据えられ、それゆえに戦争を総括をする必要性が削ぎ取られた。どこに問題があるのか曖昧にし、かかわった人物や組織・制度における責任の所在をなおざりにした。以来こんにちまでこの構造が続いている。いわゆる「永続敗戦論」である。沖縄の基地問題・核もち込みや貯蔵は言うまでもなく、郵政民営化・TPP・原発依存など経済やエネルギー政策に至るまで実体を隠し、ウソをバラまいて進められてきた。モリ・カケ問題もその構造に根差している。真実を知られたくないため隠ぺいする。なかったことにしたいがゆえにウソをつく。

―小選挙区制・政党助成金の導入による政治の劣化―

政界と財界の癒着を改め、政権交代の可能な2大政党制をつくる目的で20年余り前に導入されたこの制度は、失敗だった。いつでも政権交代できる「健全」な2大政党制を築くことがこの国の政治を良くする、というキャンペーンがマスメディアを通じて繰り返された。異論を述べようものなら、「守旧派」のレッテルが貼られた。果たして、そうだったのか。当時賛成の立場で世論（せろん＝ popular sentiment）誘導の一端を担った人が、いま露呈している政治の劣化の最大の要因がここにあると悔いている。

余談になるが、この時の NHK の解説員は「推進者」の立場でものを言っていた。「公共放送の NHK は、

皆様の受信料で支えられています」はウソだと思った。公共性が担保されていないと思った。以来受信料の支払いをお断りするようになった。何度も玄関先で集金人の方と議論したが、いまだ納得のいく回答をいただいていない。

この小選挙区制によって、歴代自民党政権の行き詰まりから保守連立政権、後の民主党政権へと権力の担い手は変わった。が、中身は変わらなかった。民主党政権への期待が大きかっただけに、この政権の失敗は決定的だった。市民・国民もこの政権の限界を見抜けていなかった。安倍自民党を再び政権の座につけてしまった。

小選挙区制は、もともと多数の議席を占めてきた自民党に有利な選挙制度である。一票でも足りなければ、有権者の多様な意見は議席に結びつかない。少数であっても多様な意見を取り入れる寛容さを奪い、多数を占めた政党が多様な意見や考えを排除しても構わないという制度上の根拠をあたえてしまった。「民主主義的手続」による独裁への道が開かれたと言っても過言ではない。ナチス・ヒトラーも同様の手続きを経て権力をにぎっていた。

この制度が導入されて四半世紀を経たが、政界・財界の癒着は変わってはいない。税金によって運営される政党は「国営政党」化し、自主性・独立性を大本のところで失った。「民主主義にとっての必要経費」論は「身を切る改革」を放棄した体の良い言い逃れにすぎない。

このような制度の中で議席を手にした政党に、自らの議席が付与された市民・国民の日々の営みに存在する不満・不安の原因は分からない、ましてや希いはなおさら分からない。むしろ政党の論理が優先し、それを達成するための行動の原理でしかない多数決の横暴を、何の痛みも感じることなく押し通すことを専らとするようになった。説明責任を果たさない。ウソと言い逃れでその場を取り繕うことに終始する。政治が一部の権力者の私物と化す。政治の劣化以外の何物でもない。

―強欲資本主義が世界を壊す―

こういう政治がファシズムを生み出す。第１次大戦後のヨーロッパ・東欧・南米・日本を見れば明瞭である。不戦条約や和平への努力が戦後の国連憲章へとつながったが、それ以上にファシズムが世界を席捲し第１次大戦の教訓が生かされなかった。今また世界は同じ轍を踏もうとしている。

国家機密法を2013年に強行し、'14年には集団的自衛権を、'15年には平和安全法制の法的整備法（＝戦争法）の強行、'17年には共謀罪法と矢継ぎ早に「安全保障」関係法の強行採決をくり返した。「安全保障」関係法で外枠を固め、内には聞こえのいい政策スローガンでごまかし人口に膾炙（かいしゃ）しようとした。しかし、もとより実体を伴うものではなかった。

経済の低成長が叫ばれて久しいが、その根本要因である経済の空洞化に目を覆っている。むしろさらにその方向を強めようとしている。国民生活の安定的な維持と向上（＝教育・福祉、医療・介護・年金、最低賃金・労働時間）のための国民本位の改革は眼中にはないのだ。400兆を超える企業の内部留保は投資に回さず、回せずマネーゲームの原資だけではなく、海外生産への移転の基金として蓄えられている。

資本家にとって日本はもはや市場ではなくなった。資本主義は行き詰りにぶつかっている。資本主義の危機は戦争に転化して乗り切ろうという衝動を引き起こす。ゆえに政治的・軍事的危機をあおり、外交や対話の可能性を躍起になって否定する。

数年にわたって、「安全保障」関係法を強行に「整備」したのは、この経済危機・資本主義経済構造の行き詰まりを将来的に「乗り切る」ための法的・軍事的な地ならしをするために他ならない。軍事的に海外へ出て行くためには憲法が邪魔なのである。スーダンに自衛隊を派遣し、しかも日報の存在を「破棄」したとウソをついてまで否定した。イスラエルでは IS を敵にまわす「経済援助」発言をして、日本人を救出しようとしなかった。何れもこんご資本による利益獲得の「新天地」を開拓する意図と結びついていた、と言っても言い過ぎではない。

― 単線的・切り分け的歴史観に異議あり ―

明治維新（＝1868年）から今年で150年になる。この150年を安倍政権は祝賀ムードで演出する中、とりわけ戦前の75年で欧米列強に劣らない「近代化」を達成したことを自賛し、「この道」に間違いはなかったと誇り高く唱えるだろう。

150年の歴史を単線的に今日の近代化と繁栄を築いた「輝ける」時代として評価する見方がある一方、前半の75年はまだ明治は良かったが、大正・昭和と時代が下がるにつれて悪くなり、やがては日中戦争、アジア・太平洋戦争へと突入していったという捉え方がある。それはアジア・太平洋戦争の悲惨な結末のみを取り上げて、その時代だけは評価できないという歴史の切り分け論的評価と言える。どちらの見方も問題がある。前者はこの150年の歴史的過程を戦前の75年も、戦後のそれも連続して見る捉え方である。あいだにアジア・太平洋戦争の敗戦という歴史的画期があったということを見落としている。見落としている限り、なぜ戦争に突入したのか総括する考えは生まれない。後者の場合は、戦前の75年の歴史を分割した捉え方である。しかし、その切り分け論は、生れたばかりの明治国家が進取の精神で、はつらつ活動し新国家建設にまい進した成功物語として描きたいというものである。明治・大正はそういう時代であったと。

しかし、歴史の事実に基づけば成立しない。明治の初めから天皇の神的権威を発揚することで新国家の統合が図られ、神祇官が設置されて神道の国教化が図られた（王政復古の具体化）。これは中途で挫折するが、国家神道の道は引き続き追及された。同じ時期に廃仏毀釈が行われた。この神道国教化への衝動が明治帝国憲法・教育勅語に結びつき富国強兵政策とともに侵略的国家体制が作られていった。いわゆる「国体」の祖型の完成である。神道が道徳的権威の中心に据えられ、他の宗教と別物扱いされた。明治の中頃には「脱亜入欧」や「欧州的帝国」論が唱えられ、日清戦争へ至る「準備」が整えられていった。日清戦争後は台湾を植民地化し、遼東半島を清朝から割譲させた。

日清戦争は、やがて朝鮮半島の領有をめぐる日・露の対立を導き、列強の中国侵略の糸口を開いたと言える。このように見ると、戦前の75年を明治は良かったが、大正・昭和と時代が下がるにつれて悪くなったと切り分けて捉えることはできない。

日本近代の歴史を連続して直線的にとらえる今の政権は、戦後を「不甲斐ない、『伝統と誇り』を失った時代」としてみているだろう。でなければ、「美しい強い国を取り戻す」といえないはずである。なぜなら、彼らにとって明治はもとより、アジア・太平洋戦争に突入した時代こそ「美しい強い国」であったと捉えているからだ。歴史に向き合い自国の侵略戦争に謙虚に学べない国は、再び同じ過誤を繰り返す危険性を孕んでいる。

さて、仕事を辞めてこの数年、隠ぺいとウソで固めた安倍政治を批判し声を上げてきた。寒風の吹

く日も、暑熱が照り返す日も、街頭に立ちマイクを握った。街ゆく人にどういう訴えが届くか、日々考えてきた。憲法が前文でいう「・・・政府の行為によって再び戦争の惨禍が起こることのないようにすることを決意し・・・」を実現するために与生を使いたいと考えている。

私事だが、先年亡くなった父は、戦争末期に兵役法で中国戦線に狩り出された。軍歴が残っているはずだと聞いて調べてみた。予想していたよりも詳細が分かった。父は栄養失調でマラリアと脚気を患っていた。甲種合格・柔道は黒帯だった。敗戦までの軍籍は長くはなかったが、食料は現地調達だった。食うや食わずのまま何日も行進させられひもじくてどうしようもなかったと、私が小学校の頃よく話していた。また、「戦争は二度とするものじゃない」とも。中国湖北省の高粱畑の平原をひたすら行軍していた姿を想像している。

村で同級生３人のうち２人が戦死していた。もし父も戦死していたならば、私はこの世に生れていなかった。戦争は人の命を奪い、運命を変えてしまう。戦争について考え、行動せざるを得ない与生となってしまった。

＊与生は余生（余った人生）ではなく、「与えられた人生」という意味で使った。

（まつおか　まさき）

まずは知ること そして やってみること

味方　慎一
ＮＰＯ法人もみじ（国際交流）代表

今から17年前 淀川の河川敷を舞台にして世界の天幕を数基組立てて国際交流の催しをしたことがありました。この時からゲル（モンゴルの移動式住宅）との出会いがはじまり、それ以降深く関わることになるとは・・それだけゲルには人を引きつける魅力があるのだと思います。家が動く？ 長年建築に携わる者として、強いカルチャアショックを受けた記憶があります。2003年にゲルを所有し、催しなどで活用したり小学校でゲル授業をしたり、と多岐にわたる使い方をしてきたのですが、回数を重ねるごとにやればやるほど興味が広がっていきました。

異なる国や民族の「衣・食・住」をツールとして体験し体感しながら理解を深めてもらうやり方は、基本的な方法です。特に「住」には人々の営みのあらゆる事象が凝縮されています。環境や慣習に順応した住まいづくりや、長年蓄積された知恵とか工夫とかが住まいという形になって見ることが出来ます。でも 衣・食・住を体験すると言いましたが、「住」はそう簡単には揃いません。モンゴル遊牧民の紹介では、ゲル（住）をその場に持ち込み、くみたてる、というようにそれが可能なのです。

私にとってもゲルを通じて得た知識はモンゴルの風土や生活ぶり、そして人々の営みを理解できる大切なツールになっています。机上の学習だけではなく、ゲルを実際に組立て解体してみたり、その空間をいろんな活用して考えることは、ある種の“現地に行かないフィールドワーク”かもしれません。環境や風土の異なる地でやってみるとお互いの違いが鮮明にわかることも多く、そこがまた面白いところでもあります。

モンゴル研究会には最近参加させてもらうになったのですが、モンゴルという大きなテーマがあって 個々あらゆる角度からの発表内容は私の好奇心を刺激します。いままで気がつかなかった視点を知って、新たな問題意識がでてきます。 まずは知ることから・・。

（あじかた　しんいち）

ふわーっと幸せに

内田　敦之

この短い原稿を出すために何度声をかけてもらったことだろう。一億総余裕なしの日本にあって、モンゴル研究会のすごさを再認識した。ようやく出すことができました。とても感謝しています。

昨年は年明け早々、左足骨折からスタートした。凍結した車道で自転車が激しくスリップして転倒、腓骨・脛骨がポッキリ折れた。「一寸先は闇」を実感。ほんの一時間前にはウジムチン、ホルチン・モンゴル人らと梅田のセンベロで自由と人権について少し熱めの議論をしたばかりだったから。即手術となり、夏の抜釘までボルト６本＋ビス７本＋プレート１枚と共存することに。動けるようになって再びモンゴル国に出かけた時、チャハル・モンゴル人のエクチが「四肢のケガは大きな災いからあなたを守るためだったのよ」と。確かにその通りだと思った。転倒した時、頭を打ったり車にぶつかったりしていたら…。仕事も動けるようになったタイミングで入ってきた。テンゲル（天）が手を差しのべてくれたのか。近ごろは出かけると、近くの寺や神社で手を合わせるようになった。

50をすぎて心身も少しくたびれてきて、残り時間も短くなった。自然災害（ほとんど人災だろう）もけっこうある。売国奴らのために国家は破たん寸前ではないか。時間との闘い。刹那的になるわけではないが、生き急がねば。

以前から気にはしていたが、骨折でしばらくヨボヨボ歩くようになって日本人がますます怖くなった。街ではみんな恐ろしい形相ですれ違い、追い抜いていく。「どけっ」と言わんばかりににらみつける。社会的に弱い人びとはいつもこんなに怖い思いをしていたのだ。歩行者も自転車も自動車も容赦なし。何が「日本人は思いやり」だ。新宿駅で一瞬横を向いて話していると、ガツンと肩にタックルを食らわされた。ぶつかった小柄な女性は全く振り返ることなく人ごみに消えていった。

何かに追い立てられているようで、みんな余裕がない。そのはけ口を他人に向ければ「いじめ」で、自分に向ければ「自死」、どちらも地獄だ。外見は恐ろしいが、中身はふぬけな日本人たち、何とかならないものか。

自身の責任だが、公私とも思ったようにはいかない。ただ、それでも、ふわーっと幸せを感じることがある。年を取っただけなのかな。近くの「幸福温泉」（ただの銭湯）のサウナと水風呂で心身がゆるんだ時、早朝の澄みわたる青空に美しい月を見た時、立ち飲みでイカの沖漬け（自家製に限る）を肴に冷や酒を飲る時、ドラマやアニメに思わず心が動いて涙がにじんだ時、など。年を取っただけなのかな（たぶんそうだろう）。痩せこけた体型は相変わらずだが、心身はほぼ健康だ。好きなこともやれている。きっといい人たちにいつも囲まれてきたからにちがいない。私は幸運だったのだと思う。これまでがむしゃらにやってきて混沌としていたものが近ごろ少しつながり始めた驚きと幸せもある。

まだしばらく動きそうな心身を動員して残った時間にやるべきことをやろう。

私は「宣教師」ではない。それでも、自分に見えて聞こえていることは人に伝えなければならないだ

ろう。と言っても、うまく伝える方法がいまだにわからない。ただ方法が見つからなくても、自分はとにかく動いていこう。これまでどれほど人に迷惑をかけて、つながりを断ち切って生きてきたのだろうか。残った時間で少しでも穴埋めできるだろうか（それは都合が良すぎるよな）。

日本人とモンゴル人、みんなの明日に向かって歩きつづけたい。

（うちだ　としゆき）

この世界の片隅に暮らす

吉本　周平

モンゴル人民共和国に留学した時、「日本はどんな国か」「日本人はどういう人たちか」「どういう暮らしをしているのか」とよく質問された。経済や政治のしくみをおおまかに伝えることはできても、結局は答えに窮した。山国、雪国、平野部、大都市や過疎の村、北海道、大阪、沖縄… 自然その他の地理的条件は多様、暮らしも多様。人？ 顔が次々に浮かび、いろいろやなぁ。以来、「モンゴル」「モンゴル人」を主語にして一括りにすることに慎重になった。

たったの２年間、おおむねウランバートルの大学周辺に限られた狭い範囲ではあったが、そこに実際に暮らしてみれば、多様でいろいろだった。学生寮にはモンゴル人学生だけではなく東欧、西欧、ソ連、北朝鮮やベトナム、カンボジア、ラオス、インド等からの留学生もいたが、「おんなじや」という思いを持った。「良い子」「悪い子」「普通の子」「おまけの子」ということか？ 同じだけれど、一括りにはできない。くくると人が消え、国や国民、政治家、軍、党、資本家、労働者、消費者、生産者などだけが残り、薄ら寒く不気味だ。固有名詞のない世界には生きている実感はなく幸せもない。

教育の世界に入ったが、そこも同じだった。生徒だと一括りすることはできない。ましてや成績や進学先などの数値で…そこに学びはないし喜びもない。みんな違う、つまりは人の世界なのだ。家族の中に育ち、やがて家庭を持ったが、同じだ。一人一人違う顔をもつかけがえのない大切な人たちだ。母や多くの身近な人を亡くした。かけがえがないのだ。だからこそ自分の中に生き続けているのだろう。時をともにすると、人も、自然も、物もますますかけがえのない存在となる。

生きるということ、暮らすということはこの世界の片隅のかけがえのなさの中にあるのだと思う。その暮らしを守る努力を社会として手をとりあってしなければならないはずである。災害があり、戦争があり、原発事故、格差と貧困、孤独死や過労死がある。都会暮らしであっても、大自然の中の世界であることを忘れず、工夫を凝らし暮しつつ、人間の貪欲に起因する大小様々な人災を防ぐささやかな努力を肩肘張らずにできる範囲でこつこつする。孤独な片隅ではない。片隅同士、つながりができていくだろうし、そういったつながりの力が何かを変えてくれるかもしれない。かけがえのない片隅の、そのかけがえのなさを深く理解し共感したそのつながりこそが世界となればと思う。そして何より、人をくくらず、人を道具にすることなく、高をくくらず、いろいろくくらず、かけがえのないこの片隅で暮らし、ささやかな生をまっとうしたいと思う。

（よしもと　しゅうへい）

〓創刊 30 号記念特集〓

《インタビュー》

モンゴルから日本、日本からモンゴル

～ 小貫雅男先生にお会いして ～

T. エネビシ

《インタビュー掲載の経緯について》

このインタビューの『モンゴル研究』創刊30周年記念号特集に掲載にあたり編集部は下記の手紙を小貫雅男先生に送り承諾を得た。エネビシ氏へも同様の説明を行い了解をえた。経緯の説明の為にその一部を下に付記する。

（編集部）

小貫雅男先生への手紙一部抜粋

・・・・・・

以前、お話しましたが、モンゴル研究創刊30号記念号に、エネビシさんが先生にお会いしたときの会話を（もちろん先生の許可をいただけましたらですが）、インタビューとして掲載したいと考えています。

エネビシさんはインタビューしようとしてお話をうかがったのではなく、先生にもそのようにはお話していないと言っていましたが、彼女がテープを起こした文章を見せてもらったところ、とてもいいインタビューになっていました。

研究者の使命や、研究のあり方が明快に述べられ、特に、若い研究者、研究者の卵に対する何よりのアドバイスになっています。

また、「菜園家族」についても、著作とは違った、会話ならではの柔らかい口調で語られていて、その骨子、勘所がわかりやすく、先生の菜園家族についての著作を読む者にとっても大きな助けになりそうです。

さらに、モンゴル、日本でのフィールドワークで得たものが普遍的な課題の発見とその解決策の模索と提示、未来社会論の構築、そして原理の明確化（哲学）と実践へと綜合されていく過程がよくわかります。

この対話をこのままにしておくのはもったいない。ぜひ、インタビューとして掲載させていただきたいと思います。

会話そのものは、もっと長く、興味深いところはもっとあったのですが、このインタビュー原稿では、エネビシさんへの特に個人的なアドバイスと思われる部分を省き、研究者を目指している学生一般へのアドバイスとなる部分、先生の著作への理解の助けとなるであろう部分をとくに選んで編集しています。

ご一読いただいて、掲載の許可をいただけないでしょうか。また、手を入れていただけるならそれも大歓迎です。

ぜひご検討の程、よろしくお願いいたします。

吉本周平

私は2013年に研究生として日本に留学した。日本に来る前に、地方移住者によって拡大するウランバートルのゲル地区でNGOと住民の連携による地域づくり活動に携わっていた。そこでの経験や、見て感じてきたことをこれから日本の大学院に進学し、どのように研究テーマに展開させていくか、と考えていた。モンゴル語でも、日本語でも文献を読みながら考えていた時に、小貫雅男先生の『遊牧社会の現代』をはじめいくつかの本に触れ、制作されたドキュメンタリー映像作品『四季・遊牧 ―ツェルゲルの人々―』[1)]を見た。

小貫先生の著作から、社会主義時代の遊牧地域におけるネグデルをベースにした地域づくりの様子、社会主義体制から市場経済化を経て資本主義へと転換する変わり目の時期における遊牧地域の地域づくりの様子が伝わってくる。特に、社会主義体制の体験が薄い私たち若者にとって、当時の地域社会をフィールドワークし、分析してまとめた日本のモンゴル研究者の視点は興味深かった。

せっかく日本に留学しているので、ぜひ直接小貫先生にお会いして、モンゴル研究者としての長い年月の経験、知見をお聞きし、お話を伺いたいと思った。メールを送ったところ、小貫先生ご自身から電話をいただき、歓迎してくださった。2016年8月、滋賀県犬上郡多賀町大字大君ヶ畑の里山研究庵Nomadに居を構える小貫雅男先生を訪ねてお話を聞いた。

●モンゴルから日本、日本からモンゴル

小貫先生　せっかく日本に来ているのだから、日本の現実から学ぶことによって、モンゴルの未来は日本と同じような方向ではなく、もっと独自の、モンゴル独自の方法があるのではないか。それを大きなテーマにしながらドクター論文までまとめるといいですね。

[小貫先生著『遊牧社会の現代』[2)] から]

エネビシ　ネグデルの協議会で、ネグデルには何が必要なのかとかネグデル員が協議して、共同フォンドをつくって、その中から生産の基盤とか、福祉や教育などに配分されていたのですね。

小貫先生　牧畜からあがった収益をどのように仕分けしてフォンドに入れるのかといった、そんな再生産構造の図式も描いてあった。例えば家畜小屋を立てることや教育・福祉にどう配分するとか。フォンド全体が大きくいくつかに仕分けされて、生産と再生産が満遍なくゆきわたり循環するようにできていたわけですよ。これはみなネグデルの定款に書かれてあった。その点は優れている面でもあるのですが、一番問題なのは、「指導性」という言葉が強調されているわけです。人民革命党が上から目線で指導するということになっているのです。憲法にもそう書いてあったし、その当時はね。そうすると、一人ひとりの遊牧民よりも、上に立つ指導者があらゆるものを掌握して指導できるようになってしまう。下にいる遊牧民たちは、言われたことだけをやることになるから、自分から進んで何かを工夫する能力がだんだん失われていくわけです。そこに、ネグデルで1960年代、70年代、80年代とやって、1980年代の末期になってから家畜頭数が伸びなくなってしまった本当の原因があるのです。社会主義の理念そのものは優れているのですが、ネグデルを現代のモンゴルにただちに適用することはできない。今日の社会全体をどうしていくのか、それに代わる新たな理念と新たなシステムが必要。それは上に立つ人間に任せてしまうのでなく、下からどうやって実現していくのかということが、モンゴルに限らず日本においても21世紀の今、探究すべき大きな研究テーマなのです。今日はそのことについて、これらの本を参考に考えていきましょう。

エネビシ　私も日本留学前、ウランバートル郊外の地域でやっていて一番疑問に思ったことがそこ

1）映像作品『四季・遊牧 ―ツェルゲルの人々―』三部作・全6巻、7時間40分（小貫雅男・伊藤恵子 共同制作、大日、1998年）
2）『遊牧社会の現代 ―モンゴル ブルドの四季から―』（小貫雅男、青木書店、四六判・289頁、1985年）

だったのです。人々が指導されない限りはやらない、自発的に積極的にやって行かない。どうしたらこれを変えられるのか？ということでした。

小貫先生　人が自発的にやらないということはモンゴルだけではない。最近の日本も同じです。日本は戦争に負けた直後、貧しかった頃、特に農村ではみな積極的に自らの頭で考えて、生産に励んだ時期があったのですよ。特に1945年から1950年代半ばぐらいまでは。ところが1950年になって朝鮮戦争が勃発して、日本の資本主義が復活するわけです。そうすると上から目線の指導みたいなのが次第に強化されるようになる。すると、「選挙」で代表を選べばあとは誰かがやってくれる、お上が。上に立つ偉い人がやってくれると思うから、受け身になっていくのです。だんだんにね。それが今日まで70年ほども続くのです。だから、みんな前向きにやるという精神が次第に薄れていく。一部にはいい傾向も現れてきたけれど、全体としては遅れてしまった。

●「地域」について

小貫先生　自然と人間が有機的につながるひとつのまとまりある地理的空間、括弧付きの「地域」を、モンゴル語で言うと、ノタッグ・オロン нутаг орон と言います。ツェルゲル村 Цэлгэр（バヤンホンゴル県ボグド郡）を例に挙げると、広大な砂漠に聳える標高3,590メートルの東ボグド山の自然の広がりの中で、60家族ほどの遊牧民たちが、ヤギやヒツジや馬や牛（ヤク）やラクダの家畜を放牧し、協力し合いながら暮らしている。このように、それは、自然と人間が融合して有機的に結びついて動いている、動体的なひとつのまとまりある地理的空間としての、基本的で基礎的な単位なのです。それを私たちはノタッグ・オロン、日本語で「地域」と呼んでいるのです。「地域」とは、東アジア地域などという時の地域ではなくて、それはモンゴルの遊牧地域を長年にわたって観察し、そこから生まれたひとつの新しい概念なのです。つまりそれは、人体の基本的で基礎的な単位である細胞を見ると全体が分かるように、日本の現実をトータルに見る場合にも役に立ちます。

今書いている本は全部、こうした考えが根底にあるんですよ。だから、一番大切なことは「原理は何なのか」ということ。そして、「未来に向かって何をどう解決していくのか」ということでもあるのです。その両者をきちんと結び付けなければいけない。このことをしっかり考えておくことです。絶えず考えながらやるということですね。そのうちにだんだん知識や自分自身の考えが次々と生まれ、蓄積されていくのです。そのうちにいい論文にまとまっていくでしょう。それは論文のためにだけでないのです。何よりも自分にとって生きる心の糧になるはずです。

エネビシ　モンゴルでは形式的には意見をいう自由が与えられているように見えるが、実際にはそうではない。

小貫先生　モンゴルの人たちは、本来、人間というものは、今言った「地域」ノッタグ・オロン нутаг орон に密着して、そこで日常的に生産に携わって生きるものだということ、そして、どうしたら「地域」での暮らしがよくなるのか、そういう視点から深く考えることがまだないのではないでしょうか。それは、日本人も同じですよ。それを自覚すれば必ず鍛錬される。鍛錬されれば人間はどんどん強くなる。そのチャンスが、つまりそのような生活の“場”が失われてしまったのです。

日本の場合だったら、多くの若者が東京や大阪など大都会へ行ってしまう。それを私は「根なし草」になると言っているのです。根っこのない草。自分で自分の食べるものを大地から吸い取ることができない人間。つまり、18世紀産業革命以後に現れてきた近代賃金労働者。賃金労働者になって都会に浮遊して行って、どこかの会社に雇われ、賃金をもらって、それで生活のすべてを賄うわけです。食

べるもの、着るもの、住宅から、社会保険、医療・介護・教育に至るまで、全部お金で解決する。これは自分の根で大地から吸い上げたものじゃないのです。もらった賃金ですべてを賄うということ。これは悠久の人類史の中でも稀に見るめずらしい時代なんですよ。イギリス産業革命以降のわずか300年間の時間。地球の長い歴史から見ると、200年や300年はわずか一瞬にしか過ぎない。人類史のほとんどがそうではなかった。ところが近代になって、人間は大地から切り離されたそんな存在になってしまった。

だから民主主義は、観念の中での、実体の伴わない形だけのものになってしまった。それは、今日言うところの「お任せ民主主義」。誰かに任せた民主主義。代議士を選べば、その人がはるか彼方の議会で決めてくれる。あの人たちは偉い人間だし、自分が何かしなくても、いつか誰かがやってくれる。日本はそんな状況に陥ってしまった。モンゴルもたぶん同じではないでしょうか。

エネビシ　私の関わっていたウランバートル郊外の地域では、そこを下から変えていく取組み、挑戦があって、生産手段は持ってないけど取りあえず、自分たちにどんな問題があって、自分たちに何ができるか話して、それを実現して行こうと。その際それをひとりひとりではなく、住民が組織されることによってやるということをやり始めていたのですが。

●研究者と現実社会

小貫先生　研究者にとって大切なのは、調査の方法です。社会の現実から知識を得なければ研究はできないでしょう。だから、研究者はあくまでも生活の現実に向き合い、そこに深く入って、人々に接して、生活の実態に溶け込んでいくことなのです。そこから真実は何かということをつかむ作業なのです。時には住民と一緒に動くこと。そして、お互いに信頼を勝ちとっていく。でも本当にやるのは、あくまでも、そこに生活している人たちがやるわけです。研究者は現場に入り、そこで得た事実を整理し体系立てて、歴史の中に位置づけ、それがどういう意味を持っているのかを考え、その上で、将来はこういう方向に「地域」は、社会は、むかっていくのではないか、ということをあくまでもひとつの考えとして提示するのです。それが研究者の任務、使命なのです。今の研究者はこうした地道なことを避けて頭の中だけでやるから、現実からかけ離れてしまう。知らず知らずのうちに、「学会」という閉じた狭い世界の中で「お偉い先生」になることが目的になってしまう。だからいつまで経っても、現実を変える方向には向かっていかない。若い人たちは、こんな研究者になったらだめ。だから、人々の暮らしの現実の中に深く入っていくことがとても大切になってくるのです。現場に入っていくのは大事ですが、あくまでも生きた真実をつかみ出して、その事実を自分の頭で整理して、それが歴史の中でどういう意味を持ち、それが将来の本当に大切な芽になるのかどうか、あるいは阻害要因なのかどうかを考えて、新たな理論を粘り強く構築していかなければならないのです。

エネビシ　私は今までのまとめたものを持ってきました。これからはその意味を明らかにしたり、これを土台に考えていきたいと思っています。

小貫先生　そうそう。一度に完全なものはできないから。今の時点でできたものを見てもらって、その上で人の話を聞きながら、あるいは本を読みながら、さらにそれを修正していけばいいのです。今考えているやり方をさらにいいものに仕上げていく。今、そのプロセスにある。どこまでいっても完全なものってないのですよ、絶対に。私たちもそうだし、だれもそうなのですよ。自分が納得できるものをまとめたように思っているけれども、それはまだまだ……。

●肉体労働と精神労働

エネビシ　人間はどうやって変わっていくのかというのがずっと私の関心のあるところです。

小貫先生　それは重要ですね。人間は何によって変えられていくのか？人間には労働というものがあるでしょう。動物には厳密な意味での労働というのがありません。道具を用いて自然に働きかけ、そこから食べ物とか衣や住を得るというように。人間は労働を媒介することによってはじめて、自己自身を変え、つくりあげていくわけですね。そして労働過程。労働過程を通じて、人間が頭脳を発達させる。人間の頭脳はどんどん発達していく。労働をどう捉え、それを人間生活全体の中にどう位置づけるか、ということ。

今の人は労働を嫌がりますね。それは、命令されてやるから嫌悪するのです。芸術家は、絵筆や彫刻刀などを用いて、同じく労働するのですが、疲れを知らないで楽しくやる。自分がこういうふうにしたらこんな美しく素晴らしいものができあがる、とイメージしながらやる。イメージしながら頭を使い、工夫しながらやる。そこに喜びを感じる。それは肉体労働と精神労働が分離せずに、ひとりの人間の中で統一されているからです。

一方、奴隷は奴隷主が「やれ」と強制するから、ただ嫌々やる。ここでは、精神労働は完全に分離して、肉体労働だけが強制されている。精神労働が欠落した労働が楽しいはずがない。人間労働から精神労働を奪って、圧倒的多数の人間を単純な肉体労働へと追い遣ったのが、近代資本主義の最大の罪悪なのです。大なり小なり違いがあっても、今日のほとんどの人々が本質的にはこの状態にあるのです。この人間労働の問題を、今日の社会を具体的に想定し、いろんなレベルで深く掘り下げて考えていくと、先に触れた「人間はどうやって変えられていくのか」ということに関連してくるのです。このことを含めて、これまでに書いた著書を参考にして考えて下さい。

●社会状況と意識

小貫先生　世界史的に見ても、戦中・戦後の闘いの中から優れた人材が輩出されてきました。ところが、経済が成長してくるにつれて豊かな暮らしを求めるようになってきて、一般市民も次第に自分の私的な狭い生活世界に埋没するようになっていくのです。人間の意識が急速に後退していく。それとともに、西ヨーロッパでは、反ファシズム統一戦線で重要な役割を果たしたフランス共産党もイタリア共産党も衰退していく。20世紀末のソ連の崩壊によって、かつては希望の星だった社会主義思想そのものへの懐疑も急速に広がり、それに代わる新たな未来への道を見出すことができないまま、今日のような混迷の時代を迎えているのです。

長い目で見れば、社会の状況の変化と人間の意識というものは深いところでつながっているのですね。モンゴルの場合も、どういう時代にどういうふうになって来たのか、という社会の状況との関連で、しっかり見ていかないといけない。こういうことが起こったというだけではだめ。どのような社会状況の変化から、どのように人間の意識の変化が現れたのか、ということを詳細に見ていく必要があるわけですね。ただこういうことがありました、だけでは本当のことは分からないのですよ。こういう時代のこうした変化があったから、この人たちはこうやり出したということを裏づけて説明することが大事。大きな時代背景があってネグデルも解体し、地方で生活できなくなったからウランバートルに出てくるようになったのですよね。その社会的背景をもっともっと深めて見ていく必要がありますね。

具体的には、それぞれの家族について、家族構成はどうなっているのか、誰が家族で働いていてど

んな仕事をしているのか、そして実際にはそれぞれどういう気持ちで生きているのか。いくつかの家族モデルを設定し、詳細に調べていく。家族と家族の協力関係はどうなっているのか。 地域としてどのようなまとまりあるコミュニティーができているのか。これは地域団粒構造というものにつながる問題ですが、このことは重要なので後でもう少し詳しく説明したいと思います。

●家族

小貫先生　伝統的な家族の絆というのをベースにしながらも、地方から移ってきた遊牧民は新たな都市の条件のもとで生活するのですから、家族のあり方も変わってきますね。

エネビシ　ウランバートルの人口120万の多分60%がゲル地区に住んでいます。

小貫先生　ウランバートルの市役所に行けば、人口の変化については統計があるはずだから、それを調べないと正確な変化は分からない。

人口の数の変化だけではなくて、移住してから職業はどのうように変わってきているのか、ということも。公務員になっているのか、工場労働者になっているのか、日銭を稼ぐ何かをやっているのか。実際には様々な仕事をしているはずです。まずは統計的に調べて、それだけでは実態が見えないだろうから、一応調べた上でいくつかの典型的な家族を設定し調査して、その家族の構成を見る。例えば長男はウランバートルの市役所に勤めている、次男は工場に勤めている、長女は看護師さんをやっている、とか。あるいは三男は定職が見つからずふらふらしている、とかいろいろあるでしょう。

そして、その中から特定の家族を選び、家計としてどのぐらいの現金収入があって、支出がどうなっているのか。物価の変動も統計資料からを調べないと、歴史的な考察にはならない。結局、家族の構成と家計を詳細に見ていく必要があるのです。いろんなタイプの中から、Ａタイプ、Ｂタイプ、Ｃタイプ・・・と、その典型的なタイプを設定して、詳細に分析していく。

小貫先生　その時に大事なのは、国全体の状況。国全体で収入、支出はどうなっているのか。つまり、歳出、歳入はどうなっているか、その具体的内容を年々の変化を辿って見ていく必要がある。さらには、どんな新しい産業が生まれているのか。たとえば工業といっても食品加工業もあるし、カシミヤを作っているのもあるだろうし、自動車の部品を修理しているところもあるだろうし、そういうものを分類した統計があるかどうか調べてみる。国全体の大枠のあり方とウランバートル市だけの収入と支出。国の財源がどのぐらいあって、そのうちウランバートル市にどのくらい配分され、その他の地方へはどのようになっているのか。そもそもモンゴルは遊牧の国と言っているけれど、畜産品でどれぐらいの収入を上げているのか。鉱工業でどれだけ収益をあげているのか。税収はどうなっているのか等々、国全体について統計資料で調べることができるでしょう。

こうしたことを大きな枠組みとしておさえておかないと、モンゴルの国と人々の生活の実態は、正確につかむことはできないのです。

こう把握した上で、一番大事なのは最終的には、具体的で詳細な家族構成と家計ですね。そういうものをきちんと調査・分析し論文にまとめれば、それを読んだ人は理解しやすく、説得力がある。モンゴルの国と人々の生活は、今こんなふうになっているんだなあ、と。

エネビシ　10月13日から２週間帰国してきます。その時にそれを念頭において調べてきます。

小貫先生　インターネットでキーワードを入力して検索し、必要な資料を集め、準備しないといけないですね。国全体の産業構造、そして歳出、歳入。ウランバートル全体について、さらに地区ごとにも。特に自分が対象に調査している地区の詳しい状況。そういう枠組みを作らないといけない。大方針を

立ててこうしたものを調べた上で、先に述べた括弧つきの「地域」の内部を詳しく調べ分析して、こうなっていますよと、現地での調査をもとに細かいところまで書く。こういうやり方になると、研究は格段に深まっていくのです。

●時間の流れ、歴史の中で捉え考える

小貫先生　これら以外に、もう一つ大事なのは、『遊牧社会の現代』、『モンゴル現代史』を参考にしながら、時間の流れ、どういう歴史の中でこのような変化が起こってきたのか、という具合に。国の財政も、家計も。そうすると「あ、今のモンゴルの鉱工業を中心にしてやっているやり方でいいのだろうか」という疑問が出てくるわけです。「遊牧民や都市の労働者の家計は、ますます苦しくなっているんじゃないの」とか、「国の方は産業が上手くいっていると言っているけれど……」といった疑問。そうした考察がしっかりできるようにならないといけないのではないでしょうか。

[小貫先生の著書『菜園家族の思想　甦る小国主義日本』[3)]（かもがわ出版）から]

小貫先生　日本では2011年に起こった東日本大震災、これは時代を画する大きな出来事でした。いろんな問題が噴出してきて、その後も大変な状況になっている。原発も国民の切なる声を無視して再稼動することになっちゃったしね。だけどこのことをしっかりおさえておかないといけません。どういう問題がその根源にあったのか、ということをまずこの本のプロローグのところに書いてある。

3・11東日本大震災は、高度経済成長の延長線上に起こったと見るべきです。ただ単なる自然災害では決してない。家族が衰退し、地域が空洞化して、家族の力が、そして地域の絆が失われてしまったところに自然災害が起こったから、その被害がいっそう過酷なものになったと見るべきなのです。加えて原発による被害は、人災そのものと言うべきです。

これをおさえた上で、あらためて近代の淵源に立ち返って考える。というのは、近代というのはイギリス産業革命以来の資本主義の時代ですね。その淵源、つまり根源に立ち返って考えていかないと。この本では、なぜ近代に遡るのかという理由も書いています。

要するに、資本主義がどういう「かたち」で形成されたか、ということ。それでその中で19世紀のイギリスでは、いろんな捉え方が現れてきます。

太古の人間社会の共有、平等、自由の自然状態を歪めてきたものは、何であり、誰であるのかの疑念が深まれば深まるほど、やがてその考えが科学に転化していくのは、ごく当然の成り行きであったのです。むしろ、人間に本来的な基本的人権とは何か、自然と人間、人間と人間との関係を律すべき原則とは何か、資本主義経済のもとでの人間と自然の疎外や荒廃の原因は何なのか、その究明へとむかっていくのです。まさにこうした人類史の基底に脈々として流れる自然権にもとづく根源的な思想を受け継ぎ、19世紀初頭以降のイギリス資本主義の新たな発展と、こうした時代状況の中から新しい思想家、実践家が現れ、新たな思考が、思想が世界的にも輩出してくるわけですね。

特にイギリスでは、生産手段の共同所有に基づく共同運営という目標を掲げ、ニューラナーク、そしてアメリカ・インディアナ州でのニューハーモニーというコミュニティの実験がはじまるのです。これはロバート・オウエンという人が試行錯誤しながらも、結局は失敗に終わります。ソ連社会主義崩壊のはるか2世紀半ほど前のことでした。20世紀ソ連社会主義建設の失敗を先取りしたものと位置づけられるものでした。

こうした人類史上の苦い経験から学び、19世紀の後半になって、新しい思想と理論が出てきます。

3）『菜園家族の思想 ―甦る小国主義日本―』（小貫雅男・伊藤恵子、かもがわ出版、四六判・384頁、2016年）

それがマルクスの経済学研究とその集大成である『資本論』です。これによって、資本主義経済の原理が、その内部矛盾やその歴史性と合わせて体系的に解明され、その結果、古典派経済学のせまい限界をはるかに超えて、歴史科学としても優れた経済学の原理論が確立されたのです。それではマルクスは、未来社会をこの時代にどのように構想したのか。その基本は先と同じく、生産手段の社会的規模での共同所有を基礎にした共同管理・共同運営であったと言って間違いないと思います。ソ連とモンゴルの社会主義体制は、このマルクスの未来社会構想を基本的には踏襲していたのです。

ところで、ここでまず、未来社会論についての今日における研究状況をある程度、知っておく必要があるでしょう。今日の大方の研究者は、資本主義の終焉(えん)を唱えながらも、それに代わる未来社会を提示しえないでいるか、あるいは未来社会については、まったく無関心であるか、それとも無関心を装っているか、あるいはまた革新的と言われている大方の研究者も、結局、19世紀のマルクスの未来社会論に基本的には依拠し、その枠内にとどまっていると言ってもいいのではないでしょうか。このことをまずはじめにおさえておきたいと思います。

そこでここからは、マルクスは未来社会をどういうふうに考えていたのか、ということを考えていくのですが、未来社会論そのものに限ってはマルクスが遺した具体的な叙述は、余りにも少ないのです。ごくわずかにしか書かれていない。系統的、体系的には叙述されていないのですね。マルクス未来社会論の基本となるものは、結局、生産手段の社会的規模での共同所有、これを基礎にした共同管理・共同運営が基本であったことは間違いないでしょう。

エネビシ　そうすると先生、モンゴルのネグデルはそうだったんですね。

小貫先生　そうそう。マルクス未来社会論の系統を基本的には踏襲していると言ってもいいのです。それで、社会的共有化理論というのはどのような成立条件のもとでできたのか、ということ。私たちの今の時代に、この19世紀の未来社会論をどういうふうに批判的に総括し、そのうえで正確に継承発展させるかということが、とても大切になってきています。モンゴルのネグデルやソ連も基本的には、マルクスの言っている社会的共有化論、つまり生産手段を社会的規模で共同所有して共同管理・共同運営するという、この19世紀の理論に基づいたものでした。20世紀に実践に移された社会主義体制の限界と欠陥は、既に19世紀の未来社会論そのものの中にあったんだということ、理論的にも。

だけど、マルクスが悪かったわけではなくて、今から2世紀ほども前の19世紀という時代状況の中で、必然的に生まれてきた問題なんですよ。このことだけは、公平にしかも正確におさえておく必要があります。この限界と欠陥を克服できず、20世紀になって、みんなこのことをはっきりさせないで、ソ連でもモンゴルでもやって来た。ネグデルもその理論に依拠してやってきた、ということなのです。このことをはっきりさせない限り、21世紀の今日、行き詰まり混迷を深め、のっぴきならぬ窮地に陥った私たちのこの社会そのものを、建て直すことはほとんど不可能に近いのではないか。こうした時代認識のもとに、この本を書いています。ここから本論に入るわけです。

さて、20世紀の私たちの社会は、一体どのような状況下に置かれていたのでしょうか。市場経済、そして地球を丸ごと席捲するグローバル市場経済がますます隆盛になり、民衆の生活は徹底的にその荒波に翻弄されていきます。これに対抗するためには、民衆はどうすればいいのか。今日、このことが民衆にとっての最大の課題となっているのです。それは、私たち自身が、私たちの生活の場である「地域」そのものを、そして私たち自身を主体的にどう変えていくか、という問題なのです。結局それは、自らを抗市場免疫の体質につくりかえていくことです。これこそが、21世紀民衆に負わされた最大の

課題であり、最大のテーマなのです。

だから今こそ、この考えを基本に据えて、19世紀のマルクス未来社会論に代わる、21世紀の私たち自身の草の根の未来社会論を探究していかなければならないのです。そのためには、従来の歴史観に代わる、21世紀の新たな歴史観に基づく新しい思考、新たな研究方法を編み出していく必要があるのでしょう。これからの21世紀未来社会論に欠かせないものは、「地域研究」の視点なんだということ。社会をトータルに把握し、未来社会を全面的に構想するためには、狭い従来型の「経済学」だけではだめだということ。そこで、21世紀の未来社会を構想するためには、新たな「地域研究」の視点、つまり民衆の草の根の地域未来学研究[4)]の確立がどうしても必要になってきます。このことをこの本では強調しています。

さて、この本の第2章からですが、そこでは、私たちが生きている時代はどんな時代であるのか、このことを日本の現実から出発して述べています。日本の現状は、まさに「いのち削り、心病む、終わりなき市場競争」。民衆は市場に振り回され、苦しんでいる。こんな時代になってしまったのです。こうした中で、家族は疲弊し、いよいよ衰退していく。

日本の高度経済成長は、1955年頃からはじまるのだけど、それ以前の日本の暮らしはどんなものだったのか。日本列島を縦断する脊梁山脈を源に発する森と海を結ぶ流域地域圏が形成され、そこでは流域循環型の大小さまざまな地域が息づいていた。森の幸は川下へ運ばれ、平野部の幸は川上へと運ばれていった。森の木材とかキノコなどの物資は川下へ、平野部のお米や野菜などは奥山へと運ばれていった。こうしたモノとヒトの循環が成立していたわけですね。こんな時代も、戦後高度経済成長以前のつい最近まであったのですよ。

長いスパンで日本の歴史を見ると、確かに人々の暮らしの“場”は、森から平野への移行が一般的な趨勢なのですが、今日では森の方は過疎・高齢化が進み、家族や集落がどんどん消えていく。今や平野部の都市でも少子高齢化が進み、介護問題などもますます深刻になっている。その上、経済も低迷し、日本は今や修復不能に陥っている。みんなそれに気づいていないんだけどね。あるいは怖いから知らぬふりをしているのかもしれない。こんな時代だからこそ、「家族」と「地域」の問題から出発して、社会全体を深くトータルに考察していくことは、とても大事になってきているのですね。「家族」と「地域」のメカニズムをその原理から考えていく。この本では、こうした方法を探究しているのです。

ですから今日の社会再生の鍵は、「家族」と「地域」であり、これを基軸にして考えていくことです。もちろんある時には「経済学」の側面からも考えることも必要でしょう。しかし、社会の根っこの基盤の体質そのものが腐りきってしまった時、まず手はじめにすべきことは、社会の基盤である「家族」と「地域」からどうやって修復するかである。これを抜きにして、社会の歴史的変化の決定的な要因が唯一経済にあるとする硬直した経済決定論の観念に囚われ、従来の細々とした「経済学」のうわべだけの手法をそこにいくら施しても、それはまったく徒労に終わらざるを得ないことは分かるはずです。

目先の枝葉末節にとらわれずに、今あらためて根源的に考えなければならない時にきていると思います。人間とは何なのか、家族とは、地域とは何なのかということを。そうしないことには、21世紀の本当の草の根の未来社会構想は生まれてくるはずがない。そこでこの本では、21世紀の未来社会構想、すなわち「菜園家族」構想を基礎に、新たな経済・社会のあり方を模索し、提起しているのです。

4）『静かなるレボリューション ― 自然循環型共生社会への道』（小貫雅男・伊藤恵子、御茶の水書房、2013年）の「未来社会論に欠かせない地域研究の視点 ― 新たなる地域未来学の確立」132-135頁をぜひお読みください。

「菜園家族」と同じく、家族小経営である「匠商家族」についても、この構想では大切な一翼を担っているので、これとの関連でも述べています。「匠商家族」には、小売業をしている家族もいるでしょう。あるいはレストランや喫茶店や食堂などをやっている家族もいれば、手工業をやっている家族もいるわけです。こうした家族は、大都市だけではなく、森と海を結ぶ流域地域圏の中核に当たる地方の中小都市でも生活しているのですよ。この辺りで言うと小さな城下町彦根みたいな。

モンゴルの都市部でも、そこに住む家族はどんなふうに生計を立てているのか。 手工芸をやっている家族もいれば、商売をやっている家族もいる。そういう家族の実態を知るとともに、これからのあるべき姿を考える必要があるでしょう。

「菜園家族」を基調とするＣＦＰ複合社会については、この構想の核心的肝とも言うべきものであるので、特に注目してもらいたい。資本主義セクターをセクターＣ（Capitalism）、家族小経営セクターをセクターＦ（Family）、公共的セクターをセクターＰ（Public）とし、この３つのセクターによる新しい複合社会をＣＦＰ複合社会として構想しています。セクターＦは「菜園家族」や「匠商家族」。セクターＰは公共的な経営体や組織、公的な機関です。たとえば協同組合や、地方自治体の公営企業や国営企業も含まれます。ＣＦＰ複合社会が進展していくにつれて、家族小経営セクターＦが繁栄増大へとむかい、これに伴って資本主義セクターＣは漸次縮小、消滅し、遠い未来にはＦ、Ｐ二つのセクターからなる高次自然社会へと到達していくのです。人間が自然に溶け込み、人々が笑顔で自由に暮せる新しい社会が生まれてくる。大まかに言うとこういう展開になっているのです。特に、賃金労働者の生存形態が「菜園家族」や「匠商家族」など家族小経営への転換がすすむにつれて、なぜ資本主義セクターＣが漸次縮小・消滅へとむかうのか。その詳しいメカニズムについては、『菜園家族の思想』の第八章 ”「菜園家族」の台頭と資本の自然遡行的分散過程 ” を後で、じっくり読んでみて下さい。

［小貫先生の著書『モンゴル現代史』[5]（世界現代史４　山川出版社）から］

小貫先生　これは1993年に書いたものです。モンゴルでは社会主義のネグデル体制のもとで、1980年代末に家畜頭数の増加が停滞してしまう。1960年代、70年代は順調に増加していったのが、80年代の末期になると増えなくなって来た。その大きな原因として僕が考えているのは、結論から言うと、結局、本物の民主主義の欠如に尽きるんだと思っている。それを克服するには、個人の中に宿る創意性を引き出し、それを最大限に活性化し、社会生活の全分野において生き生きとした生命を甦らせるための、具体的かつ創造的なシステムの構築が大切だと考えているのです。

この本をまとめた1990年代初頭とは、世界全体から見ても、ソ連が崩壊し、やがてアメリカが後退していくについて、世界は全般的に「国家」の時代から「地域」の時代へと移行する可能性を秘めていた時代でもあったのです。こうした時代において求められていたのは、民主主義を単に形式的に捉えるのではなく、人格解放へと全面的に展開していく中で、個人の確立を可能にしていくことであったのです。そのためには、人間の生活、そして生産の場でもあり、人間を育む場としての「地域」の構築が重要になってくるのです。硬直した旧社会主義体制が崩壊した当時、その可能性が現実のものになりつつあったことを、ツェルゲル村の遊牧民たちの自主的な地域再生の模索を踏まえて、この本『モンゴル現代史』は描いたのです。そして何よりも、それを「家族」と「地域」の問題として捉えています。

この本の基軸に、なぜ「家族」と「地域」を据えたのか。そして、なぜ「家族」と「地域」を中心にして考えていかなければならないのかということなのです。これはかなり以前から、モンゴルの遊牧地域

5）『モンゴル現代史』（小貫雅男、山川出版社、四六判・336頁、1993年）

の調査研究の中から汲み取ってきたものなのです。思いつきで偶然に「家族」や「地域」を取り上げているわけではありません。

エネビシ　モンゴルの場合、1990年代以降、ただちに日本と同じではないけど、牧畜を重視しなくなってきた。鉱山開発を中心にしていくなかで、地域も解体されてきたんだというふうに。それで、日本の場合と何か共通性があるのではないかと。そうすると、日本の高度経済成長以降に、地域がどのように衰退していったのか？それを地域の方から乗り越えて、どのようにしてそれを取り戻そうとしているのか？を見る必要があるのではないかと思ったのです。

小貫先生　日本とモンゴルの共通の問題としてエネビシさんの考えていることを、現実のうえでも、理論的にも詳しく述べていく場合に、この本や『菜園家族の思想』を読むとその肉付けができるのではないではないでしょうか。

●菜園家族

エネビシ　モンゴルの場合、今人口の半分以上が、定住地域に集中してきている。ウランバートルだけでなく、県の中心地とか、定住地への移住が進んでいる。そこで新しいタイプのコミュニティができていくのはこれからだと思うから、その時に何を強みにしたらいいのかということが、またひとつ、課題なのです。

小貫先生　日本の問題として考えるならば、基本的には、「菜園家族」という概念はどういうものであるのかということ。「菜園」というのは、自己にとって生きるに最低限必要な小規模な畑や田んぼを指しています。それを基盤にした家族ということ。

ところで、権力の強制による今の日本の経済のあり方、その中での農業の現実を考えると、農業だけではやって行けないから、ほとんどの農家は週に５日間、会社などに勤めながら賃金を得て、残りの土・日の２日間で農業をこなしている。これを一般に兼業農家、あるいは土・日農業といっているのですが、これでは前向きで創造的な楽しい農業など望むべくもありません。土・日曜だけでは田畑の仕事をこなせないから、トラクターやコンバインなどを買う。その農業機械がものすごく高い。そのほか化学肥料・農薬やガソリン代とか費用がかさみ、今の農業は赤字になってしまうわけです。これでは日本の農業の未来はありません。耕作放棄地は増える一方で、広大な山林は荒れ放題だ。集落は崩壊し、空き家は放置されたまま。ですから、このままでは、若者に帰農を勧めても無理です。

こうした無駄をうまく活用しながら、都市から農村への移住を本気になって地方自治体や国の政策として促していくべきです。人口を大都市へ集中させるのではなく、自然豊かな国土に分散して、それぞれが楽しく豊かに暮らしていく。その具体的な方法が、週休（２＋α）日制（但し、$2 \leqq \alpha \leqq 4$）の「菜園家族」型ワークシェアリングなのですよ。週の何日か、２日か３日、会社に勤め、それ相応の賃金を得て、その賃金プラス自己の田畑で育てたもので生活すればいいのです。自分の自由な楽しい時間を取り戻し、自分らしい暮らしの基盤を築き上げながら、それぞれが多様な自己を実現していくのです。こうした中で、大人も子供もお金儲けばかりにあくせくすることなく、豊かに人格は形成されていくのです。

エネビシ　そうですね。私も、日本のテレビみたら何かおかしくなりそうで。犯罪ばかり出てくるから。

小貫先生　このままでは人間の精神がますます劣化していく。衰えていく。こうした中から極端なケースが生まれ、異常な凶悪犯罪へと追い込まれていくのです。それは、なんでだろうか。結局、人

間が大地から離れてしまったからです。山村や農村でも少子高齢化が進み、今は70代、80代のお年寄りが農業をやっている。若者は都会に出て、うわべだけのオシャレをせっせとして浮かれている。

エネビシ　モンゴルでも、都会では外国の有名ブランド店が次から次へとできて。今のモンゴルでは借金を抱えていない家族はいない。マンションのローンとかそれぞれあって、どうやって返すかということに精いっぱいで、自治とか地域のことなど関心をもたないし、田舎だったら遊牧民も家畜を担保にして銀行に借金している。

小貫先生　「菜園家族」構想は、まさに人間が根なし草になった状態から、もう一度、大地に根ざした素朴で精神性豊かな暮らしの基盤をとり戻そうという考え方なのです。

エネビシ　本来モンゴルはそういうはずだったのに、今は逆の方向にきていて、人の精神も変わってきているし。あまりにも物質的なものを求めすぎる。でもそれでは駄目だという考えも出てきている。今は分断されているような気がする。現状に疑問を持つ人もいるが、どうしたらいいのかわからない。一方で、モンゴルは遅れていると考えている人もいる。何でアメリカや日本のようにしたらいけないのかと。

エネビシ　社会主義もぜんぶは悪くなかった。特に協力とか、みんなで得た利益を平等に分配するとか。そこを今もう一度見直し、どうやって取り入れるか考え直す必要があるのではと。

小貫先生　「分配」のことを日本では「ばらまき」とも言うんですよ。国民の不満に対して、「選挙」でばらまきをやるんですよ。巨大公共事業などを都市や地方で具体的に「こうします」と、「選挙」で公約する。それにつられて票を入れるわけです。目先のあめ玉をちらつかせるのではなく、本当はこの国の遠い将来を見据えた政策を提示し、議論をたたかわせるものであるべきですね。

根なし草になった人たちには、ちゃんと自立していける基盤そのものを保障することがまず何よりも大事なのです。広い意味での「菜園家族」的インフラですね。そのための法制を整えていくことです。このまま放置すれば、農家そして農村の集落は消滅していきます。最近では、農村だけではなく大都市においても、老老介護など深刻な問題が続出してきていますね。エネビシさんたちも、日本の新聞などの報道で目にしているでしょう。一見、大都会の賑わいからは想像できないのですが、日本の現実は極めて深刻なのです。

こうした深刻な事態に目を向けず、大企業を優遇し、軍拡に多額のお金をつぎ込むこの国の政治とは、一体何なのでしょうか。

基本的、本質的にはモンゴルの状況も同じではないでしょうか。モンゴルはモンゴル独自の道がひらけていくはずです。その道を探究することが、エネビシさんたち若い研究者の課題なのです。決して臆せず研究を重ね、どんどん提案していくことですね。

エネビシ　この本の中で先生は、19世紀東部モンゴルのト・ワン・ホショーのことを取り上げています。時代、時代へと引き継がれているんですね。ト・ワン・ホショーの事例も、盟長から自立した地域の運動で、そこに住んでいる人々が何を望んでいるかということ、それが実はある意味では、今日までつながっているんですね。

小貫先生　19世紀前半の時代のト・ワン・ホショーでやったこと。改良的なト・ワンという領主が、今から思うと実に目を見張るようなさまざまな創意工夫を試みたのですね。牛を改良したり、小学校を作ったり、小麦を栽培し製粉工場を作ったり、手工芸なども奨励したり。モンゴルの封建時代にあって、そういうしたたかな事業が現実にあったのですよ。

ところが、それがボグド君主制国家（ボグド・ハーント・オルス）に引き継がれたものと、引き継ぐことができなかったものがあった。ボグド君主制国家では、議会まで設立する。それも上院、下院の二院制。それはヨーロッパの近代的な制度をいち早く取り入れようとしたのですね。こうした先進的な側面もあった。しかしこの国家は、ある意味では、清朝の冊封体制の中にあって、限界があったわけですよ。当時としては先進的な側面もありながら限界があったのは、その本質が封建領主の連合体の権力によるものであったので、当然とも言えます。仮に遊牧民の新しい政権であれば、上から目線ではない、本物の草の根の民主主義の可能性は大きくひらかれていたかもしれない。しかし、そうではなかった。

21世紀の今日の時代において、遊牧民の「家族」、ホタ・アイル共同体、「地域」へと至る地域基盤の中で、本物の草の根の民主主義の土壌が形成され、より上位の民主的政府の実現へとつなげていく。それには非常に長い時間がかかるけれども可能であり、かつ、忍耐の要るこの長いプロセスは絶対に必要だということを歴史の経験が教えてくれているのです。

エネビシ　そういう民主主義の伝統、「未発の可能性」がモンゴルにもあったということですね。

●団粒構造

小貫先生　本来、どんな人間でも、人間には不公正を嫌がる意識が強烈にある。人間には本来、平等を要求する意識というものが自然なものとしてそなわっているのですよ。民主的なものへの欲求、人間の本来的な平等への欲求、それを制度的にどう結実させていくかという組織論の問題として探究していけばいいのです。これは、今日切実に求められている大きな課題なのです。

このことを「団粒構造」という土壌学で言うところの言葉を使って説明すると分かりやすくなりますよ。

粒（つぶ）と団子。粒は個々人です。ここに具体的なひとつの家族を想定しましょう。家族は父と母、子供、祖父母のそれぞれの粒（つぶ）から成り立っています。家族もこのように個々人の粒（つぶ）から成り立っている団粒なのです。したがって家族は第１次元の団粒。次に、この家族が３つとか４つとか集まると、日本で言う「くみ」になる。モンゴルで言うとホタ・アイル хот айл です。ホタ・アイルは、したがって第２次元の団粒にあたります。次にこのホタ・アイルがいくつか集まると、ヘセッグ хэсэг 日本で言う村という第３次元の団粒が生まれ、こうして地域団粒構造が重層化されていく。この第３次元の団粒ヘセッグ хэсэг 村がいくつか集まると、郡すなわちソム сум になり、これが第４次元の団粒になる。この郡すなわちソム сум がいくつか集まると第５次元の団粒アイマック аймаг すなわち県となる。さらにこのアイマック（県）がいくつか集まると第６次元の団粒ウルス улс（国）となるのです。このように１次元、２次元、３次元、４次元、５次元、６次元と、地域団粒構造はいっそう重層化していきます。

このように地域の構造の展開過程を見てくると、一番基礎的で大事なのは、第１次元の団粒の「家族」なのですよ。モンゴルでは、家族の成員はとても仲がいいですね。何かあったらみんな集まって来て、協力し合ったり、楽しんだりするでしょう。それはなぜか。いつも広大な厳しい自然条件の中で生きるために頑張っているからです。これが大事。

でも、一家族だけでは生きていけません。なぜかというと、モンゴルの自然はある時には死に至るほど過酷なまでに厳しい。家族と家族が共同しなければ生きていけないからです。だから、第２次元の団粒であるホタ・アイルは不可欠なのです。

さらにホタ・アイルだけでできないことは、もっと上位の大きな団粒、第３次元のヘセッグ（村）や第４次元のソム（郡）でやることになるのです。村のレベルだったら小学校の分校ぐらいは置けるよ、という話にもなってくる。

地域団粒構造は、さらに上位の次元へと多重・重層化していく。郡が集まると県になるのですね。国というのは、この県がいくつか集まって形成されるのです。これを地域団粒構造の多重・重層化の展開過程と名付けています。まさにこれが、草の根民主主義が育つ土壌になるのです。ここではじめて、本物の民主主義が生まれてくるわけです。

家族の中でも、話し合わないと仕事にならないでしょう。ホタ・アイルもそうです。話し合いがなくてそれぞれが勝手なことやったら、「それはいかんぞ」とか、「ああしよう」とか「こうしよう」とか、議論がはじまるのです。生きていくために、生活と生産に根ざした話し合いが必ずはじまるのですよ。

「話し合い」、これが民主主義の源泉であり根源なのです。これがなかったら、民主主義は空想と化して死んでしまう。これがないところで形式だけを整えて「選挙」をやったんじゃ、それはお任せの嘘っぱちの民主主義になってしまうに決まっている。だから、社会の基底部にこうした地域団粒構造が生まれてこないと、民主主義は衰退し死んでしまう。これには時間がかかりますよ、一気にはできません。5年、10年、20年、50年と苦闘の歴史を重ねながら、本物の民主主義は育まれ、花開いていくのです。

エネビシ　モンゴルの伝統的な社会の中には民主主義が生まれ、育つ土壌がある、ということが先生の論文などで語られてきている。先行文献として。こういう歴史や背景があるから、今度は新しいタイプのコミュニティが出来ていく中で、基本にはこうした地域団粒構造がないといけない、ということですね。

小貫先生　これはモンゴルだけじゃなくて、日本の場合についてもそうなんです。これは自然界の生成・進化の原理、法則なんですよ。団粒構造というのは土壌学の理論です。土の学問。さらさらとした砂は単粒構造で、植物が育たないのです。雨が降っても、サーと一気に洗い流されてしまう。栄養分もここには溜まらない。団粒構造になると、団粒と団粒の間に隙間がいっぱいできて、その隙間には水分や空気や養分がたくさん含まれる。酸素がないと微生物は繁殖しないでしょ。隙間では微生物がいろんな有機物を分解し、土の中のさまざまな生き物の栄養になるわけです。団粒構造のふかふかとした土というのは、栄養分が豊富で植物がよく育つ。この団粒構造の土の中では、微生物からみみずなど小さな生き物に至るまであらゆる生き物がそれぞれ自分が生きるために個性あるやり方で自由に生きながらも、結果として土はふかふかとした植物がよく育つ豊穣な土壌に仕上がるのです。だから、豊かな地域団粒構造の社会では、人間も同じようにのびのびと豊かな人格へと育っていくわけです。

このように、人間社会においても自然の哲理、自然の法則は貫かれていると見るのです。このことは頭の中で考えたことじゃなくて、自然そのものがそうなっているということなのです。

土壌学で言うところの団粒構造も、実は、宇宙や極小の世界の“場”に似せて、多重・重層的に作り上げられたものではないか、と考えられます。つまり、自然界の摂理とも言うべき「適応・調整」の原理が、自然界の中での次元はかなり異なっているものの、土壌の世界においても貫徹し、具現化されたものではないか、ということなのです。あるいは、むしろ団粒構造そのものが、土壌に限らず、分子や原子や素粒子などの極小の世界から惑星など宇宙の極大の世界に至る、あらゆるレベルにおいて現れる“場”の普遍的構造である、と言っていいのかもしれません。

ところで、仮説としての「適応・調整」の原理は、生物複雑系科学の第一人者であるアメリカのスチュアート・カウフマンが唱えている「自己組織化」の原理と、奇しくも本質的な部分で重なるところが多いことに驚かされています。ただし、ここでは、自然観と社会観の分離を排し、両者合一の思想をすべての基礎に置く立場からすると、「適応・調整」の原理は自然界のみにとどまらず、人間社会にも敷衍して適用される普遍的原理であるとしている点が、大切なミソになっているのです。

小貫先生　自然界はもともと団粒構造で成り立っています。ところが、人間社会だけはその中にあってそれに反する方向に向かおうとしているわけです。だから、自然界の法則とぶつかってしまう。人間社会はまさにがん細胞みたいなもの。別次元の原理、論理で生成・進化しようとしている。だから宇宙全体の中で、地球上の人間社会だけががん細胞のように異常発生し、増殖と転移を繰り返しているのです。人類の社会は悪性のがん細胞なんですよ。だから将来、人間の社会を本来の正常なものに戻そうと思ったら、自然界の生成・進化の普遍的原理に合わせて「団粒構造」につくりかえていかなければならない。これは、人間社会をこの哲学的立場から根源的に捉え直そうとする試みなのですよ。だから、いい加減に思いつきで勝手に団粒構造にすればいいと言っているのではなくて、私たちの自然界、宇宙そのものが団粒構造で成り立ち、出来上がっているということなのです。

自然界の中にあって、人間社会だけがまったく別次元の原理、すなわち「指揮・統制・支配」の特殊原理によって生成・進化を成し遂げようとしているその根源的な理由については、『菜園家族の思想』の第三章「人間はなるげくして人間になった－その奇跡の根源に迫る－」をじっくり読んでください。同時にこの第三章では、「菜園家族」構想、つまり21世紀の未来社会構想としての独自性と優位性はどこにあり、それを決定づけている根底にある考え方は何なのかについても、人類史における「家族」のはたす根源的な役割とその意義の側面から考察し述べています。

ところで、「適応・調整」の原理については、「菜園家族」構想、つまり21世紀の未来社会を構想するうえで、肝の核心部分に当たるものなので、あと少しだけ付け加えておきましょう。

物質あるいは生命のすべての存在は、それぞれが分子や原子やさらには小さい素粒子の「極小の世界」から、生命世界のＤＮＡや細胞核や細胞、そして生物個体から生態系への一連の生命系、さらには惑星や太陽系や銀河系など宇宙の「極大の世界」に至る遠大な系の中の、いずれかのレベルの“場”に位置を占めています。これは、「自然の階層性」と言われているものですが、物質あるいは生命のすべての存在は、素粒子よりもさらに深遠な量子エネルギーのレベルで働く共通の広大無窮の“場”にあって、しかも宇宙や自然界の多重重層的な“場”の構造のそれぞれのレベルの“場”において、外的環境の変化に対しては自己を適応させようとして、自己を調整し、自己をも変革させようとするものなのです。

つまり、この宇宙の量子エネルギーの広大無窮の“場”にあって、物質あるいは生命のすべての存在には、究極において何らかの首尾一貫した統一的な“力”が絶えず働き、貫かれていると考えられるのです。自然界の摂理とも言うべき、まさにこの統一的な“力”こそが自然界の生成・進化のあらゆる現象の深奥に潜む源であり、これが宇宙や自然界のあらゆる現象を全一的に律する「適応・調整」の普遍的原理なのです。

これは先にも触れたように、生物分子学のスチュアート・カウフマンの「自己組織化」の原理と奇しくも重なる部分が多いのですが、いざこの「適応・調整」の原理を人間社会の問題にまで敷衍して適用するとなると、その重大な意義については、日本の研究者はなかなか理解しないのが現状ではないで

しょうか、今のところは。

エネビシ　これは人間社会の形成の問題ですが、これを見ていくには、ただ経済学とか社会学とかだけでなく、広くいろいろな学問の領域から見ていかないといけない。

小貫先生　今の問題は、経済学は経済学の範疇だけにこだわり、それのみで人間社会すべてを処理し解決しようとするか、あるいはそれが可能だと思い込まされているからですよ。しかし、人間社会はきわめて複雑で、「経済学」の論理だけで動いているわけではない。そこには自然があり、人間社会があり、その基底には「家族」や「地域」があり、そこでのさまざまな要素が絡み合い、複雑、有機的につながりながら動いているのです。そこには、経済の論理だけでは処理できない動きがある。もちろん、ある時、ある面では「経済学」の論理は必要だし、有効でもある。しかし、こういう社会に対する包括的な基本的考え方が欠落しているから、「経済学」はたかだか10年先の予測すら当たらないのです。ましてや人間社会を歴史的に、そして多面的、全一体的に把握しなければならない未来社会論となれば、21世紀の今日に至っても、まったく五里霧中のただ中にあるのも至極当然のことなのかもしれませんね。

だからなおのこと、今日の社会の不条理に苦しむ若者こそが、そこに挑む生きがいを感じてほしいのです。それは、自らを「研究者」という狭い枠にはめ込むことでもない。21世紀を生きるひとりの人間として、自らのすすむ人生の指針を自由自在に考え見出していくことであり、まさにそれは、生への飽くなき根源的な営為とも言うべきものです。それが成しえた時、人間としての本当の喜びがこころの奥底からひたひたと満たされてくる自分自身がそこにいることに気づくはずです。

●未来に向かって提案する

小貫先生　ここでは広い意味での「社会科学」の研究者についてですが、研究者は未来に向かってどういう提案ができるのか。まず何よりも、過去の権威に囚われずに、具体的な現実世界から出発すること。研究者は、社会変革の未来への道筋を具体的かつ大胆に提示していくこと。混迷している21世紀の今だからこそ、特にこのことを強調したいのです。

若い人たちはどうしても都会的な目新しい文化、アメリカ発のうわべだけのライフスタイルに憧れ、自分の足元から崩れていく現実に気がつかない。気づくと不安だから気づかないふりをしているのかもしれない。そして、知らず知らずのうちにそっちに流されていく。しかし、研究者は、そして研究者に限らず人はみな遠い未来を見据えて、自分の思ったことを率直、正直に主張していかなければならない。そして、一人でも多くの人に伝えていくことです。それが研究者、そして人としての大切な一つの使命だからね。

言ったからといって、すぐ世の中は変わるわけじゃないけれども、そういう自分自身の考え方を言い続けることが大事。それをやるかやらないかによって、何年か経った後にきっと大きな違いが出てくるはずです。納得する人も時代の流れの中で必ず現れてくるでしょう。多分、今のモンゴルの状況では、いろんなことを提案しても、すぐには「うん」とは言わないと思います。分かるでしょう。

エネビシ　でも今はちょっと危機感というか、これだと駄目だという緊張感が結構、高まってきている。これじゃなかったとか、民主化後に望んでいた社会というのはこれじゃなかったとか、騙されたみたいなと感じで。

小貫先生　民主主義ということの本当の意味は、先の団粒構造の中で言ったように、もっと深い意味があって、「選挙」で議員さんを地方議会や国会に送り出して、それでお偉い先生たちにやってもら

う。それは本来の民主主義とは違うんですよ。それはただ単に錯覚しているだけです。これほど嘘っぽい欺瞞の民主主義もないのです。本当の民主主義とは、どうやって自らの社会のあり方を先の草の根の団粒構造につくりあげ、その中で本物の民主主義を育てていくかなのです。そして、その原理を示さないといけない。その原理を示しつつ、具体的にモンゴルではこうやっていけるんじゃないかということを、都市の研究者や一般の市民だけでなく、遊牧民たちとも共に過去の歴史的経験を省みながら、いろいろと語り合っていくことですね。それは日本の場合についても、まったく同じです。

そことかここに限らず、むしろそれは、世界的な課題と言ってもいいのかも知れませんね。

エネビシ　いろいろ貴重なアドバイス、ありがとうございました。

（T. えねびし）

参考文献・資料

〈文 献〉

小貫雅男（1985）『遊牧社会の現代 ― モンゴルブルドの四季から ―』青木書店。

小貫雅男（1993）『モンゴル現代史』山川出版社。

小貫雅男（2001）『菜園家族レボリューション』社会思想社。

小貫雅男・伊藤恵子（2004）『森と海を結ぶ菜園家族 ― 21 世紀の未来社会論 ―』人文書院。

小貫雅男・伊藤恵子（2006）『菜園家族物語 ― 子どもに伝える未来への夢 ―』日本経済評論社。

小貫雅男・伊藤恵子（2008）『菜園家族21 ― 分かち合いの世界へ ―』コモンズ。

小貫雅男・伊藤恵子（2013）『静かなるレボリューション ― 自然循環型共生社会への道 ―』御茶の水書房。

小貫雅男・伊藤恵子（2016）『菜園家族の思想 ― 甦る小国主義日本 ―』かもがわ出版。

小貫雅男・伊藤恵子（2018）『菜園家族レボリューション ― 日本国憲法、究極の具現化 ―』本の泉社。

〈映像作品〉

小貫雅男・伊藤恵子（1998）映像作品『四季・遊牧 ― ツェルゲルの人々 ―』三部作・全６巻、共同制作、大日。

プロフィール

小貫雅男（おぬき・まさお）

1935年中国東北（旧満州）、内モンゴル・鄭家屯生れ。

大阪外国語大学モンゴル語科卒業、京都大学大学院文学研究科修士課程修了。

大阪外国語大学教授、滋賀県立大学教授を経て、現在、滋賀県立大学名誉教授、里山研究庵 Nomad 主宰。

専門は、モンゴル近現代史、遊牧地域論、地域未来学。

著書多数（参考文献・資料参照）。映像作品に『四季・遊牧 ―ツェルゲルの人々―』三部作・全６巻がある。

トルガー・エネビシ（とるがー・えねびし）

モンゴル国フブスグル県生れ。

2002 - 2007年、モンゴル国立大学モンゴル語文化学部にてモンゴル・日本語文化専攻。

2005 - 2006年、日本留学、大阪外国語大学（旧）、日本語文化教育センターにて日本語文化研究。

2008 - 2010年、モンゴル国立大学言語学研究科、言語学修士取得。

2013.4. - -2014.3、日本留学。名古屋大学国際開発研究科国際協力コース、研究生。

2014.4.1-2016.3大阪大学言語文化研究科言語社会専攻、博士前期課程修了。

2016.4～現在、大阪大学言語文化研究科日本語・日本文化専攻博士後期課程在学中。

職歴として、

2007. - 2010年、Gender Center for Sustainable Development, NGO, Citizen's participation program- "Green community", "Community Nutrition Center", "Citizen's participation in Community development", project coordinator。2007. - 2013年、"Gender and Women study" program officer。2010年から現在、Tolgoit Community Development Center, Board member "Gender and Women study" program officer。

修士論文：

「モンゴル人の自治の可能性と問題点ー定住地の事例から考えるー」(2016年)。

Issues of Tradition and Change of Gender Identity-Interpretation Based on Qualitative Survey on Proverb and Identity of Mongolian Women and Men (2010年)。

著書として、『「歯を守ろう」市民の健康教育のためのパンフレット』(2009年) ウランバートル、共著に「モンゴルにおける障害者女性に関する課題」サーベイ、『ジェンダー研究第1号』(2010年) ウランバートル、がある。

参考付録文書 ―≪インタビュー≫の総括にかえて

『静かなるレボリューション―自然循環型共生社会への道―』(小貫雅男・伊藤恵子、御茶の水書房、2013年) の本編「21世紀の社会構想」の「はじめに」126～135頁からの抜粋。

新たな地平を開く
草の根地域未来学の研究

たしかに20世紀は戦争ではじまり、無惨な殺し合いに明け暮れた時代であった。しかし、それでも20世紀は、戦争と革命の世紀ともいわれているように、絶望一色に塗りつぶされていたわけではなかった。イギリス産業革命の進展にともなう人々の新たな苦悩の中から、19世紀、人類は人間解放の壮大な理念と目標を見出し、それを理論と思想にまで高めた。20世紀、人々が貧困の苦しみと戦争の惨禍に喘ぎながらも何とか生きていけたのは、19世紀後半、人類が到達したこの崇高な理念と目標があったからではないだろうか。

しかし、人類のこの崇高な夢への実験も、20世紀の末には挫折し、夢ははかなくも破れた。そして21世紀をむかえた今、私たちは、人類普遍の理念と目標不在の、海図なき時代を生きていかなければならなくなったのである。

人間が明日を失った時、それがどんなに惨めなことになるかは、私たちが生きている21世紀初頭の今日の時代を見るだけでも十分に頷けるはずだ。人々は、欲望のおもむくままに功利を貪り、競い、争い、果てには心を傷つけ合う。国家も「正義」の名において戦争を煽り、多くのいのちを奪う。その醜い争いや残虐極まりない自己の行為を隠蔽し正当化するために、個人のレベルでも、国家のレベルでも、虚偽と欺瞞が世の中に蔓延していく。そして、この倫理喪失のスパイラルはとどまることを知らず、人間を苦しめながら深い闇の中へと沈めていく。これほど大がかりに、しかも構造的に人間の尊厳が傷つけられ貶められた時代も、ほかになかったのではないだろうか。

今、幼い子供たちは、その小さな心を痛め、声にもならない悲痛な叫びをはりあげ必死にシグナルを発している。

今こそ19世紀未来社会論に代わる私たち自身の21世紀未来社会論を

序編でも見てきたように、19世紀、時代の偉大なる思想家・変革者たちにとって、歴史観の探究とその構築（人類史総括としての歴史学研究）は、経済学研究の導きの糸であった。その意味で、歴史観の構築と経済学の研究は、紛れもなく車の両輪となっていた。

こうした包括的で全一体的（ホリスティック）な研究の成果から自ずと導き出された19世紀の未来社会論（生産手段の社会的規模での共同所有に基礎をおく共同管理・運営によって、資本主義の根本矛盾を克服し、未来社会を展望する）は、19世紀から20世紀に生きる人々にとって、それがどんな結末をもたらしたかは別にしても、時代の行く手を照らし出す光明となって、確かにある時期までは夢と希望と生きる目標を与え、現実世界をも動かす原動力となっていたことは間違いのない歴史的事実であろう。しかし、20世紀末のソ連、東欧、モンゴルをはじめとする社会主義体制の崩壊によって、そして何よりも19世紀未来社会論が提示された時代から百数十年という長きにわたる世界と社会の急激な変化によって、資本主義超克としてのマルクス未来社会論の限界と理論的欠陥は露呈することになった。

20世紀も終わり21世紀初頭の今、私たちは、３・11の巨大地震と巨大津波、東京電力福島第一原子力発電所の大事故という未曾有の大災害を境に、社会が大きく転換する時代の奔流のまっただ中に立たされている。精彩を失ったかつての19世紀未来社会論に代わる21世紀の私たち自身の新たな未来社会論を今なお探りあぐね、人々は、不確定な未来と現実の混沌と閉塞状況の中で、明日への希望を失っている。まさに今日、21世紀全時代を貫き展望するに足る未来像の欠如こそが、東日本大震災の被災地の復興のみならず、日本のすべての地域再生の混迷にさらなる拍車をかけ、そこに生きる人々を諦念と絶望にさえ陥らせようとしている。この地域の現実と労働の現場に気づかなければならない。私たちは、いつ止むとも知れぬ暴風雨の荒れ狂う大海を羅針盤なしで航海を続け、さ迷っているといってもいい。

手をこまねきそうこうしているうちに、現実は容赦なく進行していく。市場原理至上主義「拡大経済」のもと、生命の源ともいうべき自然は破壊され、人間生活の基盤となる家族と地域はいよいよ土台から揺らぎ、ついには崩壊の危機に晒されていく。生産力至上主義のもと科学技術と市場原理主義が手を結ぶ時、人間社会は止めどもなく暴走し、結局その行き着く先は人類破滅の恐るべき結末になるのだということを、何よりもフクシマは決してあってはならない自らの惨状をもって、私たちに警告したのではなかったのか。今こそ一刻も早く近代の「成長神話」の呪縛から解き放たれ、やがて来る未来のあるべき姿を確かなものにしなければならない。

19世紀未来社会論を克服し、21世紀の未来社会論としても同時に成立し得る「21世紀の社会構想」をいよいよ深めていかなければならない時に来ている。そして、何よりも今日の日本社会の行き詰まったこのどうしようもない現実から出発し、近代を根源的に超克し得る21世紀の新たな社会構想がこれほどまでに求められている時も、今をおいてほかにないのではないか。

新たな歴史観の探究を

こうした時代認識に立つ時、21世紀の新たな未来社会論の構築に先立って、今、何よりも切実に求められているものは、19世紀近代の歴史観に代わる新たな歴史観の探究であり、確立であろう。それはとりもなおさず、大自然界の摂理に背く核エネルギーの利用という事態にまで至らしめた少なくとも18世紀以来の近代主義的歴史観に終止符を打ち、21世紀の時代要請に応えうる新たな歴史観を探

究することであろう。そして、新たに構築されるこの歴史観と、そこから自ずと導き出される「地域研究」に裏打ちされた新たな「経済学」とを両輪に、21世紀の未来社会論は確立されていく。

大自然界の摂理に背く核エネルギーの利用に手を染め、恐るべき惨禍を体験するに至った私たちは、自然と人間、人間と人間の関係をあらためて捉え直すよう迫られている。それにしても、大自然界と人間社会をあらためて統一的に捉え直そうとするならば、宇宙、地球、そして生命をも包摂する大自然界の生成・進化を貫くきわめて自然生的（ナチュラル）な「適応・調整」（＝自己組織化）の原理（第十章に詳述）が、私たち人間社会にも、その普遍的原理として基本的には貫徹していることに気づかされるのである。

しかし、人類は大自然の一部でありながら、ある時点からは他の生物には見られない特異な進化を遂げ、ある歴史的段階から人間社会は、自然界の原理、すなわち「適応・調整」の普遍的原理とはまったく違った異質の原理、つまり「指揮・統制・支配」の原理によって動かされてきたことに気づかされる。人間社会の業の深さを思い知らされるのである。

今こそ広大無窮の宇宙の生成・進化の歴史の中で、あらためて自然と人間、人間と人間の関係を捉え直し、私たち人間の社会的生存形態を根源から問い直す必要に迫られている。そして、市場原理至上主義「拡大経済」下の今ではすでに常識となっている現代賃金労働者（サラリーマン）という人間の社会的生存形態とは、一体いかなるものであるのか、生命の淵源を辿り、人類史という長いスパンの中でもう一度、その性格と本質を見極め、その歴史的限界を明らかにしなければならない。現代賃金労働者（サラリーマン）という人間の社会的生存形態を暗黙の前提とする近代の思想と人間観が、当初の理念とは別に、現実生活において結局は人々をことごとく拝金・拝物主義に追いやり、人間の尊厳を貶め、人間の生命を軽んじてきたとするならば、今こそそれを根本から超克しうる「生命本位史観」ともいうべき21世紀の新たな歴史観の探究に着手しなければならない時に来ている。それはまた、人間社会を壮大な宇宙の生成・進化の歴史の中に位置づけ、それを生物個体としてのヒトの体に似せてモジュール化して捉えるならば、「社会生物史観」（本編第十章の項目「自然界の普遍的原理と21世紀未来社会」に詳述）とも言うべきものなのかも知れない。

この新たな歴史観に基づく未来社会論の探究は、まさに諸学の革新の大前提となるべき学問的営為であるが、その研究状況は、時代が求める切実な要請からはあまりにも遅れていると言わざるをえない。しかし、この営為を抜きにしては、今日求められている本当の意味でのパラダイムの転換はありえないであろう。特に時代の大転換期においてはなおのこと、社会理論の再構築は、具体的現実から出発し、抽象へと向かうものでなければならない。専ら抽象のレベルから抽象へと渡りながら、抽象レベルでの概念操作 ― 概念間の連関性や整合性のみの検証に終始し、それを延々と繰り返すだけでは、新たな時代に応えうるパラダイムの転換も理論も生まれるはずがない。

今こそ21世紀の具体的現実世界に立ち返り、そこから再出発し、何よりもまず21世紀の新たな歴史観の探究と構築に努め、それを導きの糸に、新しい時代の要請に応えうる広い意味での「経済学研究」、そして「地域研究」にあらためて取り組まなければならない。こうした努力の延長線上に、わが国の現実に立脚した、まさに21世紀私たち自身の草の根の未来社会論は再構築されていくにちがいない。

こうした問題意識のもとにここ十余年来提起してきたのが、この本編で述べていくことになる21世紀の草の根の未来社会論としての「菜園家族」構想、つまり市場原理に抗する「菜園家族」基調の免疫

的自律世界の構築であり、自然循環型共生社会への道なのである。

未来社会論に欠かせない「地域研究」の視点 ― 新たな地域未来学の確立

ところで、私たちが生きている現代社会は、分かり易く単純化して言うならば、「家族」、「地域」、「国」、「グローバルな世界」といった具合に、多重・重層的な階層構造を成している。最上位の階層に君臨する巨大資本が、あらゆるモノやカネや情報の流れを統御支配する。そしてそれは、それ自身の論理によって、賃金労働者という根なし草同然の人間の社会的生存形態を再生産するとともに、同時に社会のその存立基盤そのものをも根底から切り崩しつつ、この巨大システムの最下位の基礎階層に位置する「家族」や「地域」の固有の機能をことごとく撹乱し、衰退させていく。このことが今や逆に、この多重・重層的な階層システムの巨大な構造そのものを土台から朽ち果てさせ、揺るがしている。これが今日のわが国社会の、そして各国社会の例外なく直面している現実である。

人間社会の基礎代謝をミクロのレベルで直接的に担うまさにこの「家族」と「地域」の再生産を破壊する限り、人間社会のこの巨大な構造は、決して安定して存在し続けることはあり得ない。そうだとすれば、社会の大転換期にあってはなおのこと、経済成長率指標偏重のこれまでの典型的な「経済学」の狭い経済主義的分析では、こうした現代社会の本質をより深層からトータルに把握し、その上で未来社会を展望することは、ますます困難になっていくにちがいない。

私たちは今、このことに気づかなければならない。こうした時代の変革期に差しかかっているからこそなおのこと、現代社会のこの巨大な構造の最下位の基礎階層に位置する「家族」や「地域」から出発して、それを基軸に社会を全一体的（ホリスティック）に考察する「新しい地域研究」の必要性と重要性は、いよいよ大きくなってくると見なければならない。

では、そもそも「地域」とは、そして21世紀の今日の時代が求めている「新しい地域研究」とは一体何なのであろうか。今、あらためて考え直さなければならない時に来ている。

「地域」とは、自然と人間の基礎的物質代謝の場、暮らしの場、いのちの再生産の場としての、人間の絆によるひとつのまとまりある地理的、自然的基礎単位である。この基礎的「地域」は、「家族」によって構成され、多くは伝統的な少なくとも近世江戸以来のムラ集落の系譜を引き継ぐものである。人間社会は、「家族」、基礎的「地域」（＝ムラ集落）、さらには町、郡、県などいくつかの階梯を経てより広域へと次第に拡張しつつ、多重・重層的な地域階層構造を築きあげている。

人間とその社会への洞察は、とりとめもなく広大な現実世界の中から、任意に典型的なこの基礎的「地域」を抽出し、これを基軸地域モデルに設定し、多重・重層的な地域階層構造全体の中に絶えず位置づけながら、長期にわたり総合的に調査・研究することによってはじめて深まる。

現代は、世界のいかなる辺境にある「地域」も、いわゆる先進工業国の「地域」も、グローバル化の世界構造の中に組み込まれている。こうした時代にあって、自然と人間という二大要素からなる有機的運動体であり、歴史的存在でもあるこの基礎的「地域」を、ひとつのまとまりある総体として深く認識するためには、(1)「地域」共時態（シンクロニック）、(2) 歴史通時態（ダイアクロニック）、(3)「世界」（グローバルな）場という、異なる三つの次元の相を有機的に連関させて、具体的かつ総合的に考察することがもとめられる。こうすることによって、社会の構造全体を、そして世界をも、全一体的（ホリスティック）にその本質において具体的に捉えることが可能になってくる。やがてそれは、社会経済の普遍的にして強靭な理論に、さらには21世紀世界を見究める哲学にまで昇華されていく。地域未来学とも言うべきこの「新しい地域研究」は、こうして、21世紀の未来

社会をも展望しうる方法論の確立にむかうものでなければならない。

こうした主旨からすれば、本来、21世紀の「新しい地域研究」としての地域未来学は、諸学の寄せ集めの単なる混合物であるはずもない。だとすれば、それはまさに時代が要請する壮大な理念のもとに、自然、社会、人文科学のあらゆる学問領域の成果の上に、事物や人間や世界の根源的原理を究める諸科学の科学、つまり、21世紀の新たな哲学の確立と、それに基づく歴史観を導きの糸に、相対的に自律的な独自の学問的体系を築く努力がもとめられてくる。こうして確立される新しい地域未来学は、21世紀未来社会を見通し得る透徹した歴史観を新たな指針に、混迷する今日の現実世界に立ち向かっていくことになろう。

グローバル経済が世界を席捲し、「家族」を、そして「地域」を破局へと追い込んでいる今こそ、グローバル市場化への対抗軸として、何よりもまず、私たちの生命活動を直接的かつ基礎的に保障している「家族」と「地域」の再生をはかり、本来の人間のあるべき生活圏の構築を急がなければならない。そのために今、何をなすべきかが問われている。新たなパラダイムのもと、包括的で新しい地域未来学の確立と、「地域実践」の取り組みがもとめられている所以である。それは、時代のこの大きな転換期にふさわしい新たな「経済学」を包摂した新しい「地域研究」の確立であり、21世紀を見通し、あるべき社会の未来の姿を提示し、しかもそのあるべき姿にアプローチするより具体的な道筋を明確に示すことなのではないのか。

この探究の道のりは、たやすいものではないが、自然、社会、人文科学の諸分野の垣根を越えた真摯な対話によって、道は次第に拓かれていくにちがいない。このことは同時に、これまでの十余年にわたる「菜園家族」構想の研究をあらためて顧みて、今、私たちが直面している３・11後というこの時代に応えようとするものでもある。

（了）

〓 創刊 30 号記念特集〓

『モンゴル研究』第1号～第28号　目次一覧

創刊30号というこの機会に『モンゴル研究』第1号～第28号の目次を掲載します。

「なぜモンゴルか？」と自問自答し続けた大学生活4年間、その総括である渾身の卒業論文、あるいは修士論文、研究者としての第一歩あるいは研究途上の一作品、確立した研究者の論文、他の仕事をしつつ追求し続けた、研究心の発露の作品、貴重な翻訳作品や資料紹介、『モンゴル研究』において重要な位置を占める研究ノートや雑感、いろんな立ち位置で書かれた、いずれも珠玉の文章です。まだ在庫がある号もありますし、もしない場合でもコピー等で提供することができます。モンゴル研究会（e-mail: mail@mongolkenkyukai.jp）までご連絡ください。なお、26号からは電子版になり、モンゴル研究会 HP（http://mongolkenkyukai.jp/）でご覧いただけます。

No. 発行年	分類	タイトル	執筆者	掲載頁
第1号 1975年		創刊の辞	加納 重樹	1-2
	論文	アヨーシの牧民運動について	村井 宗行	3-17
	翻訳	「モンゴル文学概史」関連年表	(訳) 赤石 洋通	18-43
	翻訳	「暗黒政府」	ボヤンネメフ (訳) 上野 敏宏	44-65
	翻訳	「旧き子」	ナツァクドルヂ (訳) 芝山 豊	66-69
	翻訳	「ラマの涙」	ナツァクドルヂ (訳) 川上 郁雄	69-74
	研究ノート	モンゴルへの思想史的アプローチ	芝山 豊	75-84
	研究ノート	新たなる一歩	川上 郁雄	84-86
	研究ノート	モンゴル近代史研究の着眼点	加納 重樹	86-90
第2号 1976年		第2号によせて	芝山 豊	1
	論文	前期牧民運動の帰結	村井 宗行	2-40
	論文	ボヤンネメフ ―嵐のなかの帆船 ―	赤石 洋通	41-67
	論文	言語に於ける二つの型	芦本 滋	68-88
	研究ノート	モンゴル思想史へのアプローチ	芝山 豊	89-99
	研究ノート	チンギス汗帝国成立過程研究の視点	木道 直也	100-103
	研究ノート	東アジア世界の冊封体制	佐野 公則	104-105
	研究ノート	社会主義リアリズムへの視座設定の試み	上野 敏宏	106-117
	研究ノート	ユーモレスク	千載 正信	118-124
	翻訳	ソリを変えたもの	ダムディンスルン (訳) 中西 和隆	125-134
	翻訳	二人の息子	ダムディンスルン (訳) 千載正信	135-139
	翻訳	太陽の鶴	エルデネ (訳) 上野 敏宏	140-145
	翻訳	モンゴル語の音声上の一現象	ガルサン (訳) 谷 博之	146-150
	資料	「モンゴル文学概史」関連年表 ―その二 (1940～1955年) ―	(訳) 赤石 洋通	167-185
	翻訳	モンゴル僧院による牧民搾取の形態と方法 (上)	ナツァグドルジ (訳) 内藤 恭介	186-196
第3号 1977年	論文	アラトの思想 ― モンゴル近代化への思想史的視点 ―	芝山 豊	4-43
	論文	イェルール考	川上 郁雄	44-72
	論文	一九四〇・五〇年代のモンゴル	佐野 公則	73-102
	論文	モンゴルに於ける国家成立の過程	木道 直也	103-113
	研究ノート	モンゴル人名・地名その他モンゴル語のカナ表記について	谷 博之	114-123
	研究ノート	いざ、モンゴル社会主義へ！	内田 英司	124-127

第3号 1977年	研究ノート	インプロヴィゼーション — バダルチの作品をめぐっての小考察 —	千載 正信	128-138
	翻訳	香燭のともしび	Л. バダルチ (訳) 千載 正信	139-148
	翻訳	蓄音機	Ч. ルハムスレン (訳) 中西 和隆	149-153
	翻訳	花束	C. オドバル (訳) 林 扶美子	154-158
	翻訳	笑い話	Ж. ガル他 (訳) 三枝美穂	159-160
	書簡	12の手紙 — モンゴルの学生達から —		173-186
	研究紹介	回想録＝封建領主と闘い続けたアヨーシの歴史	(編) Ш. ナツァクドルジ (訳) 中根 毅志他	189-200
	研究紹介	モンゴル僧院による牧民搾取の形態と方法（下）	Ш. ナツァクドルジ (訳) 内藤 恭介	200-220
	研究紹介	「現代モンゴル文学概史」関連年表 — その三（一九五六～六五年）—	(訳) 赤石 洋通	221-243
第4号 1978年	論文	ダムディンスレンの「昨日」と「明日」	中西 和隆	2-29
	論文	モンゴル文学思案 — 啓蒙期の思想と翻訳小説 —	千載 正信	30-57
	研究ノート	モンゴルの昔話について	河口 美智子	58-61
	研究ノート	「言語学への道に立って	三上 喜美男	62-68
	研究ノート	日本とモンゴルの近代文学 — Д. ナツァクドルジの作品理念を手がかりにして —	織田 幸彦	69-74
	研究ノート	モンゴル共同体への一歩	吉本 周平	75-81
	翻訳	革命文学と革命的リアリズム	Ц. ハスバートル (訳) 赤石 洋通	82-95
	翻訳	冬と春の叙情	Д. ナツァクドルジ (訳) 織田 幸彦	96-97
	翻訳	ずる賢いおじいさん	(訳) 河口美智子	98-111
	研究紹介	翻訳・モンゴル人民共和国における社会科学	(編) И.Я. ズラートキン・С.К. ローシン (訳) 内田 英司	112-127
	研究紹介	1905～1907年のロシア革命のモンゴルへ与えた影響	Ж. デルゲルマー (訳) 芝山 豊	128-134
第5号 1982年	論文	ユルールのはたらき — 歴史民俗学的視座設定の試み —	川上 郁雄	4-42
	論文	モンゴル語文字表記の構造的研究 — その理論と概観 —	谷　博 之	43-96
	論文	モンゴル思想史研究への展望	松村 晴恵	97-133
	研究ノート	モンゴル人民義勇軍兵士像へのアプローチ	木原 晃子	134-137
	研究ノート	「Монгол ардын аман зохиолын дээж бичиг」に取り組むにあたって	井上るり子	138-140

第5号 1982年	翻訳	見知らぬ人からの手紙	П. ホルロー (訳) 鈴木麻里子	141-151
	翻訳	冬の森	С. エルデネ (訳) 赤石 洋通	152-159
	文献紹介	Д. ダシジャムツ著『モンゴルに於けるマルクス・レーニン主義の普及と実践(1917-1940年)』	町田 幸彦	160-162
	アプローチ	発展途上国社会構成体の移行と国家の性格 ―ケニアを事例として―	村井 宗行	163-173
	随想	モンゴルの日記から ―1978年　夏―	小貫 雅男	174-178
	随想	与謝野晶子とモンゴル	芝山 豊	179-182
	随想	風土と文化	小松 英介	183-184
	雑感	元気です	賀川 明	185-
	雑感	堅中楼閣嗚呼雑感	利守 和典	186
	雑感	何となく雑感	長岡 伸好	186
第6号 1983年	論文	モンゴル革命における民衆の役割 ―「モンゴル人民義勇軍兵士の回想録集」からのアプローチ	木原 晃子	4-26
	論文	モンゴル宗教思想史	渡辺 聡	27-44
	論文	モンゴルにおける民族と国家、その歴史的前提	小貫 雅男	45-83
	研究ノート	外来語からみたモンゴルの文化交渉	根岸 伸樹	84-94
	研究ノート	”中ソ対立とモンゴル”へのアプローチ	熊坂 光芳	95-101
	翻訳	住居	Г. ツェレンハンド (訳) 長岡伸好	102-106
	翻訳	モンゴル人民革命党とコミンテルン	С. ダムディンスレン (訳) 生駒雅則	107-123
	随想	長谷川四郎の作品を読んで	松村 晴恵	124-126
	随想	東海自然歩道自転車旅行報告	森永 誉	127-135
	雑感	老人ホームを慰問して	国司　薫	136
第7号 1984年	論文	牧民の訴訟運動とその思想	賀川 明	2-24
	論文	Д. ナツァクドルジ・ノート ―方法としてのモンゴルへの一つの試みとして―	芝山 豊	25-45
	論文	非資本主義発展論とモンゴル	村井 宗行	46-56
	論文	内モンゴル牧畜業における新スルク制の登場と問題点	安倍 治平	57-87
	研究ノート	モンゴル語の中の仏教語	根岸 伸樹	88-91
	研究紹介	БНМАУ дахь социалист нийгмийн хөгжлийн онолын судалгааны өнөөгийн байдлаас	М.Онүки	92-96
	アプローチ	発展途上国社会構成体の近代への移行(その2) ―タンザニアにおける社会主義への移行とその条件―	村井 宗行	97-107
	隋想	モンゴルの日記から ―1983年　ブルドの春―	小貫 雅男	108-111
	雑感	ラジオ・ウランバートルとモンゴル語放送	佐藤 暢治	112-115
	資料紹介	Дөрвөн аймгийн засаг хошуудын засаг ноёдын товч шастир	Ца.Шархүү	119-210

第8号 1985年	論文	人間と自然、そして遊牧 ― モンゴル人民共和国の場合 ―	今岡 良子	2-46
	論文	農牧漸移帯における食料専業農家 ー山西省雁北地区の大経営育成についてー	安倍 治平	47-52
	論文	モンゴルおよびシベリア・中国東北部の工業化	熊坂 光芳	53-72
	論文	「非資本主義的発展論」から「社会主義指向国家論」への理論的発展 ー社会主義への道をめぐってー	村井 宗行	73-77
	論文	D．センゲー「アヨーシ」(1946年)に描かれた日本人像	山口 幸二	78-87
	研究ノート	モンゴル口承文芸研究の展望	川上 郁雄	88-110
	研究ノート	ダグール方言の母音変化	佐藤 暢治	111-118
	研究ノート	Орчин цагийн монгол хэлний өгүүлбэрийн бүтцийн тухай асуудалд	Ч.Батсүрэн	119-122
	翻訳	夢で見た幻影	Д. ミャグマル (訳) 賀川明	123-127
	紹介	Б. Ｙａ. ウラジミルツォフ (1884－1931)	Kh. ルハグバスレン (訳) 根岸伸樹	128-130
	随想	モンゴルの旅から	鎌田 景吉	131-143
	随想	もうひとりのモンゴル人　ブリヤート民族の詩 ーソ連邦鉄道の旅1万2千キロからー	宇治 敏行	144-154
	資料	モンゴル人民共和国ネグデル模範定款	(訳) 井上るり子・賀川明・渡辺聡・吉本周平	155-170
	雑感	モンゴル研究と私の歩み、そしてこれから ー「モンゴルおよびシベリア・中国東北部の工業化」のあと書きの意味をも含めてー	クマサカ　ミツヨシ	171-174
第9号 1986年	論文	モンゴルの社会主義農牧業	渡辺 聡	2-16
	論文	アメリカのモンゴル近現代史研究の特質	村井 宗行	17-24
	論文	モンゴル人民共和国における女性の地位	宇治 敏行	25-41
	論文	"Bodhicaryavatara" モンゴル語注釈の特質(上)	根岸 伸樹	42-52
	論文	遊牧社会に於ける口頭伝承の社会的機能について ーベリック・デムベルリン・ウクを例に	川上 郁雄	53-67
	研究ノート	尾崎士郎とモンゴル	芝山 豊	68-71
	研究ノート	「プロジェクト実践チーム」研究＜活動＞ノート・1985	今岡 良子	72-82
	翻訳	父系クランとシャマニズムとの一関係 ー女シャマンの立場をめぐって	ロベルト・アマヨシ (訳)川上郁雄	83-93
	エッセイ	内モンゴル大草原滞在記	内田 敦之	94-98
第10号 1987年	論文	牧民運動と革命 ーモンゴル人民革命前夜(1911～1921年)における牧民運動の歴史的意義についてー	松村 晴恵	2-32
	論文	Монголын нүүдлийн мал аж ахуйн социалист өөрчлөлтийн зарим онцлог шинж, Түүний ач холбогдол ー Өвөрхангай аймгийн Бүрд сумын жишээн дээр	М.Онүки	33-38
	論文	モンゴルにおける人と馬の関係について	内田 敦之	39-50
	論文	"Bodhicaryavatara" モンゴル語注釈の特質(下)	根岸 伸樹	51-61
	論文	アメリカのエチオピア政策	村井 宗行	62--70

第10号 1987年	研究ノート	地域研究ノート・1986　過疎山村と農業	今岡 良子	71-80
	研究ノート	いわゆる『自治政府』の性格 －あるいは学説整理－	村井 宗行	81-85
	研究ノート	Монгол ардын зүйр цэцэн үгэн дэх гүн ухааны зарим санаа	Б.Лхагваа	86-90
	翻訳	ボルジギンの蒼き草原	Б. サグワスレン (訳) 賀川 明	91-97
	翻訳	羊飼いの労働時間	Д. トモルトゴー (訳) 寺岡良恵	98--107
	翻訳	「文化革命」と文化のゆくえ	Д. ダッシプレブ (訳) 松村 晴恵	108-- 111
	資料	モンゴル人民共和国労働法（上）	井上るり子・吉本 周平	112-128
第11号 1988年	論文	ネグデルをめぐる自然条件の特質 －日本の農山漁村からの視点－	今岡 良子	2-30
	論文	Өлсгөлөн ба хүрээлэн байгаа орчны эвдрэлийг даван туулах арга зам	М.Онүки	31-58
	論文	Мал аж ахуй	Б.Пүрэв	59-67
	論文	Хөдөө аж ахуйн нэгдлийн үүсэл хөгжил, түүний гишүүдийн ахуй амьдралын зарим асуудал	Г.Батнасан	68-75
	論文	БНМАУ-ын сангийн аж ахуйн зохион байгуулалт	Ю.Адьяа, Б.Эрдэнэбаатар	76-83
	論文	Theoretical Revision in " Non-Capitalist Development "	Muneyuki Murai	84-89
	研究ノート	モンゴル社会主義農牧業のゆくえ	寺 岡良恵	90-96
	書評	現代タンザニア研究の新しい潮流： Class Struggle in Tanzania by ISSA G.SHIVJI M.R.P. 1986	村井 宗行	97-102
	翻訳	谷苞「甘南チベット族自治州卓尼県木耳郷の調査報告」	(訳) 阿部 治平	103-113
	翻訳	Д. ダッシプレブ「社会比較についての研究ノート」	(訳) 松村 晴恵	114-116
	随想	冬の但東町・一九八八	藤原 俊介	117-119
	雑感	この一年	新納 智美	120
	雑感	はじまり	萱野 亜希代	120-121
	雑感	『時計のない保育園』を読んで	松本 典子	121-122
	雑感	お世話になった全ての方々へ	宮崎 悦子	122-123
	雑感	今思うこと	大畑 麻紀	123-
	雑感	一人の人間として	田淵 人司	123-124
	資料	モンゴル人民共和国労働法（下）	井上るり子・吉本 周平	125-142
第12号 1989年	論文	モンゴル人民共和国の社会主義的農牧業	寺岡 良恵	2-18
	論文	現代モンゴルにおける遊牧の位置とその社会主義的改造の諸問題	藤原 俊介	19-44
	論文	Мал аж ахуй - эдийн засгийн үндсэн салбар	Д.Дашпүрэв	45-49
	論文	Малыг таргалуулах үе шат, шинж тэмдэг, хариулга	Д.Батаа	50-62
	論文	Хот айлын суурийн эдийн засгийн асуудалд	О.Шагдарсүрэн	63-71
	論文	Орчин үеийн монголын уран зохиол	С.Лувсанвандан	72-82
	論文	БНМАУ дахь орчин үеийн хятадын нийгэмийн судалгааны байдал, асуудал	Батсух	83-90

第12号 1989年	論文	モンゴル活仏政権とエチオピアの1960年クーデタ	村井 宗行	91-104
	研究ノート	モンゴル牧畜生産のいわゆる停滞をめぐって	飯田 由里子	105-122
	翻訳	Д．ダシプレブ 「社会主義社会」研究者のノート	飯田 由里子	123-125
	随想	”Элсэн” шар манангаас үүдсэн бодол	М.Онуки	126-130
	雑感	二十二度目の春	松本 典子	131
	雑感	夢	萱野 亜希代	132
	雑感	わたしのこと	片山 瑞	133
	資料	Монгол судлалын шинэ чиглэл	М.Онуки	134-144
	資料	Цэвэлванчигдоржийн ”Малчдад туслах 5 хошуу малыг арчлах арга, нийт ба ялангуяа хонины өвчинг засахын аймаг” гэдэг судар	Д.Цэдэв	145-150
	資料	Цэндийн орчуулсан ”Монголын нууц товчоо”-ны гар нооргыг хэвлүүлэхтэй холбогдуулан хэлэхэд	Ц.Хандсүрэн	151-153
	資料	”Монголын нууц товчоо”	Б.Цэнд	154-193
	資料	Эцэг Цэндийн тухай миний эх Рэнчингийн Дондог (1899онд төрсөн) дурсан ярьсан нь	Ц.Хандсүрэн	194-196
第13号 1990年	論文	現代モンゴル牧畜業の問題点 －生産・地域共同体としてのホトアイルの再評価－	飯田 由里子	2-39
	論文	Говь гэж юу ба монголд хэдэн говь бий тухай	Түр.Баасан	40-77
	論文	Өвөр монголы эдийн засагт хөдөө аж ахуйн ээлэх байр, хөгжлийн түвшин, хурдац салбарын болон нийгмийн бүтэц	Ц.Баатар	78-87
	研究ノート	『ゴビ・プロジェクト1990』	今岡 良子	88-98
	研究ノート	A Glance over Studies on Modern Mongolian Literature in Japan	Yutaka Shibayama	99-102
	書評	モンゴル近代史研究の新しい傾向： С. ИДШИН- НОРОВ, XIX-XX ЗУУНЫ ЗААГ ДАХЬ МОНГОЛЫН НИЙГЭМ ЭДИЙН ЗАСГИЙН БАЙДЛЫН ЗАРИМ АСУУДАЛ, ШИНЖЛЭХ УХААНЫ АКАДЕМИЙН ХЭВЛЭЛ, УЛААНБААТАР, 1986	村井 宗行	103-105
	書評	エチオピア革命史研究の基礎的文献： Markakis, John and Nega Ayele, Class and Revolution in Ethiopia, The Red Sea Press, Trenton,New Jersey,FirstAmerican Edition 1986	村井 宗行	106-115
	翻訳	Д．ナツァックドルジ著「有翼の駿馬 鳥のような川原毛ショボーン・サーラル」	(訳) 芝山 豊	116-118
	資料	Цэвэлванчигдоржийн зохиол " Таван хошуу малын Өвчин засахын арга” нэрт судар	Д.Цэдэв	119-126
	資料	”Монголын нууц товчоо”	Б.Цэнд	127-168
	資料	モンゴル人民共和国協同組合法	(訳) 井上るり子・吉本周平	169-185
第14号 1991年	論文	BURKHAN AND KAMI － A Comparative Study of the Idea of Deity in Mongoliaand Japan －	Yutaka Shibayama	2-16
	調査報告	日本・モンゴル共同　第二次ゴビ・遊牧地域研究調査（1991年、夏）の報告と今後の課題	小貫 雅男	17-30
	翻訳	片山潜「モンゴルについて（旅行印象記）」	生駒 雅則	31-41

第14号 1991年	書評	メンギスツ政権崩壊とその理由を予言した論著： Mengisteab, Kidane, Ethiopia: Failure of Land Reform and Agricultural Crisis, Greenwood Press, NewYork,Westport, Connecticut, London, 1990	村井 宗行	42-54
	資料	”Монголын нууц товчоо”	Б.Цэнд	55-117
第15号 1992～ 1993年	論文	牧民の民主化と遊牧地域開発論 ～ネグデル離脱後、市場経済を乗り越える独立遊牧民協同組合設立の基盤にたって～	今岡 良子	2-12
	論文	Монгол орчин үеийн яруу найргийн шинэ сэдэвүүд	М.П.Петрова	13-18
	研究ノート	モンゴルの新しい国際関係と協力体制のあり方	熊坂 光芳	19-29
	調査報告	第三次ゴビ・遊牧地域研究調査（1922年，夏）の報告（抜粋）	小貫 雅男	30-48
	調査報告	'92秋～'93春 越冬調査報告	伊藤 恵子	49-63
	調査報告	越冬調査報告 ～ツェルゲルから～	新納 智美 松本 典子	64-82
	書評	エチオピア農民運動史の新しい視野の提供：モンゴル牧民運動研究との比較研究の必要性急務； Tareke, Gebru, Ethiopia: Power and Protest, Cambrige University Press,Cambrige,1991	村井 宗行	83-93
第16号 1994～ 1995年	論文	生産と生活、その変化と不変	萱野 亜希代	2-21
	調査報告	1995年、市場経済移行後の『ウーリントヤー協同組合』 －バヤンホンゴル県東ボグド山ツェルゲルにおける調査報告－	今岡 良子	22-37
	インタビュー	ナツアックドルジン・アーナンダシュリーと会って	芝山 豊	38-45
	翻訳	モンゴル諸族文化会議の総括	生駒 雅則	46-49
	追悼	司馬さんのこと	芝山 豊	50-51
第17号 1996～ 1998年	論文	1989年、『経済改革』下のネグデル	今岡 良子	2-17
	論文	旧コメコン諸国としての 中欧（ポーランド・ハンガリー）に対するアプローチのあり方	熊坂 光芳	18-35
	論文	村上春樹とモンゴル もう一つのオリエンタリズム	芝山 豊	36-47
	研究ノート	モンゴルの笑い話　～オニゴー～	山本 裕子	48-53
	雑感	初のモンゴル	熊坂 光芳	54-55
	雑感	司馬遼太郎フェローシップの対象に選ばれるにあたって	佐野 一道	56
第18号 1999～ 2000年	論文	ハンガイとゴビの両地域における牧地の植生について	三秋 尚	2-32
	論文	援助をめぐるモンゴル国と日本 －相互発展の道はあるのか－	大西 尚美	33-52
	論文	1990年代のモンゴルの政治と経済 －1990年代のモンゴルをどのように評価するか－	村井 宗行	53-62
	調査報告	1999年夏のツェルゲル －分校の閉校・定住地に向かう流れ－	今岡 良子	63-77
	講演	司馬さんのモンゴル	芝山 豊	78-92
	翻訳	政治の333オニゴー	Б. ツェンドドー （訳）山本 裕子	93-131

第19号 2001年	論文	クリエン再検討	磯野 富士子	2-20
	論文	1911年のボグド・ハーン政権に帰順した内モンゴル旗数の再検討	ジュリゲン・タイブン	21-30
	論文	Б．ツェンドドーにみる現代モンゴル －『政治の333オニゴー』より－《人物論編》	山本 裕子	31-39
	論文	民主化運動について（その1） －民主化運動はいつから始まりいつ終わったか－	村井 宗行	40-49
	論文	90年代のモンゴルと中欧 / 中国 －現旧社会主義諸国と日本のあるべき姿勢－	熊坂 光芳	50-62
	論文	2000年春のゾド報道から見えるもの	塩見 英恵	63-79
	調査報告	2001年夏のツェルゲル －遊牧民の心に浸透する資本の論理－	今岡 良子	80-95
	翻訳	ハタン・ソーダル山の伝説と ' トーント・タイハ ' の儀式について	今岡 良子	96-100
第20号 2002年	巻頭言	第20号によせて	芝山 豊	2-3
	論文	内モンゴルホルチン地方における子どもの遊び方の変容について	白 雪峰	4-19
	論文	内モンゴル民歌「ガダ・メーレン」についての一考察 －モンゴルの英雄はなぜ中国で歌われたか－	石原 邦子	20-35
	論文	モンゴルにおける伝統と変化	村井 宗行	36-55
	論文	Б．ツェンドドーにみる現代モンゴル －『政治の333オニゴー』より－《作品論編》	山本 裕子	56-68
	調査報告	気候と遊牧が乾燥草原の生産力に及ぼす影響 －モンゴル国 To'v 県 Bayan-O'njuul 郡での調査報告 －	Nachinshonhor, G.U.	69-73
	調査報告	2002年夏のツェルゲル －ゾドの後はゴールドラッシュ、首都ラッシュ－	今岡 良子	74-91
	研究ノート	モンゴルの環境と我々のかかわりを学び始めるにあたり	熊坂 光芳	92-100
	翻訳	モンゴル国土地関連法令集	湊 邦生	101-137
	日記	バヤンホンゴル県 ～バットツェンゲル家滞在記～2002年	山本 裕子	138-144
第21号 2003年	論文	「丑年の乱」一考察	タイブン .U	2-20
	論文	沢崎堅造とモンゴル	芝山 豊	21-32
	論文	モンゴル遊牧経済の「市場化」 ～民営化と経済主体の変化～	湊 邦生	33-46
	論文	市場経済へ移行する社会における地方に暮らす人々の適応実践 ～モンゴル国ドルノト県バヤンドン郡の牧畜制度と教育制度の事例より～	風戸 真理	47-67
	論文	モンゴルにおける伝統と変化（2） －前 編－	村井 宗行	68-88
	調査報告	2003年夏のツェルゲル 雨の年、ホルショーの再生か？	今岡 良子	89-110
第22号 2005年	論文	先祖供養に見るモンゴルと日本の文化特質の相違	ナランゲレル	2-12
	論文	Ｄ．ナツァクドルジ「黒い岩」をめぐって	芝山 豊	13-24
	論文	モンゴル国における「貧困家庭」 －七つの事例から考える－	合田 美穂	25-45
	論文	モンゴル国における首都移住問題 ～元遊牧民移住者のこれから～	藤本 泰子	46-62

第22号 2005年	論文	モンゴルにおける伝統と変化（2） －後 編－	村井 宗行	63-85
	論文	ＭＢＯによる民営化	チュルーン・チンゾリク	86-105
	調査報告	2004年夏のツェルゲル －家畜経営の復活、ホルショーの再生－	今岡 良子	106-120
	調査報告	2002年モンゴル国遊牧地域経済調査報告 －遊牧地域における社会経済の変化と遊牧民の反応－	湊 邦生	121-132
	翻訳・資料	モンゴル諸族とオイラート諸族の言語と文学の現状	ウラジーミル ツォフ教授報告 / 荒井 幸康 翻訳	133-151
	会員のページ	2004年夏　旅日記 ～ゴビでの出会い～	東森 大	152-156
	会員のページ	モンゴルと豪州／環境	熊坂 光芳	157-162
第23号 2006年	論文	On the Economy of Nomadic Pastoralism in Mongolia	Kunio MINATO	2-16
	論文	トゥレシ（tüleši）についての一考察 －文化人類学からのアプローチ－	ナランゲレル	17-24
	論文	モンゴル人の税金に対する意識 ～消費税と自動車税・車について～	島 英子	25-50
	論文	現代モンゴル・貧困層の女性労働 －現状と課題について－	三木 聡子	51-72
	論文	韓国におけるモンゴル人移住労働者の現状	玄 理英	73-94
	論文	内モンゴル・モンゴル族社会の変容 (上)	土井 一寛	95-113
	研究ノート	2005年12月香港ＷＴＯ国際共同闘争とモンゴルへの影響 ～世界の民衆は今何を～	東森 大	114-123
	調査報告	2005年夏のツェルゲル －ジャガイモを植え、立ち直る遊牧民たち－	今岡 良子	124-137
	会員のページ	遊牧民の未来に希望を抱いて －ビャンバスレン監督の「らくだの涙」と「天空の草原のナンサ」－	松村 晴恵	138-139
第24号 2007年	論文	Ｄ・ナツァグドルジの手稿「黒い岩」のデジタル解析	芝山 豊	2-9
	論文	アルホルチン旗におけるモンゴル族と満洲族のオボー崇拝	サインチョクト	10-19
	論文	エンフバヤル政権の性格 ― 2000～2004年 ―	村井 宗行	20-28
	論文	内モンゴル・モンゴル族社会の変容（下） ― 中国・統治システムからの考察 ―	土井 一寛	29-55
	調査報告	第３ホローの住民運動と「ジェンダーセンター」2007	今岡 良子	56-63
	会員のページ	私のモンゴル滞在記 ― 帰国後半年で見えてきたこと ―	大野 暢子	64-66

第25号 2008年	論文	ウランバートルの今を生きるシャーマンたち（上） －活動形態の変化と潜在的可能性について－	藤井 麻世	2-12
	論文	Emergence of Cross-National Social Surveys in Mongolia: What Have They Revealed?	MINATO　Kunio	13-30
	論文	ゴビ山岳部における牧地植生の旱魃による変化について	三秋 尚	31-42
	追悼	磯野富士子先生を偲んで	芝山 豊	43-45
	資料	インタビュー：磯野富士子先生と『オルドス口碑集』	芝山 豊	46-53
	資料	モンゴル語音楽用語小辞典	青木 隆紘	54-74
第26号 2011年 (電子版)	論文	ウランバートルの今を生きるシャーマンたち（下）	藤井 麻世	2-33
	特　集　「民主化」の20年			
	論文	Who Feels Left Out? Perceptions of Mongolians About Changes in Living Conditions During the Transition	MINATO　Kunio	34-45
	論文	モンゴル国における民主化を契機とした伝統医療の復興	内田 敦之	46-70
第27号 2012年 (電子版)	論文	移行期にあるモンゴルのテレビジャーナリズムのプロフェッショナリズム －「独立性」、「組織特性」からの検討　－	李 恩敬	2-18
	研究ノート	モンゴルにおける 日本語教育の現状 と課題	B. ヒシグデルゲル	19-23
	雑感	Санаанаас гардаггүй сар жилүүд	Раднаагийн Баттогтох	24-27
第28号 2013年 (電子版)	モンゴル核問題特集号			
	特集号発行に際して			1
		モンゴルの核問題	芝山 豊	3-22
		「ウランは原爆の原料になる。私たちの大地から掘り出してはいけない」 － 2012年、マルダイへ －	今岡 良子	23-40
		モンゴル国ドルノゴビ県におけるアレバ系コジェ・ゴビ社のウラン鉱毒事件 － 2013年6月15日現在のまとめ －	今岡 良子	41-54
		削減された核関連予算 － 2013年度首相直轄予算　第6プログラム 「放射性鉱物資源と核エネルギーの利用」－	今岡 良子	55-65
		「ウランは掘らん！ウランは売らん！原発？私たちにはいりません」 － 福島市民と心は1つというメッセージを安倍首相に届けたモンゴルの反核運動家たち －	今岡 良子	66-71
		モンゴル国の代表的な反核運動団体の紹介	箕原 丈	72-73
		『苦しみも未来も共に』 モンゴルの反核運動リーダーとの対話 緊急勉強会：「モンゴルを襲う核のゴミ － モンゴル核廃棄物処分場問題は終わっていない －」から	吉本 るり子	74-79
	年表	モンゴル国のウラン鉱山開発、原発建設、使用済み燃料処分場問題に関する年表	今岡 良子	80-88
	用語集	核エネルギー関係用語集 （日本語－モンゴル語，モンゴル語－日本語）	箕原 丈	89-98

編　集　後　記

◇ 2015 年の 6 月に「モンゴルの誇り高き豊かさとは」というテーマで留学生が中心になってモンゴル研究会が行われました。以来、月例会を続け、そこで中間発表を行った研究の一部が、本号に論文と研究ノートとして掲載されています。

◇私たち留学生は、モンゴル社会の中での経験を、日本での留学期間中に外から見つめ直し、失ってはいけないものとより良くし深めていかねばならないものを、日本での経験や研究を通して考え、その結果を共有するために形にしていこうとしています。それを暖かく見守り、時には厳しい指摘を行いながら後押してくれる場としてモンゴル研究会があります。

◇本号は創刊 30 号という記念の『モンゴル研究』です。発行が遅れたことをお詫びいたします。

（T. エネビシ）

『モンゴル研究』№ 29・30　創刊 30 号記念号　　2018 年 9 月 20 日発行 定価 500 円

編集・発行　モンゴル研究会

〒 562 － 8558　箕面市粟生間谷東 8 － 1 － 1　国立大学法人大阪大学
言語文化研究科　今岡良子研究室気付

モンゴル研究会 HP: http://mongolkenkyukai.jp/
e-mail: mail@mongolkenkyukai.jp

MONGOL-KENKYŪKAI (the Society of Mongolian Studies,Founded in 1970)

c/o Imaoka's office, Osaka University, Studies in Language and Society, Graduate School of Language and Culture　8-1-1 Aomatani-higashi, Minoh, Osaka 562-8558, Japan

MONGOL-KENKYŪ

Journal of Mongolian Studies

Commemorative Issue No.30

No.29·30

CONTENTS

Sept. 2018

Foreword ..... *Syuhei* Yoshimoto..... 1

Articles

Considering "Food Education" in Japan in Relation to Mongolian Slaughtering Traditions

..... *Yukiko* NOMOTO..... 5

Reevaluation of Mongolian Wool: From the Case of Inner Mongolia ..... ALUSU.... 25

Remarks

Study on Preservation Activities of Biodiversity in Grazing Lands in Mongolia

– Through the Case of Conservation Translocations of Tarvaga (Mongolian marmot) –

..... *Jargalsaikhan* LKHAMAA.... 56

Birth of a Company Based on Local Resources and People

– In the Case of Tea Made in Khuvsgul Province in Mongolia – Davaadorj TSERENNADMID..65

Remembrance

Memories of Naitō ..... *Masaki* MATSUOKA.... 71

In Memoriam Kyousuke Naitō ..... *Yutaka* SHIBAYAMA.... 75

In Memory of Hiroyuki Tani ..... *Masanobu* SENZAI.... 79

In Memory of Kazutaka Nakanishi ..... *Masanobu* SENZAI.... 79

Features for the "30"th Issue

For Tomorrow 83

< Interview> From Mongolia to Japan, From Japan to Mongolia

– A Conversation with Mr.Onuki and his Advice – ..... *T*. ENEBISHI ..103

List of Contents for Back Numbers ; Journal of Mongolian Studies №1 – №28..... 125

Edited by

MONGOL-KENKYŪKAI

Osaka Japan